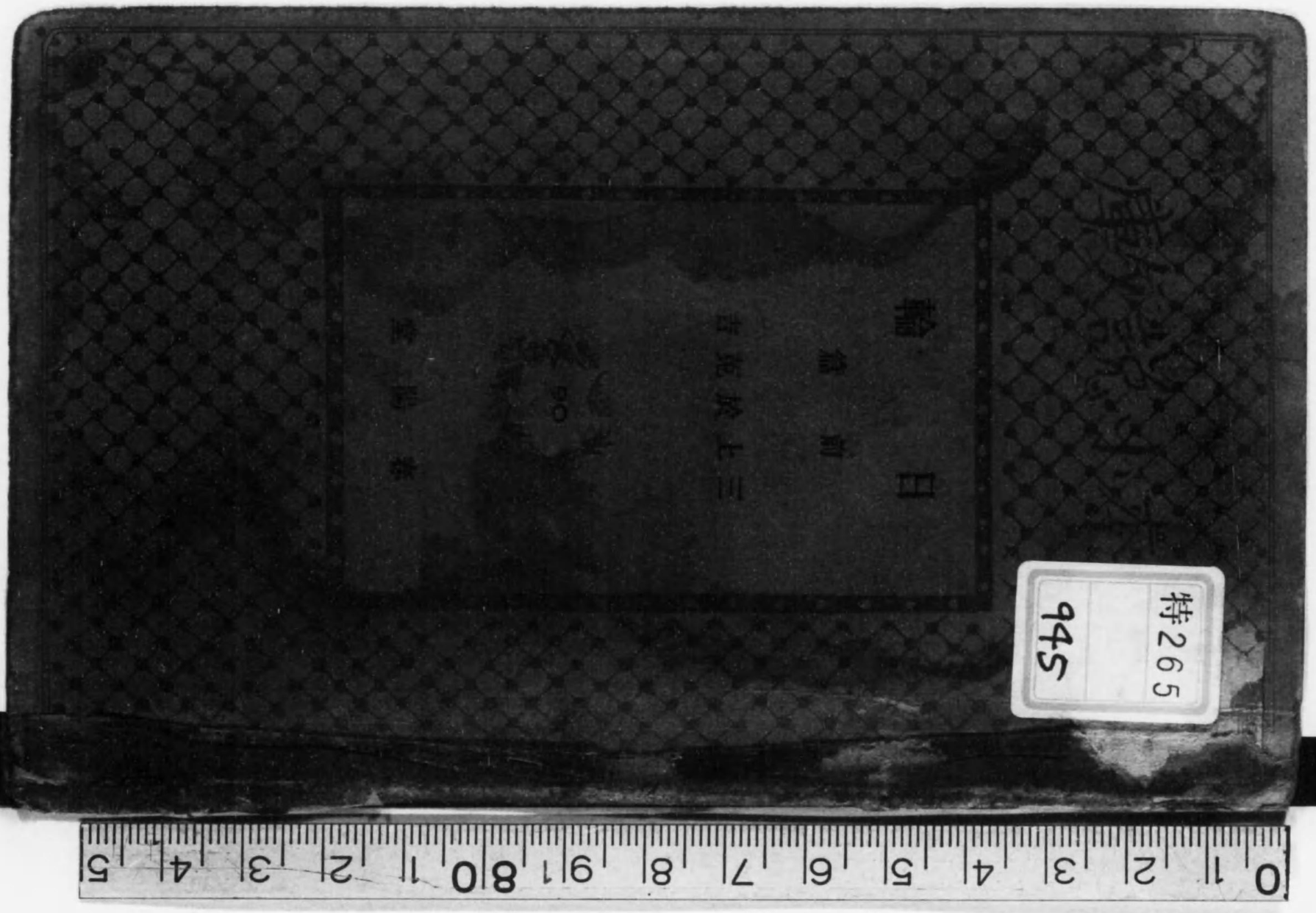


特265
945

特2[illegible]
945

春陽文庫 長篇小説

日輪

前篇

吉茂於上三

90

春陽堂

特265
945

吉莵於上三

340-274

日輪　前篇

美女憤怒

『あんた、どうしても決心がつかないの？』と、娘は淺ましいまでに充血した目で、男の横顔を睨み据ゑるやうにしながらいつた。

深い、緋色の長椅子に、男はぐつたりともたれうなだれてゐた。彼は答へない。兩手をこまぬいて黑く光る靴のつま先をみつめてゐる。

『あんた、はつきり、今夜こそ返事をなさいよ――』

娘は紫色にキラ〳〵底光りのする舞踏服を着て、大きなダイヤモンドを親玉にした首飾を、白い、細い指先でつかみしめるやうにしながらその前に突つ立つてゐた。

階下の遠いところから、小さなオーケストラが聞えてゐる――時々突拍子もなく高いクラリオネットが重苦しい、憂鬱なオーボーとからみ合ふ――

娘は音樂に耳をちよいと傾けていま〳〵しげに舌打ちをした。濃すぎる眉が寄つて、目の下と、唇が

まるでひどく食べ醉つてゞもゐるやうに眞紅だつた。

『フン、何て空騷ぎだらう』と、呟いて、

『ねえ、城木さん、私はもう、あんな音樂や舞踊や、馬鹿らしく丁寧なお辭儀や、お調子のうまく合つた會話なんかには、すつかり飽きてゐるんですよ――ねえ、こんな烈しい吹雪の晩に、だしぬけにあんたと私が、この家から姿を消してしまつたら、どんなにあの平穏無事な、その癖他人の内輪事の噂にばかり興味を持つてゐる社交人達が驚くでせう――ね、はつきり返事をなさいよ。私はもうすつかり決心してゐるのよ。こんな烈しい吹雪の中を、小さな自動車で遠くへ行つてしまひませうよ』

男は初めて物憂げに顔を上げて、玻璃窓の方へ目をやつた。

美しい、しかしながら意志の弱さうな彼の目は、褪紅色のカーテンの隙間から見える夜の窓外を眺める――黑い深夜を、眞白に輝く雪が降りしきつてゐる。冷たい、かたい響をさら〳〵と立てゝ、雪片は窓玻璃に降りかゝる。さびしい〳〵音だ。その音にまじつて聞える管絃樂は妙にだるい。

『どう？　どうしても、あんたには決心がつかないといふの？　城木さん』

娘はせまつた。踵の高い、金色のボタンで飾つた靴で、ふか〳〵とした、朱色の絨毯を強く踏んだ。

城木と呼ばれた男は、力弱く目を相手に移した――

『そんなにせかずに下さい。どうぞ――ね、お嬢さん――』と、彼は訴へた。

娘は、じり〳〵と癇を立てゝ、憤ろしげに叫んだ。

『お嬢さんだなんて！　あんたはいつまでうちの居候なの！　もう立派に大學をすました人ぢやアありませんか――私にだつて、名がありますわ。なぜ、德惠つて呼んでくれないの？　え、あんた』

しかし、男はたゞ屈し切つてゐた。美しい額も、やゝ窶れをみせた頰も、まるで紙のやうに蒼ざめてゐた。それは腹立たしげに上氣し切つた娘の顏と、極端な對照を見せてゐた。

『考へさせて下さい。もう少し――』と、城木は細かい鼠縞の背廣の腕をまた組んでしまつた。

『意氣地なしねえ。いつまでたつても、考へる――考へるだけがあんたの臺詞だわ。いつまで考へてゐたつて、私達の生活が、どう展開するのぢやあないではないの。今夜こそ、最後の決心を私はしてゐるのよ』娘は、歩み寄つて、うなだれた男の肩に手をかけた。

この馱々つ子じみたブルジョア娘の、どこまでも押强い言葉に、城木と呼ばれる青年がはつきりした返事をあたへ兼ねるにも、尤もな點もあつた。幼いころ、この長沼家の、しがない門番代りの老僕をつとめてゐた一人の父親に別れてから、中學から、高等學校、法科大學までも、學問が好きなまゝにやらせてもらへたのも、この德惠子の兩親の情からであつた。當然、うき苦勞を重ねて、ことによれば夕刊を賣りながらも、今日明日の糧を得かね、飢に迫られなければならなかつたかも知れないところを、まるで富裕な家の息子でゝもあるやうに、無事安穩な今までの日が送れたのを考へると、孤獨薄命な生れつきであるだけ、恩家の慈悲をどこまでも忘れることが出來ないのだつた。その氣持を、女はたゞ意氣地なしのやうに、踏み切りのつかない男のやうにいふ……

『あなたには、僕の苦しさが到底わからないんです。僕はお父様やお母様の、情でこの世に出た男だ。それが、たとひどんな場合だつて、そのお二人に取つてかけ代へのないあなたをつれて家出する——そんな恐ろしいことが、さう突然決心出來る筈のものではない。ね、そこを考へて下さい。僕はあなたのいふまゝにすれば、犬畜生のやうにいはれなければならん。一切未來を葬つてしまふ外はなくなる——』

『あゝ、もうあんたの義理人情は聞き飽きたわ。そんなに、恩の、義理のと言つてゐるあんたこそ、飼はれて生きる犬猫の氣性がいつまでもとれないんだわ』と、德惠子は相變らず癇立つた調子でじれて——

『恩の何のといつたら、あんたよりも私だわ。この家にたつた一人娘に生れて、それがその家も親も捨てようといふんぢやないこと——ね、私にはあんた一人が、あんたのよくいふ、生活でもあれば未來でもあるの——だのにあんたは何故外のことばかり考へてゐるんでせう！　結局、あんたは私を愛してはゐないんだわ！』

城木は、美しい、しかし力を虛脫されたやうな目を上げて、ふたゝび德惠子を仰いだ。

『どうしてそんなに荒つぽいんです？　もう少し落着いて下さい、そんな風にあせつたつて——』

『でも、もうどう落着いたつて泣いたつて、拜んだつて、仕方がないんですもの、家で許してくれつこはないわ。愚圖々々してゐたら、なほのこと苦しくなるばかりぢやないの——どうしたつて一人娘の私は、お婿さんとかを取らなけりやあならないんです。階下の部屋でさわいでゐる男達の、まあ半分は私

を目當てぢやないの——あれはみんな、あんたの競爭者ぢやないの——あんた、何とも思はなくつて？　かうしてゐればゐるだけ、私は穢されてまふのよ。あの人達の目で——』

城木は苦しげに嘆息した。感覺的な戰慄が、遁れられさうもない運命にとらへられた男の、蒼ざめた、土氣色の顏面を走りすぎた。

『そんなに僕をいぢめて、どこが面白いです？』と、彼は呻吟した。

『私がどんなに穢されても、あんたは構はないの？　え、城木さん。あんまりあんたが愚圖々々してゐると、私、どんなことになるか分らなくつてよ——私はかいなでの貴族の令嬢で、をさまり返つてゐられる女とは違ふんです——仕方のない馬鹿娘なんです。そんなことはもうとつくに承知してゐらつしやるあんたぢやないこと？』

娘は男の肩にもたれかゝるやうにした。

窓には、輝く雪がさら〳〵と冷たい音を立てゝゐる——階下の管絃樂は、沈み切つた古風なハンガリヤ舞踊曲を、だらけた調子で響かせつゞける。

『ね、どうするの？　あんたがいやなら、私一人で行つてしまふことよ！　どんなに素晴らしいでせう。こんな吹雪の晩、だれにも氣づかれずに、こんな窮屈な、かた苦しい家を逃げ出して、廣々とした、涯しもないやうな生活の世界へ這入つて行くなんて！　愚圖々々してゐては駄目なことよ。今、かうして

ゐるうちにも、すぐに邪魔が這入ることよ。ねえ、早く行きませうよ――私、こんなにお金を持つてゐるの。こんなに盗りためて置いたのよ――』

德惠子は、紫色に光る舞踏服のかくしに、細い、白い、珠玉の輝く手を突き込んで、プラチナ色の細工の手提袋を取り出した。桐の花のやうな色彩の紙幣が何枚かと、ごちや〳〵に丸めた小紙幣が詰めこまれてゐた。

『ね、こんなにもつてゐるのよ。何でも、かぞへて見たら七千圓位あつたわ――でも面倒くさいから、すつかりは數へて見なかつたの』

男はまた身ぶるひをした――

『あなたは盗みをしたんですか？』と、一種、上釣つた聲で叫んで、ギョッとしたやうな眼付で仰いだ。

『えゝ、盗んだわ――盗んだつて役にも立たずにお母さまが隠して置いた現金なんですもの――お母さまが、どこにお金をかくして置くか、子供のころから、私、ちやんと見てゐたの。祕密は誰だつてあるわ。見つかつたつて、お母さまも公けに私を責めることは出來ませんわ』

城木はみつめつゞけた――

『早く元の場所にお戻しなさい。盗みなんて、お母さまのものでも、誰のものでも駄目です。いけません――返していらつしやい。見つかつたらおあやまんなさい。その方がいゝ――ね、お返しなさい。』

德惠子は、突つ立つた儘、提袋を――七千圓の盗み金が、きう〳〵と押し詰まつてゐる、プラチナ色

の網袋を振りまはして、冷たく、乾いた笑ひを笑つた。

『何が返すもんですか――一度盗んだものを返したつてどうなるの。あんたが盗んだ、私の純潔だつて返せやしないぢやないこと――それとも、もう一度私を、何の夢もなかつた小娘にしてくれることが出來るといふの――』

だが、城木はまた項垂れた。娘の思ひ切つた苦い言葉に彼はたゞ唇をかんだ。

『人を盗みにして置いて、まだ、あんたは決心がつかないなんて！　私、もうあきらめたわ。』

德惠子は手提袋を、朱色の絨毯を敷き詰めた床に、叩きつけた。

城木はあわてゝ、淺ましく屈んで叩きつけられた手提袋を拾つた。

『いけない、お返しなさい――返して下さい。僕の名譽のために――』

『ふん！』娘は嘲笑つた――カラ〳〵と、自棄な、乾枯びた調子で嘲笑つた。

『あんたの名譽だつて！　名譽なんてものは、もつと男らしい、はつきりした人間がいふ言葉ですわよ。あんたに何があるでせう。女々しい、卑怯な――その癖、あんたに言はせれば恩人の娘さへ盗むやうなコソ〳〵泥棒のいへる言葉ぢやあないのよ。もう、私、未練なんかありはしない――もうどんなにでもなつて見せて上げることよ。私が、たつた一人でこの家を抜け出して、みじめな、しがない身の上になつたら、あんたはさぞ滿足でせうよ。それこそさぞ名譽でせうよ。』

この貴族の家で今夜催した内輪の新年招待會は、もう閉會の時刻が迫つたので一層賑しかつた。歡樂

を追ひ求める若者達は、今宵の會合に一種の色彩と昂奮とを添へるために招かれた二三の女優や、女音樂家に舞踊の手を求めるために夢中になつてゐるのであらう――ある人達はひそかにその女の輝かしい瞳に觸れることだけを目的にして來た、この家の愛嬢、今夜の女王の、この紫色にきらめく舞踏服を着た德惠子の姿をたづねて、舞踏室から休憩室、さては冬を知らない春の花がたわゝに咲きさかつてゐる溫室へとさまよつてゐるであらう――

華美で、單調な舞踏曲は、いつまでもいつまでも階下の遠い部屋までつゞいてゐる。

『ねえ、城木さん、愚圖ついてゐる時ぢやあないのよ。一分考へてゐれば一分だけ、この家が、この家の空氣が、因襲が、世間が、私達を身動きも出來ないまでに壓迫して來ることよ。決心が早ければ早いほどいゝ筈です。思ひ切つて打てば、鋼の鎖だつて切れてしまふわ。ねえ、何の遠慮があるでせう――愛し合つてゐるあんたと私が、新しい愛の生活をするために古い、不自由な、不合理な世界から拔け出すこ

とが――』

德惠子は、どこまでも無氣力に屈し項垂れてゐる男を、勵まし激させるやうにいつて、言葉を途切らせたが、

『私がお金を盜んだことなんか、何の心配もありはしないわ。詰らないことだわ。高々七千や八千の金で、自分達が生んだ娘を罪人にもしないでせうし――それに、家門第一、名譽第一の家ですもの、たとひ十萬圓盜んで逃げたつて訴へて出る勇氣もありはしませんよ。そんなこと、ちつとも恐れる必要はないわ。そんなことより、私達は私達の烈しい望みが、下らない外部の力で根絶やしにされるのを怖れなければなりません――それも、あんたがしつかりしてゐてくれゝば兎に角、こんなにこんなに弱つたらしい、臆病な方なんですもの！　ね、もつと勇氣を出して、すぐに決心して頂戴、城木さん……』

黑い夜の窓の窓玻璃に、白い冷たい雪が、サラ〳〵、サラ〳〵と硬く響きながら、銀色に降りかゝる方を、德惠子はいら〳〵しげな大きな瞳でみつめて唇を嚙んだ。

『私達は、何をこはがる必要も、何に遠慮する必要もないわ。愛し合つてゐるものが、二人で棲むに不便な世界を離れて、自由な、小さな幸福をたづねてさまよひ出すのに何の科があるでせう――どこへ行つても、スチームの熱でホカ〳〵と、生暖かい、だゝつぴろい、香料の胸の惡い匂ひで一ぱいな虛僞の家を捨て、身を切るやうな吹雪の冷たさの中へ、どんなに眠り惚けた魂でも眼醒まさずには措かない雪の中へ出て行つたら、どんなにさつぱりするでせう――ねえ城木さん、すぐに行きませうよ』

城木は鈍く嘆息した。

『お嬢さん、あなたはあんまり夢を見すぎてゐるのです——あなたはあの眞白な、トゲ〳〵しく光る吹雪の冷たさを知らないんです——僕にはこんな暖かい、大きな部屋から、あの吹雪の中にあなたを連出すことは到底出來ない。あなたは今暖かすぎるから、冷たい世界に出たらどんなに快いだらうなぞと空想なさるんですよ。一度、あなたがほんたうにあの冷たさを味はつたら……』

『ほ、ほ、ほ、ほ。』と、德惠子は急に無遠慮に、ヒステリツクに笑つた——

『城木さん、あんたは私をそんなに世間知らずだと思つて！　深窓の貴女とかだと思つて？　まあ、馬鹿らしい——』

德惠子はやゝ薄手な、紅い唇をねぢ曲げるやうにして、意地惡げにつゞけた——

『若し又、私をそんなに世間知らずな、甘い〳〵ねんねえ娘だと思ひながら、私とこんな事になつたのだとしたら、あんたはいつそ惡黨よ——私の世間知らずを利用して、一時の快樂の爲に私を誘惑したといはれても仕方がないのよ。』

『馬鹿な！』と、城木は苦しげに呟いた。

『どうして僕にそんな惡意があるでせう。二人は偶然に愛し合つてしまつたのだ——僕はあの偶然を悔いてゐるのです。あの晩、僕にも少し意志の力があつたら、こんな苦痛を今味はゝずに濟んだのに——

長い間、僕はこの邸に出入して、殆どこの邸の人間のやうにして育つて來ながら、一度だつてあなたに戀しようなんて野心はなかつたのに——そんな大それた考へはもつてゐなかつたのに、あの晩、どうして僕の心があんなに狂つてしまつたのでしたらう——』

德惠子はぢり〳〵と眉根を寄せた。

『もう、そんな申しわけは澤山よ。つまり、あんたは私がいやになつたんだわ。それならもうそんなに悔いたり悲しんだりして見せなくとも、いやだ——お前と暮すのなぞいやだといつてくれゝば澤山——あんたに戀したのは、最初つから私なの……私はまだお下げにして女學校に通つてゐた娘つ子の時分から、あんたの美しさや、あんたの才能や、あんたのいろんなものに戀してゐたのよ……その戀の埋もれた熱火が、あの晩ちよいとした衝擊を受けて爆發したゞけなの！　もし責任をとやかういふなら、それは私にだけあるのだから、そんなに悔いたり悲しんだりなさる必要はないわ——もう分つてよ。私はあんたに嫌はれたのよ——それでいゝわ。』

男は、自分の側から急に離れさうになつた女を、慌てた調子でおさへた。

『德惠子さん、そんなことを言つては困る。どうしてあなたを嫌ふなんて——たゞ、あなたと——恩人の娘のあなたとこんなことになつたのさへ自ら責めねばならぬのに、どうしてその人を家から引き出すことが出來ようと言ふだけなのです——さうした不德を犯すことは、到底出來ない氣がするだけなんです』

『でも、それは私を嫌つたと同じことになるのよ。この儘こゝにゐては、とても許されない二人の間なんですもの！　とてもあの思ひ上つた兩親が、あんたを私のお婿さんにしてくれる筈はないんですもの！』

そして德惠子は、城木の自尊心を傷つけて、その憤りから勇氣を喚び起させようとするやうに——

『現にあんたを——首席で出た學士を、城木、城木つて、お客の前でも呼び捨にする兩親ぢやあありませんか。二人の仲をうす〳〵感づいても默つてゐるのはもし事を荒立てゝ、あんたに居直られて、世間の評判にでもなると、婿取前の私に傷がつき、家名が汚れるといふ心配からだけですわ。その內に、高壓的に、どうしても婿を取れ——何とか子爵の御次男と結婚しろと、頭から私を抑壓してしまはうとする肚はちやんと見えてゐるのよ。そんな兩親のそばに、どうして長く暮してゐられるでせう！　早く自分から出て行つて、鼻を明してやらなければ、私には耐へられないの。そんなに臆病な、そんなに意氣地のないあんたでも、私と一緒に生きてゐる中には、私の裡に燃えてゐる活力で必ず男らしい人に生れ變らせて上げますわ——それが私の大事なあんたを、長い間侮辱して來た兩親への私としての、復讐なのよ。』

城木は、令孃に激され、突き進められながら、光のない眼付で、悲しげに呟いた。

『しかし——德惠子さん、僕はこの邸の門番の子なのです——御兩親の愛顧がなければ、路頭に迷つて

孤兒院でゝも育つ外はなかつたのです。それがどうやら人並の教育を受けて、御兩親の目からは兎に角、世間からは多少望みのある青年と見られることが出來たのもこちらの恩ですもの——』

『戀はすべてに勝たねばならないのです。』と、德惠子は、突然、燃えるやうな、いぶるやうな黑瞳で、男を眞直に見て叫んだ。

『戀は勝つか負けるかだけなのです——戀は自分たち以外の世界への挑戰なのです。私達の戀は最初から、周圍や世間への戰ひだつたのです——今になつて、そんなことにいつまでもこだはつてゐるなら、つまり、あんたは私を戀してなんぞゐはしないのです——あんたは理性の洗禮さへも經ない、意氣地のない、女々しい感情と官能とに溺れて、たゞ私の若さや、夢や、肉體に醉つてゐたゞけなんだわ——まあ、けがらはしい！　いかに何でも、こんな〳〵、こんな無氣力な人とは思はなかつたわ！　もう、よくつてよ！　私は馬鹿だつた！』

艶やかに、美しく取り上げられた黑髮は、勃發した憤りに根が動くやうに見えた。黑い大きな瞳は血紅色の炎に翳り、唇はわなゝきながら色を失つた。紫に光る着物の下で胸は膨れ、ブル〳〵震へる手は、例のプラチナ色の網袋の提げ鎖を、千切れさうに引つ張つた。

『どんな困難でも、崖でも、深淵でも、戀し合ふ二人は抱き合つて飛ぶのです。戀は危險と同意語ですよ——その眞理さへ知らない人にどうして一人の女性を占有する力があるでせう！　あんたが臆病で卑怯で、意氣地のないことはとうから氣がついてゐましたけれど、まさか、これ程だとは・・・私は馬鹿でし

たわ！』

辱しめても、罵つても依然として腕を拱いて頭垂れてゐる男を、德惠子は心からの憤怒と絶望とにくすぼり燃える目で睨めつけた――誇りを傷つけられた涙が光つた。

『ぢやあ、これでお別れだわ！』

城木は蒼ざめた顔を上げて、土氣色の唇で、うめくやうに哀訴した――

『德惠子さん――僕を罵つて下さい。賤しめて下さい。しかし怒らずに下さい。どんなに僕が苦しんでゐるか察して下さい。』

『あんたに人間の苦しみなぞが分るものですか――全力的に望んで全力的に敗れる人だけが苦しみの味を知るのです。御都合主義の八分目の、その日まかせの感情で生活して、人々に弱々しい哀願の目だけしか投げられないやうな、戀さへも出來ないやうな人に、どうして苦しみなんかゞありませう。』

『あんたは世間といふものを――生活といふものを御存じない――』

『いらないおせつかいですわ。私にはあんたがそんなに大事にする世間なぞといふものは用はないのです――自分を失はなけりや知ることの出來ないやうな世間なんか！　ぢやあ、城木さん、私たちは今夜からもう他人ですことよ！』

と、憤りの涙をたゝへた德惠子が、嗄れたやうな聲でさう叫んで、この二人だけの部屋を出て行かうとした、その瞬間、音もなく入口の扉が開いて、そこに禮裝した中老婦人の姿が立つた。

少し薄くなつた髪にたつた一つ大きなダイヤモンドをきらめかし、壁色つぽい、いぶしのかゝつたやうな金で、ほこりかな鳥を縫はした裾模樣を着たその女は、權高な目で二人をぢつと見入つた。

城木は、その女を認めると、はじかれたやうに椅子から飛び上つた。

追放

裾模樣の中老貴婦人の、突然の出現は、城木をひどく驚愕させたやうに――殆ど恐怖さへさせたやうに見えた。

『あ、奥さま……』と、彼はまるで艶氣を失つた唇で呟くやうにいつて、無器用に頭垂れた。

この貴婦人はいふまでもなく、今夜の招待會の女主人、德惠子の母親、長沼男爵夫人に外ならなかつた。

夫人は、閾際にたゝずんだまゝ、棘つぽい目で、室内の二人の容子を見比べるやうにしてゐたが、取り澄ました靜かな足どりで、母親が現れたので部屋を出て行かうとする歩みを止めた德惠子の方へ近づいた。

『どうしたの？　どうしてあなたはこんなところに來てゐたの？　何だか、泣いたやうな目をしておるでぢやありませんか？』と、さう言つて、ぢつと姿をみつめた。

『さあ、あつちへいらつしやい。あちらでは皆さまがあなたを探してゐますよ――それに中條さまと、

最後のワルツのお約束がしてあるさうぢやありませんか――さあ、早くいらつしやい』

徳惠子は、腹立たしさを強ひて抑へてゐるやうな母親の顏を、怖れ氣もなくまともに見返して、今までとはまるで違つた、むしろこの場合、あまりに明るすぎ、あきらかすぎる笑ひを笑つた。

『ほ、ほ、ほ。ほんたうにさうでしたわ。中條さまがあんまりしつこくおせがみになるから、お申し込みを受けて置いたのだつたわ――でも、その時、外のことを考へてゐたので、つい忘れてしまつたんですわ』

『そんなことで、御主人役のあなたがどうします――さあ、いらつしやい』と、夫人はいかつげに繰り返した。

『まゐりますわ――そしてうんと踊つて上げますわ。ねえ――今晩一晩でも――お母さま――』

徳惠子は上釣つた調子で、さういふと、急ぎ足に部屋を飛び出して、後手に、パタンと音をさせて扉を閉めた。

母夫人は眉を寄せて出て行つた娘を見送るやうにしたが、すつかり恐縮してゐる城木が、これも部屋を去らうと扉の方へ近づくのを、冷たい、いふにいへぬ冷たい調子で呼びかけた。

『城木さん、ちよつと待つて頂戴。』

彼女は部屋の中央の、黒く光るテーブルの側の、褪紅色の肱椅子に腰を下した。蒼白い、やせた、神經的な片手を黒いテーブルの上に倒はせて、ギラ〳〵と珠玉の光る片手で、襟にかけた頸飾を手さぐりながら、

『まあお掛け。』

でも、城木は腰を下さなかつた。首席出の法學士は、まるで柔順な中學生が校長の前に出た時のやうに、中老貴婦人の前に立つて、相手から目をそらしてうつ向いた。

夫人は白眼勝ちな、細長い目で、じろ〳〵と青年を眺めたまゝ、暫く口を開かなかつた――やがて彼女はひからびたやうな語調ではじめた。

『全くびつくりしてしまつたよ、階下でお客さま方の出入をよく氣をつけてゐてくれるだらうと思つてゐたあんたが、こんな處に來てゐるなんて――それも徳惠子と一緒に――こんな時刻に――』

城木は答へなかつた。うつ向いたまゝ身じろぎもしなかつた。

『こんな時刻に――こんな部屋に若い娘とたつた二人で――何といふ不作法なことでせう――私はいつて置きたいのだが、ねえ、城木。あの娘は今大事な時なのだよ、殊に今夜は、あの娘に取つて大事な晩

だよ、それ位なことが分らないあんたでもあるまい。』

夫人は皮肉な刺すやうな口調で言つた。

『それとも、あんたは、德惠子をよる夜中どこへ連れ出しても差支ない、下等な、育ちの惡い娘だとでも思つてゐるのかえ？　それはあんたの目には、どんな娘に見えるか、私には分らない。だけど、あの子は、あれでもこの長沼家の一人娘なんですよ――私にはかけ代へのない一人娘なんですよ。私達は何のために、今夜この招待會を催したのでせう――可愛い一人娘に、少しでも立派な良人を持たせてやりたいためばかりではないか。新聞だつて、今夜の會合は、長沼家の婿選みのためだつて昨日も書いてゐる。それを知らないあんたでもあるまい――今夜のお客方が、娘があんたと一緒にこんな部屋に――こんなに遠ざかつた部屋に、たつた二人でゐるのを見たらどうだらう――もう誰だつて、娘の良人にならうと思ふ人はなくなります……とりわけ、あんたなんぞと！』

長沼男爵夫人は、娘のはしたない振舞に對する怒りをまで一緒にして、鋭い罵倒を城木にあびせかけた。

項垂れて、石のやうに默り込んでゐた若ものゝ肩のあたりがさすがにびりゝつと戰慄した。

城木は低くいつた――

『お嬢さまが、三階に御用があるからお供しろと仰しやつたものですから――』

『いゝえ、そんないひわけは聞きたくはありません』と、夫人は癇癪のために、却つて低められた聲で

頭から押しつけた――

『誰がまた、娘があんたなぞとどんなところにゐたつて、後暗いことがあらうなんかと思ふものですか――德惠子は私の娘です。あんたなんぞに興味を持つやうな、そんな育て方はしなかつた積りだからね。誰もそんな心配なんかしてやしない。たゞ、他人樣が見たら――といふんですよ』

城木はまた石に還つた。

夫人は相手を、さも憎々しげに睨めつゞけてゐたが、突然、これまでとはまるで違つた、薄氣味惡い物靜かさになつて、言ひ出した。

『ねえ、城木さん――あんたももう立派な、一人前の紳士におなりになつた。さぞ、昔の關係で私達に束縛されてゐるのがおいやだらうと、實は始終お察しゝてゐるのですよ』

青年はあまり急に變化した相手の語調に驚かされて、顏を上げた。

夫人はかすかな冷たい笑みを、艶の惡い口元にたゞよはして、

『私達も、つい長い間のおなじみなものだから、家の人同樣に思つて――何しろ親父さん以來の關係もあるものだから、まあ、いはゞ一生家のために働いて戴ける人のやうに思つて、おつき合ひして來ました。さぞ分らない人達だと、お蔑すみだつたらうと思ふんです――』

『飛んだことで――奧さま』

と、城木は相手の語調に限りもない冷酷さと嘲りとを感じながらも、默つてゐられなくなつて口をは

さんだ。

『いふまでもなく、私はあなた方の御恩でやつと人らしくなつたものです。父親から二代の御恩です。どうしてそんなことを思つても見るものではございません――』

『まあ、お聞きなさいよ』と、夫人は抑へつけて――

『これは邪推かも知れないけど、あんたの方に不滿があるから、從つて私達を馬鹿にもなさりたくなる。私達の一人娘に對しても、敬意なぞ拂つては下さらなくなる――あんたが、德惠子をそこらの下司娘でもあつかふ樣に、よる夜中こんな部屋にお連れになるのもさう考へると無理はないやうにも思はれます』

城木は額につめたい汗を浮べた。彼はこの癇癖な夫人と自分との間に、もう越ゆべからざる暗黑な罅隙が口を開けてしまつたのを感じた。彼は凍るやうな氣持で、相手の言葉に聞き入る外はなかつた。

夫人は少しも變らぬ、冷たく、いかつく、物靜かな口調でつゞける。

『それで、私、考へたんですがね、もうあんたをこれまでに育てゝ見れば、親父さんへの義理も、まあ果したといふものだから、この位のところで今までのやうな交渉を絶つた方がよくはあるまいかと――私の家でも、あんたのやうな秀才に家事整理をお願ひする程のこともないのだから――えゝ、もう、惡いことですとも、あんたのやうな立派な方をつまらない因緣で、こんな家の中に引とめて置くのは――それは社會に對しても不德義ですわ。あんたのやうな方こそ、廣い〳〵世間に出て、十分に腕を伸ばして働かなければならないのです――ね、ですから、もう今後は、私どものことなんぞは一切念頭に置かずに、自由の天地へお出掛けになつてかまひません。これだけのことを、實はとうからお耳に入れて置きたいと思つてゐたのですが、つい主人も私も折がなかつたものだから――ほんたうにこれまで、さぞ暴虐な私達だとお恨みでしたらうねえ――』

城木は何かいはうとして吃つた。咽喉が乾すばつたやうな氣がして聲が出なかつた。

夫人は、この體のいゝ解雇命令――といふやうな、絶緣宣告を試みると、靜かに椅子を離れて、立つたまゝ、

『ですが、城木さん、只今棲んでおゐでの家の方は、そのまゝお棲みになつてようございますよ。いつまでもあそこにおゐでになつても構はないのです』

夫人は、いぶしのかゝつた黃金色の裾模樣を、鈍い輝きできらめかしながら、部屋を去つた。

城木は、たつた一人取り殘されて、部屋の眞中に突つ立つてゐた。目を上げると、吹雪の吹きかゝる黑い窓玻璃に映つた自分の姿が、われ知らず眺められた。何といふみじめな男！　屈辱と昂奮とに額に汗が浮き、頰は紙のやうに蒼ざめ、唇は引き曲つた。肩がこけて、こはゞつた四肢に意氣地のない戰慄が走つてゐる――

『これが忠實な犬の身のなりゆきだ』と、彼は自らいやしむやうに獨語ちた。實際、彼は今の時世に珍しい內氣者だつたから、あらゆる侮辱と壓迫とを忍んで、これまでこの家に隷屬して生きて來たのだつ

た。彼はこの家の主人達が、門衛の孤兒である自分をとにかく最高學府にまで送つてくれたのは、後後何か役に立てたいためであらうと察してゐたので、相手のさうした功利主義を滿足させるために、勉強もすれば、忠誠も盡して來たのである。そして時々、自分があまりに卑屈すぎると思ふやうな場合があつても、そんなことを考へるのさへ忘恩だと自ら責めた。なぜなら、幼少から慘憺たる世界を經て來た彼は、若しこの長沼家の人達がなかつたなら、どのやうに不幸な生涯を送らねばならなかつたらうといふことを忘れることが出來なかつた。

だが、今になつて見れば、いつそ門番の孤兒として捨てられて、樽拾ひの苦勞をこの寒夜に味はつた方が幸福ではなかつたらうか？

——德惠子は罵しつてゐた——意氣地なし！　卑怯もの！　弱蟲！——と。ほんたうに、かうした言葉を百重ねてもふさはしい自分だ。何といふみじめな……

城木は奥齒を嚙みしめた。

——あゝ、こんな事なら、いつそ德惠子と今夜この家を飛び出してしまつた方が百倍もましだつた！　あの氣がさな、美しい娘にあんなに迫られながら、自分は全く心を石にしてこらへたのだ——誘惑からこらへたのだ。それもこれも、みんなこの家の人達に對する義理を思つたから——何といふ意氣地なし！　飼はれて育つた犬は、結局犬だ。奴隷はつひに奴隷だ！　いつの間にか、自分は骨まで下男にな

り切つてしまつてゐたのだ。そして今、突然お拂ひ箱……

城木は自嘲と屈辱とに泣き笑ひがしたくなつた。こんな明らさまな蔑すみを受けて、どうしてもう一刻もこの邸内に殘つてゐられよう——畜生！　追ひ出された下男のために、何といふ誂へ向きの夜だ。烈しい〳〵吹雪——身を切る北風——

城木は悲憤の思ひに醉ひ疲れたやうに、ヨロ〳〵した足どりで、三階から階下に下りた。彼はもう誰に顏を合はせるのもいとはしかつたので、なるべく暗い廊下を〳〵と選びながら、自分達の控へ所の前まで來た。

豪華な客間からは隔たつた、家扶家從のたまり場は、まるで無裝飾な、電燈ばかりがいたづらに明るい一間だつた。その中には、めい〳〵今夜を晴れとめかし込んだ、頭をテカ〳〵に分け、髯を綺麗にそつた連中が、勝手元からくすねて來たらしいウヰスキイをチビ〳〵やりながら、何やら卑しい冗談を投げ合つて興じてゐる。

城木はその人達の目に觸れるのを恐れた。部屋の中に這入りはしたが、高い衝立の陰に身をひそめるやうにして、帽子と外套を折釘からはづすと、それをひつ抱へるやうにして內玄關の方へ急いだ。

外套の襟を立て、帽子の鍔をひき下して、降りしきりすさびしきつてゐる吹雪の中に飛び出さうとすると、これも盜み酒に微醺を帶びた運轉手の青木が、柱に身を寄せて突ツ立つてゐるのに出會つた。

『おや、城木さん、どこへ？』と、青木はたづねた。

城木は平生からこの男が嫌ひだつた。始終ひまがあれば書物に讀みふけつてゐるやうな青年だつたが、色がいやに生白く、目に蛇のやうなきらめきがあり、唇が毒々しく眞紅で、あまり人づき合ひもしない風であつた。

『少し頭痛がするので、御免蒙つて歸るのです』と、彼は答へた。

『へえ、こんな忙しい晩に――それは――』

城木はもう吹雪の中に飛び出してゐた。雪は裏門口までの庭をもう深く埋めてゐた。いくら掃いてもあとからあとから積るらしい。

通用門を出て、暗い夜の雪をまともに浴びせかけられた時、彼は初めてホツとした。彼は遮二無二、三町とはへだたらぬ自家の方へ急ぐ、その小家に彼は一人の婆やと一緒に住んでゐるのだつた。

だが、もう少しで自家に着かうとするころ、突然、彼は吹雪の中に立ち止つた。

――馬鹿！　どこへ歸る積りだ。長沼家から、たゞで貸してもらつてゐる借家へか！

城木はわれとわが顏に唾が吐きかけたかつた。家どころか、帽子も、外套も、背廣も、靴も、すべてすべてぬぎ捨て眞裸になりたいやうな衝動に驅られた。

――あゝ、頭の中から、あの人達のお情で受けた教育までこすり落したい！　知識も感情もこすり落したい！　畜生！　犬！　奴隷！

彼は四角でぐるりと向きを轉じて、わが家とはまるで違つた方角に急ぎ出した。

環境と習慣とによつて、人間の心にはどんな習性でも植ゑつけられる――生れ落ちて以來、自屈と從順とに強ひられて來たため、それが習ひ性をなしてゐた城木は、今夜、突然眞つ向から浴びせられた、露骨暴虐な恥辱のために、思ひがけなく人間本來の誇りを呼び醒まされた。そして二十四の今日はじめて自分がこれまで、いかに奴隷であつたか、犬であつたかを思ひ知つた刹那の氣持は、いひ表はし難かつた。自分に屈辱を與へた相手よりも、まづ彼自身に對する憤怒は、頭を痺れさせ、魂を黑焦げにした。

――犬！　奴隷！　野仆れ死んでしまへ！

彼は横から吹きつける吹雪に盲ひにされながら、自分でも何處へ行かうとするのか、あてもなく突き進んだ。凍つた夜氣は鼻孔に烈しい痛みを與へ、頰は切られるやうだつた。町家は雪の夜更けのことで大てい大戸を下して、軒燈のまはりだけが、輪光を浴びた雪に丸くさびしく輝かされてゐる。四五町來て、彼は初めて、明るい一軒の家を見た。それは靜かな山の手の屋敷町に近い通に見られるやうな、小ていなカフエだつた。

――馬鹿、いつまでこの雪の中を歩いてゐるんだ。と、自分でいつて見て、生れて初めて彼は酒でも飲まうと考へた。

多分、たつた一軒、この家だけが明るい、その明るさに誘惑されたのであらう。城木はためらはず、玻璃の扉を押した。

貧しげに紅色紙の笠飾りをした電燈の下に、ストオブにかじりついてゐた二人の女給は、眞白に塗りこくつて、目のまはりに青隈を差し、唇を驚くべきあかさで大きくした顔を、一やうにこちらに向けた。

『いらつしやい！』

『お寒いことねえ——さあ、ストオブへいらつしやい！』

城木は吹雪に眞白になつたまゝの外套で、帽子だけとつて小さな白いテーブルに向つて腰を下した。客は今一人ゐるだけだ——それは、女給どもから閑却されるのも無理はない、髯だらけの、ボロ〳〵な羊羹色の外套をまとつた中年男で、前にもう五六本の正宗の空壜を列べてゐる。看らしいものは何も置いてなかつた。

『ウヰスキイ』と、城木は、考へもせずに命じた。そして女給が、黄金色にかゞやく、とはいへ、目にしみるやうな悪いにほひを帶びた杯をもたらすと、ガク〳〵ふるへる手ですぐに口に持つて行つてぐいと飲み干した。

刺すやうな刺戟が、咽喉を走つた。それが病的な神經に快感をあたへた。

『ウヰスキイ』と、彼はまたいつた。

熱火のやうな刺戟が、彼の舌と咽喉とを、もう一度痛がらせた。しかし、彼はその液體が、胸の心を焼きたゞらせながら、やつとをさまると、機械的に繰返した。

『ウヰスキイ』

——三杯のウヰスキイと、ストオブの熱とに、これまで冷え切つてゐた身體が急に火のやうにほてつて來て、後頭部はヅキ〳〵うづき、頬は燃えはじめた。彼は肢暈を感じながら、まだ繰返してゐた。

『ウヰスキイ』——と、突然、今まで傍らのテーブルから城木の方をじろ〳〵眺めてゐた例の中年男が熟柿のやうに赤らんだ髯面をこちらに向けて、妙にキン〳〵する聲でいひかけた。

『大分、君、いけますなあ——わしなぞも酒飲みだが、そんなに立て續けに生のウヰスキイはやれん。君の若さで、大した腕前だ。どうです、差し向ひにならうぢやありませんか？』

だしぬけに隣のテーブルから聲を掛けられた城木は、もう幾らか舌にもつれを感じながら答へた。

『えゝ、どうぞ――』

『ぢやあ、こつちから出張しますよ』

髯面の醉客は、まだ殘つてゐる正宗の壜と猪口とを御持參で、城木のテーブルに來て差し向ひに腰を下した。

『まあ、一つ――』と、彼は杯を突きつけて、

『日本酒も少しはいゝでせう』

城木は否まず受けて、ぐいと干してすぐに返した。

『いや、よつぱらひはよつぱらひ同士――こんな淋しい晩、あんたのやうな年若い飲み仲間を得たのはうれしいな。それにしても隨分いけるやうだが、どの位の量ですね？』と、醉客はたづねた。

城木はぶつきらぼうに棒に答へた。

『僕は酒を飲むのは今夜がはじめてゞす。猪口に一つや二つは飲んだこともありますが――』

相手は驚かされた。

『はてネ、それは妙だ。酒らしい酒をはじめて飲む君が、何だつてあんなに立て續けに西洋の强い酒なんかあふるのです？　寒いからですか？　あんまり思ひ切つてゐる――身體をこはしてしまふ……のんだくれのわしが、忠告も凄まじいと、女給さんたちが笑ふか知れんが、それは毒だよ――いけないよ』

城木は目がくら〳〵するのを感じながら、相手の言葉にはかまはず、前にあつたウヰスキイを、また

一息にあけた――

『ウヰスキイ』

『まあ、いゝんですか？』女給もさすがにためらつたが、それでも一度グラスを充たすには充たした。

のんだくれは、のんだくれ特有の親切さで、しげ〳〵と城木を眺めて意味ありげに頸を振つた――

『全くどうかしてゐる――あんまりだ。もういゝ加減にし給へ。君はもう五つもあけてゐますよ。惡い。はじめて酒を飲む身で、五つもウヰスキイをあふるなんて――』

城木は充血した目で、ボンヤリ相手を眺めた。

『僕、そんなに飲みましたか？』

『飲みましたとも――もういけない、それにしても、何だつてそんなに飲みたくなつたのです？』と、相手は興に牽かれたやうに繰返して尋ねた。

城木兎　もすればふら〳〵と横ざまに、後ろざまに倒れてしまひさうな身體を、兩手の肱を冷たいテーブルに突いて、無理に笑つて見せようとした。

『誰だつて飲まずにゐられない時もあるでせう――この家の明るい光を見ると、突然飲みたくなつて、ふら〳〵と飛び込んだのです』

『しかし、君の飲み方はまるで自棄酒のやうですよ』

『は、は、は』と、城木はひどい聲を出して笑つた。

『さうです、それなんです――僕は自棄酒なんです』

――何の積で、こんな見も知らぬ男の前で、白く塗抹つた狐面の前で、恥晒しな本音を吐くのだ。

と、城木はグラ〳〵する頭で自分を叱つたが、すぐに捨ばちな、謎のわからぬ衝動を感じて口に出して叫んだ――

『どうだつて構ふもんか！　犬奴！　奴隷奴！』

相客は城木の醜態に自分の醉ひをすつかり醒ましてしまつた風で、憂鬱さうに呟いた。

『君は何かひどい不幸に遭遇したのだね？』と、同情深くみつめて、

『いつだつて不幸が人を酒飲みにするのだ――わしだつて、烈しい打撃のあとでほんたうの酒の味を知つたのだ。多分、君は戀人に捨てられたのだらう……』

『戀人にも捨てられました。それと同時に僕は僕自身を捨てたんです』と、城木は顎をテーブルに突いた兩手でさゝへて、ふら〳〵と頭を動かしながら恬然として答へた。

『なぜ自分まで捨てるのさ――人間は自分で自分を捨てると元も子もなくなる』

『それを僕は捨てなければならないんですよ――自分は今夜まで、犬の奴隷で、それ以外の何でもないのを知つたら、そんな汚らはしいものは捨てなくつちやならんぢやないですか――あゝ、僕はみんな僕からこすり落してしまひたいなあ――學問だつて、知識だつて――』

城木の舌はもつれた。そして、そのまゝテーブルに突んのめつてしまつた。

『困つたわねえ――どうしたんでせう？　この方は』と、狐面の女給が、顏に似合はぬ思ひやり深げな調子で言つて頸を振つた。

今一人の女給は眉をしかめてゐた。

『とんだ人に飛び込まれちやつた。もうそろ〳〵しめなければならない時刻に――』

『ま、そつとして置いてやれよ』と、相客はかなしげにいつて、手酌で冷え切つた酒を杯に充たしながら、

『こんな人間は醉つぱらつて眠つてゐるうちが仕合せなんだ。醒めるとまた辛さがやつて來る。人間、だれだつて一度、醉つぱらつてゐるか、眠つてゐる時が一ばん仕合せだと思ふ時があるんだよ――それが昂じると死にたくなるのさ。君達はまだ若いから何も知りはしない――だが、考へて見ろ、もしこの人のやうな場合が人間に無いとしたら、神さまが

酒の醸造を何だつて人間に敎へてくれるものか――』

『又あなたの――何でしたつけねえ――あゝ、さう〳〵酒神讃美が初つたわ』、と丸顔の方の女給は笑た。

『それにしても、いつまでもこの人に醉ひと眠りの幸福を貪られてゐては、私達はやり切れないわ、私達も眠りの方の幸福がほしいもの――』

醉客は聲を低めた。

『もつと小さな聲で話せ。ソラ、身動きをするではないか――今、目を醒ますと、この人は苦しみ出す。それよりも、もう少し眠らせて、それから歸してやるがいゝ――なに、わしが引き受けたよ。わしが家まで送つてやる。』

――だが、城木は淺猿しくテーブルに突んのめつたまゝ、死んだやうな泥醉と眠りとにいつまでも日醒めなかつた。帳場臺の上の時計が二時を打つた。

おかみさんが現れて、もう店を閉めねばならぬ時間だと警告した。

醉客は女給にいつた。『わしは何だかこの若い男が好きになつた、わしが自分の宿に連れて行つて寢かしてやる――勘定はわしの帳面に一緒にして置いてくれ。兎に角、車だ。一臺でいゝ。』

ポロ〳〵外套の醉つぱらひは、醉ひ倒れたまゝ全然自己を失つてしまつた城木を、辻車に乘せて、自分はゴムの長靴で凍てた雪を踏み分けて街へ出た。

雪はいくらか止みかけた。しかし寒氣は一層烈しく肌に迫つて來た。

醉ひ痴れて、人ともけものともけぢめのつかなくなつた城木が、見ず知らずの醉漢の、醉漢特有な思ひやりからどこへか連去られたその夜更け、德惠子はやつと來客達から解放されて、溫かく美しい紅閨の裡にふくよかな身を横たへてゐた。

紅閨の人

この部屋は全く文字通りの紅閨だつた。うす桃色の壁、深紅の地に珍奇な百花百鳥を織出したゴブランの壁掛、うす絹の天蓋がついた寢臺の枕もとの、朱色の小づくゑの上の置電氣の覆ひ絹は、夢のやうな曙色を出した。小づくゑの上には黃金色の菓子入、水瓶、分厚な小說本が二三册、寢臺の下には金繡をした小さな部屋靴が亂暴にぬぎ棄ててあつた。

ふつくりとした羽蒲團に頸まで埋め、白い枕に綠色の夜帽を着た頭を安らかに載せた德惠子はしかしまだ眠りに這入らずに、大きな、生き〳〵した眼をあけて、壁に貼られてゐるオツトマンの裸美人像を見詰めてゐる。雪の夜はすつかり更けて、さつきまであのやうに賑はしかつた邸內は、もうしいんと靜まりかへつてしまつた。遠くの方で、呻吟くやうな、嘯くやうな自動車の響きがほんの時々聞えるばかり――彼女の想ひをみだすものとてはない――

德惠子はいつまでも裸美人像をぢつと見つめてゐる。だが、何も彼女は、だるさうに紅いソフアに身を投げかけた、フランス貴女の美しい乳房を嘆賞してゐる譯ではない。彼女は今夜のいきさつを考へて

じれてゐるのだ。彼女が思ひ設けたすべての事態が、何とつまらなく、味もそつけもなくぶちこはれてしまつたことだらう――彼女が今夜、あの三階の一室で、城木に迫り求めたことは、狂言でもお芝居でもなかつた。心からの本氣だつた。人間の生活をすべて黄金と虚飾とにのみ換算する兩親が、絶對の權利を揮つて、この生き身の自由を望んだものの悉くを白い手につかむことを許されてゐる女性をすらやうな世界から、敢然として飛び出してしまはうとする彼女の意圖は、可なり深刻なものだつた。その上彼女はあの男としては女々し過ぎるやうな城木を、性質が反對であればあるだけ愛してゐた。彼があれだけの才能と美貌とを持つてゐるのに、それをまるで子飼の店ものでも扱ふやうに蔑すみきつてゐる兩親の態度を見る度に、彼女は自分が足蹴にされるよりも、もつと腹立たしいのだつた。

だから彼女はどんな暴つぽい手段によつても、城木をこの世界から引離して、彼女自身の活氣で、精力で、美で、夢で、肉で激させ、勵まし、力づけ、立派な個性的な人間にしてやらうとしたのだ。そして自由に、勇ましく、他人に眼をみはらせるやうな生き〳〵した生活をはじめようと夢想したのだ。

――それが、なんと物足りない、くだらない結末になつてしまつたことだらう！

――なんといふ意氣地なし！

彼女は城木があゝまで母親に辱しめられて、その揚句この一家から追放されてしまうたことまではまだ知らなかつたが、あの時の男の態度を考へると、齒を嚙みたい程腹立たしいのだつた。どうしてあれ

までの私の氣持がわからないのだらう――なんといふふん切りのない男だらう――と、ことさら、彼のさも道德家らしい言葉を思ひ出すと、じり〳〵して來るのだつた。

――あの人には心にも庶にも男らしさといふものがないのか知ら？　馬鹿！

德惠子は裸美人像をみつめたまゝ罵つた。だが、それでも、あの社交的な令孃と、なめらかな言葉と、踊りの足捌きしか知らないやうな、今夜のお客の青年達にくらべれば、今でも城木は彼女に取つてかけ替へのない人に思はれるのだつた。殊に唇も肌もすつかり許した彼女に取つては――

――どうだらう、あの中條さんの揉み上げつたら！　襟つたら！　キユツとチョツキでしめつけた胴つたら！　磨き上げた爪の艶つたら！

德惠子は蟲酸が走るやうな想ひで呟いた。

――あんな人と結婚するどこかのお孃さんの顏が見たいわ。

それまでに彼女が賤しむ子爵の次男に、あゝまで腰ひくゝ、頭を下げつゞける兩親のことを思ふと、德惠子はたまらなかつた。そしてあの中條貞雄が、表面はさも禮儀正しげに、謙遜さうに、その癖高慢ちきな冷たい目で、さうした兩親をぢつと眺めるそぶりが、あり〳〵と目に見えて憎かつた。

――誰が、あんな人に――あんな人間こそ最下等の生きものだわ！

彼女は兩親が貴べば貴ぶ程門閥を脈つた。先天的な優越を脈つた。彼女が城木を愛したのも、恐らく

彼が門番の子であり、寄食者であり、無一文の貧青年であつたことのために、多分に煽りはげまされたのだつたかも知れぬ、才能にみち、美しく、しかし弱い心の一人の貧青年を、自分の熱情と活力とで激しい生活の勇者に更生させるといふことは、彼女の昂揚的なロマンチシズムにいかにも當てはまる事業であるには相違なかつた。

――さうよ、お母さまが、あんまり早くいらしつたから悪かつたんだわ！と、突然德惠子は獨語ちて、そして二十二歳のあらゆる華かさと夢とで自分に媚び笑つた。

――さうよ、あの人、きつと、私をだき止めたに違ひないわ、そしたら私、うんときつく接吻して上げたのに――接吻して上げさへすりや、あの人、どんなことでも私のいふ通りになつたに違ひないわ。

さうだ――激しい熱情をこめた接吻こそは、折々どんな弱者をも不敵の強者に變じさせもする。彼女は自分の魅力を信じて、そして明日の夢想をなほ持つことが出來た。

――あしたこそ逃がしはしないわ。あしたこそどうしたつてこの邸を飛び出して見せるわ。城木さん、私の愛で、あんたが素晴らしい男に生れかはつたら、私、一生どんなにでも隷屬してよ。女奴隷のやうに仕へてよ。もし、どうしても強くなれなかつたら、あべこべに私、女王になるわ。あんたをこき使つて上げるわ――ね、よくつて。家で何といはうと、お父さまやお母さまがどんなにこはい顔をなさらうと、一度思ひ立つたら止まない私なの――あしたこそ、私といふものがどんな女だか、みんなにはつきりと思ひ知らせてやるわ。

彼女はふつくらした枕の下に白い手を差し入れて見た。やはらかい指先には例の七千圓入りのプラチナ色の提袋がさはつた。世なれぬ彼女もこれだけのものがあれば、男と一緒に當分生活を立てゝゆけることは知つてゐた。そしてその中には城木は若い辯護士としてか、新鮮な寄稿家としてか、新聞記者としてか、必ずどうにか身が立つだらう――そして自分自らもこの白いやはらかい手を、黑くかたくするのだ。自由に働き、自由に生きる生活！　それは城木が戒しめた通り、この吹雪のする夜のやうな冷嚴なものかも知れぬ。しかし、こんな生ぬるい、虛飾に充ちた、いつはりと不潔とのよどみのやうな一日一日より、どんなにましか知れぬのだ。

冒險的な投機事業で巨利をしめて、男爵の地位にまで經上つた父親の、一種不敵の根性は、別のかたちで彼女に遺傳されてゐるやうに見えた。卑屈と平凡とは彼女には罪惡だつた。思ひ立つたらぐい〳〵とやり拔かう――たとひ倒れても――さうした意地が、この美しいブルジョア娘の脈管には漲り流れてゐた。

――こんな溫室みたいな、生ぬるつこい桃色の部屋に寢るのも今夜つきりよ！

彼女はさげすむやうに眺めまはして、そして目を閉ぢた。さすがに多くの客人達に接した疲れが、後頭部に混沌をよどませはじめた。

翌日は昨夜のあの烈しい吹雪はまるで忘れたやうな、カラリと美しく晴れ上つた上日和だつた。暖か

い明るい日かげは眩ゆく積雪を照して、小鳥どもは大地の輝かしさと眞白さに驚かされ喜ばされたやうに、けたゝましげな囀りを立てゝ呼びかはしてゐた。

——德惠子が柔かい臥床に目をさましたのはもう黄金色の枕時計が十時を告げ知らせる頃だつた。彼女はすぐには床を離れようとはしなかつた。うつとりと目をあけて淡紅色の薄ぎぬの天蓋をぼんやり見つめてゐた。昨夜、母親から城木と二人でゐた密室を追はれて昂奮して、相手えらばずに踊つたあとの四肢には、輕い疲れがこゝろよくまつはつてゐて、後頭部のかた隅に、明方に見た夢の名殘がまだぼんやりと殘つてゐるのだつた。その夢は惱ましい、生あたゝかいものだつた——蒼白い城木と彼女とが、溫室の、それは〳〵突拍子もなく大きな草花の蔭で、むせるやうなにほひに包まれて坐つてゐると、突然繁みから小牛ほどもあるやうな蜘蛛があらはれて、差向ひになつてゐる戀人の身體を、何尺あるか分らない手足でつかみ寄せてしまつたのであつた——その蜘蛛の顏は、どうやら母夫人の憤りつぽい表情によく似てゐた。そしてアッと思ふうちに、彼女自身が頸に、何か冷たい、ぬる〳〵したものが卷きついたやうな氣がしたが、それはいつぞや物の本で見た南洋の錦蛇に相違なかつた。一丈もある錦蛇は、白い、やはらかい咽喉をぐい〳〵と卷き締めた——彼女は息も出來なかつた。彼女は曉頃、その惡夢にびつしより冷汗をかいて目をさましたが、無氣味な身ぶるひを感じながら、いつとはなしにまた眠つてしまつたのだけれど、今、氣がついて見ると、どうした拍子か白天鵞絨の夜ガウンの襟紐が咽喉に卷きついてゐるのに氣がついた。錦蛇の尾と思つたのは、この襟紐に違ひなかつた。夢なんか何でもあり

はしない……

——でも、お母さまが蜘蛛になつたのは面白いわ。さういへば、お母さまの皮肉になつた時のお顏は、蜘蛛に似てゐないとはいはれないわ。

德惠子は、寢床で苦笑した。玻璃窓の、紫色のカーテンのすきからは、明るい日かげが生々と射し込んで、雪解けのしづくのひゞきが、のどかに、かすかに聞えてゐた。それを聞きながら、彼女は昨夜の空想をまたよみがへらせた。

——さうだ。今日は頭をはつきりさせなければならないんだわ——今日こそ城木さんがどんなに尻込みしても、無理にも決行させるやうにしなければ……と、さう呟やいて、思ひ切つて暖かい床からはね起きようとした時、ふと、扉が輕くたゝかれた。小間使のおきみのたゝき方だつた。

『お這入り——おきみ』と、彼女はためらはず答へて、パッとはね起きてベッドに腰をかけるやうにして、白い美しい爪さきで緋色の部屋靴をさがした。

おきみは、いつもの可愛らしい細い目で、小さい赤い口元をほころばして這入つて來た。

『お嬢さま——黒瞳がおとけになつたらうとみなさま御心配でございますわ』

『ひとの黒瞳の心配より、おきみ、自分の目をなくさないがいゝわ』

主從とはいへ心易すだてにおきみはわざと怒つて見せた。

『どうせ私の目は、いつだつてございませんわ』

『馬鹿！　すぐふくれる子！』と、德惠子は小卓の上の菓子器から金紙に包んだ蜜菓を一つ摘まんで小間使に投げつけた。おきみはそれをうまく受け取つて笑ひ出した。

『ほ、ほ、ほ。お孃さま、もうおいたはいゝ加減に遊ばせ――奥さまがお壹から御一緒に中條さまをおたづねしなければならないと仰しやつて、お目ざめをお待ちになつてゐらつしやいます』

德惠子はさげすんだやうに獨言ちた――

『どうせそんな事だらうと思つてゐたわ。お母さまには中條の御次男が、このごろまるで神さまなんだから――でも、私はあの屋敷へお供なんぞ御免だわ。おきみ、あんたお斷りして頂戴。私、頭痛がするから今日は外出出來ませんて――』

『でも折角お待ちになつてゐらつしやるのでございますもの――』といつて、おきみはチラリと微笑の目で横顏を眺めて、

『それにお孃さまがいらつしやらなけりやあ、何にもならないぢやございませんか。御次男さまが奥さまに御用がおありになる筈もなし、奥さまのお顏を見たつてコーヒーが五杯も召し上れるわけでもありますまいし――』

中條貞雄ははじめて長沼家を訪問して德惠子と逢つた時、彼ほどの社交馴れた男が、彼女がすゝめればすゝめるだけのコーヒーを五杯も飲んでしまつたほど、有頂天になつたのだつた。

『おきみ、お愼み！』と、德惠子は叱つた。

『貞雄さまにコーヒーを飲ませに行つて上げる暇は私にはないわ。そんなことより、私には大事な用が今日はあるのよ。自分でお斷りするからいゝわ』

彼女は寢部屋を出て化粧部屋の方へ行つた。おきみは若い女主人のためにお召の不斷着を入れた亂れ函を持つてついて行つた。

『お髮を解きませうか？』

『いゝえ、今日はこのまゝでいゝの。何といつたつてお母さまのお供なんかしやしないから』

德惠子の朝の化粧は簡單だつた。白粉氣がすつかり落されたので、却つて生々した青春の美があらはれた。手早く着がへをすますと母親の居間に這入つて行つた。

母夫人は、贅澤な鼠つぽい無地の訪問着にもうなつて、きらびやかすぎる眞新らしい銀ぶすま、毒々しいまでに華やかな百花百鳥の金屏風でギラ〳〵しい居間の蒔繪の火鉢に、青白い手をかざしてゐた。

彼女は德惠子をじろりと見て、『おや、すつかり外出の支度をすますやうにおきみにいつた筈だつたが――中條さまにゆうべ御訪問のお約束がしてあるんですよ』

『それはお母さまだけのお約束なんでせう』と、德惠子は坐りながら答へた。

『私、今日は頭痛がするし、それに用がありますから』

母親は癇持らしく眉根を寄せた。

『頭痛といつたつて、さうして元氣な顏色をしてゐるぢやあないか――それに用があるといつたつて、どれ程のことがあるの。あんたのためにも、この家のためにも今日あそこをお訪ねするのは、大事件だつてことは、いくらわがまゝな人でも分りさうなものぢやあないか――もう一息でちやんと話がきまりさうになつてゐるのだから――』

德惠子は耳にも止めぬ風で、新聞を引き寄せて疊の上にひろげた。

『ねえ、今日はいつものわがまゝはきいて上げられないよ』と母親は冷たく娘の頸のあたりを眺めた。

『さあ、早く御飯を濟まして着替へをなさい。出來るだけ綺麗にしなくてはいけないよ。あんたには澤山競爭者があることを忘れないやうにね』

『私、どなたとも何も競爭なんぞしてはゐませんわ』と、德惠子は新聞に目を落したまゝで答へた。

『德惠』と、母親は激しい眼付をした。

『お前を相手に冗談をいつてゐる暇はないんだよ。どんなにお拒みでも、駄々をこねても、どうしても今度の緣組だけはさせずには置けないんだから、その積りでおゐで』

德惠子はいつまでも新聞から目を離さなかつた。母親にはまるで空耳を走らせてゐるやうな娘の態度が腹立たしくてならぬに違ひなかつた。

『ねえ、德惠』と、母親は險のある目で、娘を睨めるやうにし續けながら、

『お前だつて分つてゐるだらうが、隨分私たちはお前をわがまゝ一ぱいにさせてゐる積りだよ。これまでどんなことでも、お前の望みはみんな果して上げて來し、大ていなことは見ないふりもして來て上げたと思ふよ――でも、今度の話だけは、お前のやんちやで壞されてしまつては困るのさ。お父さまだつて、私だつてこれまで何の苦勞もしずに大名ぐらしをして來たわけぢやないんだからね――この世の中の艱難なら、ありとあらゆる苦しみを忍んで來たのも、せめてお前だけには、世間で一といつて二と下らない立派なお婿さんを取つて、この長沼家を一流の家柄にしたければこそなのだよ。お前なんか、何も知りはしない――學問なんぞいくらあつたつて、世の中のことは、經驗のない人には何も分りはしないのだよ。私たちがかうしろといつた通りにしてゐれば、お前は明るい美しい一生が送れるのさ。若し自分勝手なことをやつて御覽、どんなにこの世が苦しいものだか、すぐに分るのだから――』

『私、世の中を樂に送らうなんて考へてはゐませんわ』と、突然、德惠子が新聞紙に相變らず目を落したまゝで口をはさんだ。

『ぢやあ、好きこのんで苦勞がしたいといふのかい？』と、母夫人は冷たい笑ひで艶の惡い薄い唇を歪めた。

『でも、遠慮なしにいふと、お前なんぞには、まだ〳〵男のほんたうの値打ちだつて分りはしないぢやないか――あの意氣地のない、女の腐つたやうな城木なんぞ、絕對にお前に近づける譯にはいかないんだから、それだけは知つてゐておくれよ』

德惠子は、はじめて母夫人を見返した。勝氣な眼付で、彼女はいひ返した。

『ちやあ、お母さまは、中條さまがどんなに優れた方だと仰しやるの？』

『そりやあ貞雄さまがどんな方か、底の底はまだ誰にも分りはしないさ。しかし、貞雄さまには家柄といふものがあるのだよ。公卿華族の中でも、指に折られる中條家なのだから、その後光があの方のまはりにはちやあんと射してゐる。だから、あの方が、たとひ城木と同じやうな意氣地なしでゐらつしやるにしても、世間ではさうは思やしない。家柄や門閥の貴さはそこにあるのさ。あの方は、うちへお婿入りなされば、三年と經ないうちに貴族院議員におなりになる。あの方の家柄と、うちの財産と一つにすれば、出來ない事はこの世にありはしない。お前だつて、さうなれば、一流の貴婦人だよ——ねえ、もう下らないわがまゝはいはずに、さあお化粧をして着かへて頂戴。そしてお約束の一時までにお屋敷へ伺はなければ——』

德惠子はさげすむやうに玻璃戸越しに外をながめた。

『さうまで仰しやるなら、お供だけはいたしますわ』

彼女は淺猿しかつた——あまりに成上り根性を露骨に出してゐる兩親に、露はに抵抗することさへ不愉快だつた。よし、それなら母親の言葉にまかせて、あの甘つたるい若さまを訪問して、二度と婚約なぞを望むことが出來ないまでにぶち壞して來てやらう。

——兩親は兩親、私は私だ。

彼女は氣輕に半日の假面劇をすましてやらうと決心した。

ついと立つて、彼女はふたゝび化粧の間の方へ行くのだつた。

嘲笑

おきみの介添へで德惠子は外出の支度をすつかりすました。綠色の訪問着の上に羽織つた黑狐の外套が、パツチリとした目鼻立の彼女を一層美しく見せた。

德惠子は自動車が待つてゐる玄關に出る前、自分の部屋に這入つて細かい螺鈿を鏤めた書物卓の前に立つたまゝ、レターペーパアを擴げて、何やら手短にペンを走らせたが、それを白い小さい封筒にをさめた。そして、玄關先で、小間使をちよいと圓柱の陰に小招ぎした。

『きみ、私が行つてから、これを城木さんに上げておくれ』と、今の封書を渡さうとする。

おきみはちよいと眉を寄せるやうにした。

『城木さんでございますか——あの方、昨晩からお宅の方へもお歸りがないといつて、婆やさんが大變心配して、何度も聞きにいらしつたやうでございますわ』

『ナニ、昨夜から歸らないつて？　さういへば、會が終つてからちよいと逢ひたいと思つたのにどこにもゐない樣子だつたが……』

德惠子は唇を引きしめるやうにした。彼女は昨夜三階の部屋に這入つて來た時の母夫人の表情を思ひ

うかべた。あのやうな冷嚴な顏色を示してゐる場合、母親はどんな殘忍なことでもやつて退けることを彼女はよく承知してゐる。

——それでは、お母さまはきつとあの方をゐたゝまれないまでに辱しめたのだわ！

德惠子はおきみには見向きもせず、車寄せの自動車にもう乘つてゐる母親の方へ、つか〳〵と歩み寄つた。

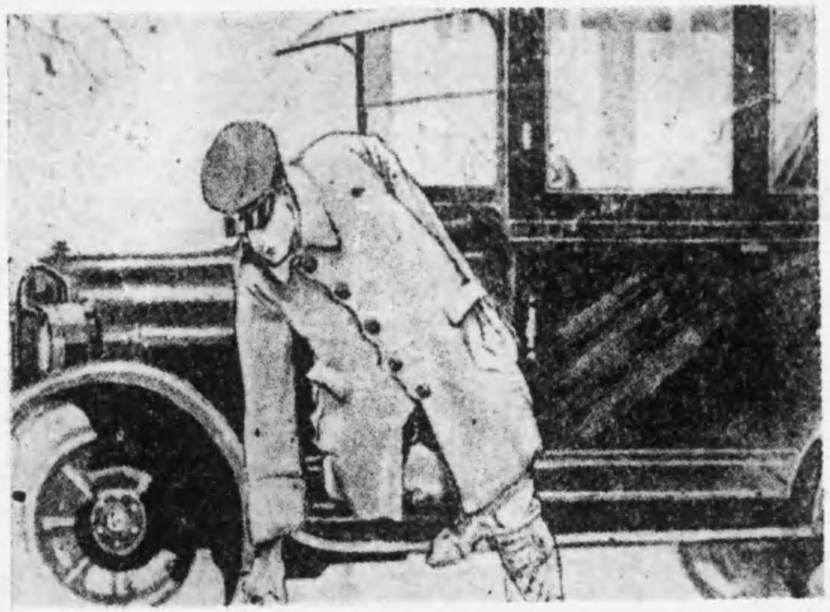
『お母さま、城木さんが昨夜から行方が分らないといひますが——』と彼女は見送りに出た女中たちや運轉手の耳をもはゞからぬ聲でいつた。

夫人はよそへ行く時だけ掛ける眼鏡の奥から鋭く娘を見た。

『それがどうしたの？　さあ、早くお乘り』

『私、あの方に手紙を屆けたいんですの』と、德惠子は母親を眞直に見返した。

『それはいけません——あの人はもう自家と何の關係もないのです。家事事務所の方も解職したのですから』



夫人は冷たく言つて、さすがにあたりをはゞかる風で——

『話は自動車の中でします。さあ、お乘り』

德惠子は默つて母親をみつめつゞけた。彼女の頰は白粉の下で蒼ざめた。唇は引きつゝた。その引きつる口で何かいはうとしたが、思ひ返した風で、手にした封筒を指の間に揉みにじると、それを足元に捨て、無言で車の中に這入つた。

扉を開いたまゝ、うや〳〵しく頭を下げてゐた運轉手の青木は、令孃がクツションに坐ると、扉を閉ざして、そのついでに封書を手早く拾ひ、そのまゝ運轉臺に上つた。

自動車が走り出した。

德惠子は母夫人の方を見向きもしなかつた。彼女はぢつと前を睨めるやうにしたまゝ默りつゞけてゐた。その横顏を母親は氣になる風でチラ〳〵眺めた。大きな眞珠を飾つた黑い帽子の下で、德惠子の頰は紙のやうに白ざめて見え、目尻はキツと釣つてゐた。顳顬は奥齒をギリ、とかみしめ續けてゐるやうに顫動した。

——大事な訪問前であつた。母親は自動車が中條家に着く以前に、何とか娘と妥協して、機嫌を和らげて置かねばならぬのを感じた。

『德惠』と、彼女は前よりもぐつと優しい口調になつていひかけた。

『外の事は兎に角、たとひ城木が自家とどんな古い關係があるにもせよ、手紙を屆けるのなんのと、そ

んなことは慎しんで貰はなければなりませんよ――お前がどんなに私たちに大事な身體だかをお忘れてはあるまい――』

徳惠子は自動車の前窓にひとみを据ゑたまゝ、折れて出ようとする母親の方を顧みようともしなかつた。

『ねえ、つまらないことにこだはつて、折角御訪問した中條さまの御一家へ不愉快な氣持をお與へするやうなことがあると困るよ』と、母親はつゞけた――

『私たちがどんなに今度の問題を樂しみにしてゐるか、お前だつて考へてくれなければ――中條さまなぞといふ貴い家柄の方がおつき合ひ下さらうとするだけでさへ、自家の品格をどれ程上げてゐるか分りはしません』

徳惠子は蒼ざめた顏をはじめて振り向けた。

『お母さま、あなたは私たち私たちと仰しやいますけど、それはお父さまとあなただけのことなんでせう？』

『どうしてお前そんなことをお言ひだ？　長沼家にはお前も大事な一人にきまつてゐるよ』

『でも、あなた方は私なんかの意志も存在もちつとも考へに入れてゐらつしやりはしないわ――それは人間にはめいめいの考へがありますから、お父さまやあなたがどんなに時代はづれの考へから、貴族と

か家柄とかをどんなに大切なものにお思ひにならうとも、私はちつとも構はないんですけれども、私たちの家の中から長い關係のあつた人を出し入れするにさへ、私の意見を聞かうともしないぢやありませんか？』と、徳惠子は強い落着きでいつて、キユッと下唇を噛んだ。

『お前は、城木を私が追ひ出したことを根に持つておゐでのやうだが、あんな人間をそれ程重大に考へないでもいゝぢやないか――ことに高が門番爺やの孤兒を、私たちは學士にまでしてやつたのだもの、打つたつて叩いたつてどこからも文句が出る筈はない。お前は世間知らずだから、あんな人間にいつまでも興味を持つんだらうが事務員なぞといふものは、縁もゆかりもない働きものを、新らしくお金で買つて來た方が使ひいゝんだよ』

『でも、城木さんと私とは、子供の時からのお友達なんですわ――』と、徳惠子がいひかけるのを、

『馬鹿な』と、母親はいひ消して、

『城木とお前がお友達――馬鹿な、そんなことをかりにも口にされては困りますよ。あれは後々いくらか役に立つかと思つて、襤褸の中から拾ひ上げて教育してやつたまでの男です。そんな賤しい人間をお友達呼ばゝりするなんて、ほんたうにお前の無考へにも驚いてしまふ』

徳惠子は美しい毛皮に蔽はれた肩を、ちよいと聳やかすやうにして、また默り込んでしまつた。彼女の勝氣らしい引きしまつた唇は呟いてゐるやうに見えた――

――お母さま、あなたの意見も結構なものかも知れないわ。でも、私は私の考へ通りにするから、その積りでゐらつしやい！

母夫人にも、思ひ立つたらどんなことでもやり兼ねぬ娘の氣性が分つてゐないことはなかつた。ことによると今日の大事な訪問が、娘の不機嫌からどんな不成績を示すかとも案じられたが、しかし、中條家の、あの古風な邸宅の間近に、もう自動車は來てしまつてゐた。

『德惠、繰返すやうだが今日は氣をつけておくれよ。私たちの心配をいつかあとでお前に感謝して貰へる時があると私は思つてゐます』

母親は赤坂氷川臺の、古雅ではあるが、前庭にも建築にも何となしに乏しさの見えるやうな公卿華族の鐵門の前に差しかゝつた時娘に囁やいた。

母親は遠慮深く、門外で乘物を下りた。

運轉手の青木は女あるじ達が玄關の方へ立ち去つたあとで、ズボンの衣嚢から、先程人知れず拾つて置いた揉みくちやにされた封書を取り出した。そしてちよいと匂ひを嗅ぐやうにして封を切り、默讀してニヤリとした。

奇怪な運轉手が中條家の門脇に横たへた自動車のクツションに、腰を下して、居眠りをしはじめたのか黙想しようとするのか輕く眼を閉ぢた頃、德惠子と母夫人とは客間に通されてゐた。

德惠子はこの家にはじめての訪問だつた。彼女には十九世紀イギリス風に飾られた客間が、侘びしく、

陰氣臭く、どこもかも褪せてゐるやうな氣がしてならなかつた。恐らく今も、六十を越した當主の子爵が青年時代に事業に手を出して家運を傾かせてしまつてから、殆ど屋敷の手入れをさへせずに放り投げてあるらしかつた。灰色に變つた白天井や、褪せた唐草模樣の壁紙には、ところ〴〵汚染が出てゐた。花電燈は錆びゆがみ、大長椅子の茶皮はとき〴〵小さく裂けほころびてゐた。褪色した泰西名畫の模寫の隣りに突拍子もなく生々しい色彩の踊子の姿が掛けられてゐたが、羅馬字で記された落款を讀むと、貞雄の手すさびを、今日、彼女等が訪問するといふので自慢たら〴〵かゝげたものに相違なかつた――

德惠子は苦笑した。

扉が開いて折目正しいモーニングに、綠色のネクタイを結んだ貞雄が、ひどく眞直な姿勢で這入つて來て、薄い唇の間から瀬戸物のやうに白い齒をあらはして愛想笑ひをした。

『ようこそ――ようこそ――』

とても青年とは思はれぬそらさぬ調子で、彼は昨夜の招待の禮をのべ、椅子を進め、愛嬌を振りまいた。

『さぞお疲れでしたらうね――昨晩は？　僕は非常にうれしかつたです――このごろあなたと踊つたやうに愉快に踊れたことはありませんでした。ポルトガルのシモネツタ夫人がゐらしつた頃は愉快でしたが――あの方は名人だつた。でも、あなたはより以上だ』

『どういたしまして――』德惠子は硬く答へて、そのまゝ默つた。

母夫人は氣にしてすぐに口を挾んだ。

『これもカラ子供で、やんちやで困りますが、それでも器用なたちと見えましてね、音樂や舞踏はまあ人さまにはほめて頂けますやうでございますの――何分、これからの上流社會に立つには、さうしたものも必要だと存じて、私たちもはたから力を入れてゐるのでございますよ』

『結構です。趣味性といふものが女性には心の裝飾ですからね』と、貞雄はうなづいて、

『その點で全く德惠子さんは惠まれてゐらつしやる。なにしろ新時代の代表的女性といふ點で、われ〳〵社會の話題に絶えず上つてゐる方ですもの――』

德惠子はニコリともせず、冷たい表情で室の一隅に目を遣つてゐた。そこには大きな飾戸棚があつて、古代の樂器、繪卷、花瓶なぞのたぐひが並んでゐた。困乏を凌ぐために二三度入札をしてしまつたあとで、目ぼしい家

寶はなくなつてゐたが、乏しくなればなるだけ並べ立てる必要があるか、能面も古銅瓶も、どこの道具屋にも持合せがあるやうなものに過ぎなかつた。

貞雄は德惠子の目を追ふやうにして、誇りがに話頭を轉じた。

『德惠子さん、あの笙は古いものですよ。大凡千年以上は經つてゐるのです。S公爵家が琵琶の家柄であつたやうに、僕の家は笙の筋なのです。古樂器のうちでは、一ばん藝術的なものですね。あなたは舞樂はお好きですか？』

『いゝえ、私にはあゝいふものはよく分りませんわ』明かに興味もなげに德惠子は答へた。

『御尤もです。僕だつて格別好きでもありません――すべて古風なものは僕たちにはあまり刺戟が淡い。では、あとであちらでピアノを彈くか、庭を歩くかしませう――』

と、貞雄はいつたが、その時扉が開いて一人の老人が這入つて來たのを見ると、

『おゝ、父が來ました。父とはお二人ともはじめてゞゐらつしやいますね。御紹介しませう』

中條子爵は若いころ身を放埒に持ち崩して、風流貴族の名が高かつたそのむくいで、六十の坂を越したばかりだつたが、目はかすみ頰はこけ、皺苦茶で髪の毛も白くまばらだつた。ひどくやせさらばつて、手先がブル〳〵と絶えずふるへてゐた。何となく家運が傾きつくしてゐるといはれるこの一家を象徴してゐるやうな人だ。

『御主人とは以前二三度お目にかゝつたことがあつたがよくいらしつた。あゝ、これがお娘御――お美

しくておゐでゝすなあ。いやもう當家なぞは、この貞雄に、兄の貞祐、それにわしといふ男世帶でな——妻が死んでからはまるで殺風景なことですよ。あゝ、ほんたうにお美しいことだ』

老人は椅子につくと、こんなことをいつて、かすんだ目を細めるやうにして德惠子を眺める。

母親は事によつたら婿親同士にならなければならぬ老人を、見ぬやうにチラ〳〵見ながら、

『それにしても、御當家さまなぞは立派な御子息さまをお二人もお持ち遊ばしてお羨ましうございますわ。手前どもなぞは、この娘があとにもさきにもたつた一人で、ほんたうにたより少ない氣がいたしましてね』

『ぢやが、あんたの財產とこの娘御なら婿百人ぢや。よりどりにどんな立派なお婿どのでも選べるから、なまじな息子を持つより結構です』と、言つて、老人は貞雄の方をちよいと見て、

『この伜なぞももう結婚期なのだが、兄の方がまだ獨身でヨーロッパで働いてゐる始末なので、方々から婿にほしいなぞと言はれてもそのまゝにしてある』

貞雄はその時窓際の小さい卓の上の畫帖を無意味にめくつてゐたが、自分の名が出ると、賣りにかけられた種馬のやうに、高慢げに胸を張つたが、つと德惠子の方を向いて、

『德惠子さん——僕の部屋へいらつしやいませんか？　ピアノを聞かせて下さい』

德惠子は立ち上つた。この陰氣臭い、その癖どこにかまだ好色の濁りが殘つてゐるやうな年寄りの目で見られてゐるのが厭はしいばかりではなく、彼女が考へて來た計畫を實行するためにも、貞雄と二人

になる方がよかつた。

「それがよからう——」と、何も知らぬ老人はいつた。

『若い人達は若い人達同士がよいわ。老人どもの話は辛氣くさうて面白うもあるまいから——』

貞雄は寄木細工の廊下を、德惠子を奥の方に導いて行つた。床の寄木は踏み減らされて、歪んだり反つたりしてゐた。だが、庭に臨んだ一間に這入ると、そこは今までの古めかしい風情に引きかへて、思ひ切つてアメリカ張りな、安つぽい新らしさで飾られてゐた。鼠色のカーテンを引いたまがひマホガニイの書棚、セセツション風の調度——白と綠のだんだら縞のソファ——そのソファに、貞雄は德惠子を招じた。そして自分もそのはしに腰を下した。

彼の目は庭の方を見てゐる彼女の横顏にぢつと注がれた。が、その目を伏せて、さも思ひ深げに彼は呟いた。

『あゝ、こんな日があらうとは、僕は全く思ひがけなかつた……』

そして、再び娘を眺めて、

『ねえ、德惠子さん。僕は全く夢のやうに幸福なんですよ』

德惠子は目をさびれた冬の庭から男に移した。

貞雄は吐息をした——

『全く夢のやうに幸福なのです。かうして二人だけで話せる機會が來るのを、僕はあなたにはじめて逢

つた日から夢みてゐたのですよ――頼子さんのお宅ではじめてお目にかゝつた晩から――それがとうとう』

徳惠子はにがつぽく微笑した。

『私にはお言葉が少しも呑み込めませんわ』

『どうして僕が幸福の吐息をせずにゐられないか、お分りにならんと仰しやるのですか？』

と、貞雄はさもなげかはしさうな眼付をしていつた。

『いゝえ、あなたはよく知つておゐでなのだ。あなたは殘酷ないたづらをしようとしてゐるのだ――僕を苦しめて笑はうとしてゐるのだ――』

徳惠子は、しかし、再び窓外の庭の方へ目をやつてしまつた。

『ねえ、徳惠子さん、あなたは今日、どうしてそんなに冷たい顏をしてゐるのです』と、貞雄は間を置いたあとでいつて、相手の方へ身をすり寄せるやうにした。

『昨夜はあんなに溫かく僕を迎へてくれたあなたが――ねえ、僕にはまだ指先にも、腕にもあなたと踊つた時の感覺がこんなに殘つてゐるのですよ。あなたが花瓶から千切つて投げて下すつた花は、ごらんなさい、その書物卓の上に大事に取つてあるのです』

「ほ、ほ、ほ、ほ』と、徳惠子は、だしぬけに笑つた。ほがらかな、陽氣な、何の屈託もないやうな笑ひで、彼女は青年を振り返つた。

「年末にあなた方デイレツタントのアマチユア劇をホテルで拜見しましたつけ――あの時より、今日の方がよつぽどお上手よ』

『何ですつて！』と、貞雄は叫んだ。

『僕がお芝居をしてゐるのだつて！　止して下さい――それはあんまり殘酷だ。昨夜だつてお宅の溫室の、あの南洋蘭の匂ひが激しく匂つてゐるところで、僕はあなたに告白した筈です――どんなに思ひ詰めてゐるか、どんなに惱んでゐるかといふことを――あなたゞつて、あの時はうなづいて下すつた――憐れむやうに微笑んで下すつた。あの時もひとが芝居をしてゐるのだとお思ひだつたのですか――』

徳惠子は眉をあげるやうにして、もう一度微笑した。

『ねえ、僕は眞劍なんですよ』と、貞雄はみどりの石が金鎖に包まれて中指に光つてゐる左の手を、徳惠子の膝に輕く觸れさせてさも切なげにいふのだつた――

『僕は今日にも、あなたの承認さへあればお母さまに約婚を願つて出ようとさへ思つてゐるのです。僕はこのまゝではもう辛抱出來ないんです――僕は氣違ひになるかと何度思ふか知れやしません」

徳惠子には貞雄はもう十分研究ずみなのだつた。おしやべりな女友達は、この貴公子の私生活をあますところなく彼女に話してくれてゐた。それに彼女自身の觀察力は、貞雄がどんな氣持から話しのまゝ合はない母親の御機嫌を見苦しいまでに取り結ばうとしてゐるのか、それをあますところなく見透かしてゐたのであつた。

で、彼女は、はゞかりもなく、あざけるやうに笑ふことが出來た。

『ほ、ほ、ほ、そんなことを仰しやるからお芝居だと申し上げるのですわ。でも、私、お芝居を生活に取り容れるのは嫌ひではありませんの。お芝居上手な、快活な、明るいお友だちは、私、大好きですのよ』

貞雄はちよいと眉をひそめるやうにして德惠子を眺めた。そしてあるまばゆさを感じたやうに視線をそらした。

『私、あなたをお友達としてはよろこんでおつき合ひをお願ひ出來ますけれど、本氣でそんなことを仰しやると困つてしまひますわ。もつと外の話をなすつてね』と、さう德惠子はいつた。そして勝ち誇つたやうに、他事らしくいひ足した。

『お手の、そのエメロードねえ――それはついこなひだまで頼子さまの指輪についてゐたのとよく似てゐますこと。私もほしくつて隨分さがしましたのよ――』

突然、貞雄の白い頰に隱すことの出來ない錯愕が上つた。彼はかすかに顏をあかめた。

『ほんたうに、頼子さまがお母さまの片身だと仰しやつて大事にしてゐらしつたのにそつくりですわ』

彼女は青年の手を取つて、みどりの玉をさも歎賞するやうに指先で觸れて見さへもした。

突然、指輪の珠玉の話を持ち出された貞雄は、なか〳〵混迷から恢復することが出來なかつた。

その弱つた顏を德惠子は冷たい笑みをかくした目で、横目に見ながら、

『頼子さまといへばお可哀さうに――何でもひどい精神的打擊をおうけになつたとか仰しやつて、もう一月も箱根の別莊にゐらしつたきり――さぞ雪の中に埋められて淋しい日を送つてゐらつしやいませうねえ――』

『あなたは何か誤解しておゐでのやうだ』と、貞雄はしどろもどろな調子で、しかし默つてもゐられなくなつたやうに、彼女の言葉を妨げた。

『え？　私が何か誤解してゐますつて？』と、德惠子は貞雄の手を膝からすべり落させていつた。

『何をでせう？』

『えゝ、誤解なすつてゐる――』と、貞雄は伏目になるためのやうに、胸衣囊からハンケチを取り出して爪を磨き出して――

『何だかあなたは僕の指輪に意味があるやうに考へておゐでのやうですね――しかし、いや、なる程この石は頼子さんからいたゞいたのですよ。頼子さんと古い友達だから――あのひとの兄さんの哲哉君と僕とは子供の時からの親友だつたもの――』

『でも、その兄さまとも、あなたは去年の秋の暮から絶交あそばしたでせう？　頼子さまからそんなことを伺つたわ』と、德惠子はすかさずいつて、語調をかへて、

『しかし、そんなことはどうだつて私には關係のないことですわね。私はたゞ、あなたの珠玉をお褒め

したゞけ――そして頼子さまのことをその珠玉から思ひ出したゞけ――氣になさることは少しもありませんわ。何かお氣にさはつたやうでしたら許して下さいましね』

『僕はどうしてかうひとから誤解されるんだらうなあ』と、貞雄は嘆息するやうに、

『成程、哲哉君に僕は絶交されたのです。まるで僕が頼子さんを誘惑して、そして捨てたやうにでもあの人は考へたのです――哲哉君どころか、頼子さん自身でも、そんな風に思つてゐるらしいのです――ところが、僕は、あの令嬢にいひ寄つたことなぞは一度もありはしない。僕はたゞ、古い女友達としか考へてはゐなかつた――』

『でも、あなたはレビツキ氏の演奏會が帝劇にあつた時、どこかの女優と御一緒で、通りすがつた頼子さまに挨拶さへなさらなかつたといふぢやありませんの？』と、德惠子は世間ばなしをするやうな氣輕な調子で口をはさんだ。

『頼子さんはそんなことまでいつてゐましたか――みんなあのひとの誤解ですよ――何しろ狹い帝劇の廊下ですもの、華やかな人波の中ではちよいとさう通りすがつた人に氣がつくものぢやありません――』と、いひわけする貞雄に德惠子はあざけるやうな、高らかな明るい笑ひを浴びせかけた。

『いゝのよ――よろしいのよ――何も私にまでそんな辯解をなさらなくつても――しかし、ねえ、貞雄さま、あなたのやうに、近づく女性といふ女性の氣持を掻き亂すことが出來たら、さぞ面白いでせうねえ――いゝえ、そんな顏をなさらなくたつて、私でも男ならさうした遊びがしたいわ。遊びは危險なほ

ど面白いものですもの――火遊びが子供に取つて一ばん面白いやうにね――たゞ、今だつて、若しあなたのお芝居を拜見するのが、私でなくつて、頼子さまや何かのやうな大人しい、内氣な、そして感じ易い方だつたら、お芝居と知つてゐても掻き亂されてしまひますわ。でも、私は大丈夫――私はこんなお轉婆で、ジユリエツトには不向きなんですもの――ほ、ほ、ほ、ほ』

貞雄は哀訴した――

『あなたはひどい――あなたは若い社交界の逸話を信じすぎる――どうして僕が――』

『ほ、ほ、ほ。そんなに氣になさらないでも宜しいわ。さあ、お約束のピアノをお聽かせ下さいな――』

『あゝ、あなたは何といふ殘酷な方です！』と、貞雄は兩手で後頭部を抱へるやうにしながら哀求するやうにいつた。

『あなたは全然誤解してゐらつしやる。僕はあなたは頼子さんなぞとまるで違つた――僕達の氣持を十分了解して下さる方だと思つてゐたのに――僕はあなたに冗談をいつてゐるのではないのですよ――こんなに心からいつてゐるのに――僕はあなたにお目にかゝつた時、これまでたづねてゐたたつた一人の女性に逢へたといふやうな激しい感動を受けて、その夢から今でも醒めることが出來ずにゐるのに――あなたは僕をまるで獵戀家のやうに笑つておしまひになる――』

『もうおよし遊ばせよ』と、德惠子は冷たい微笑で、他を顧みたまゝ言つた。

『さつきからもうお芝居はおよし遊ばせと申し上げてゐるのぢやありませんか――お芝居のお相手には、頼子さんがお逢ひになつたといふ女優さんの方がよつぽど向いてゐると思ひますわ。ほ、ほ、ほ』

『頼子さんがみんなあなたに中傷したのだ――あのひとは僕を愛してゐたかも知れない。それなのに僕があなたに惚み始めたのに氣がついて、わざとあなたの前で僕を讒訴したのだ――それに違ひない――』と、貞雄がくど〳〵といひ出すのを、德惠子は頭から押しかぶせるやうに――

『貞雄さま、そんな男らしくもないことを仰しやるものぢやありませんわ。ほんたうの男性といふものは、女性の前で女性同士の惡口をいふものぢやありませんのよ。ことに頼子さまは、私の子供の時からのお友達なのですもの――あの方が嘘やいつはりを仰しやる方か方でないか、あなたより私の方がよく知つてゐる積りですの――私だつて、あなたがお友達としてどんなに賢い、どんなに快活な方だか、それは十分尊敬してをりますわ。でもそれ以外の方面では、もう默つてゐて下さいましな。でないと、かういふ美しい、靜かなおつき合ひさへ出來なくなるかも知れませんわ。私はこんなわがまゝな、勝手な、いけない〳〵娘ですもの――頼子さまのやうなあゝいふやさしい氣性ではないんですから――』

『あゝ、あなたは僕をどうしても信じて下さらないんですね――こんなに哀願しても――』と、貞雄は呻いた。

『ほんたうにもうお止し遊ばせよ。それより、さあ、ピアノをお彈き遊ばせよ。あなたがお彈きになれば、私、うたはしていたゞきますわ』

德惠子は長椅子を離れて、壁際のピアノの方へ行つた。そして兩手で頭をかゝへ込んだまゝ、さも切なげにうつぷすやうにしてゐる貞雄の方を、蔑すみの微笑でながめて、

『お彈きあそばさないの？　ぢやあ、私に樂器を拜借な――』

彼女はピアノの前に坐つた。そしてひどく落着いて手の込んだドビユツシの練習曲を二節ばかり彈いたが、貞雄が、いつまでも才動きもしないので、冷たく、乾いた調子になつて、

『そんなに默りこんでおしまひになつて、何かお氣にさはりましたの？』と、いつて、書棚の上の黑い置き時計をちよいと眺めて、

『おや、隨分長くお邪魔してしまひましたわね――今日宅でお友達と會ふ約束がしてありますから、そろそろお暇いたしますわ』德惠子は黑く光るピアノの蓋をしめた。貞雄はあわてたやうに顏を上げた。

『德惠子さん――もうひと言きいて下さい』

『何ですの？』

德惠子は立つたまゝ、明るすぎる微笑で答へた。

貞雄は眉を寄せ合せるやうにして、女を見上げた。

『ぢやあ、どうしても僕の申し込みはうけて下さらないといふのですか？』

德惠子はもう貞雄の態度なぞには見向きもせず、扉の方へ歩くのだつた。

『さあ、もう母が待つてをりますわ。いつかまたゆつくり遊ばせていたゞきませう』

貞雄は止むなくあとについた。この女々しげな、その癖どこまでも圖々しい青年貴族は、なか〳〵まだあきらめてはゐないやうに見えた。

『いづれあなたは分つてくださるでせう――きつと――』と、彼はたわゝな黑髮と、綠色の訪問服の襟の間に現れた、白い、ふくよかな頸筋を見つめるやうにしながら、扉のところで呟いた。

德惠子は別なことを答へた。

『いづれ賴子さまも歸京つていらしつたら、御一緒におたづねくださいましね。私の方へも――』

貞雄は溜息をした。

二人は元の客間に歸つた。

あとで、老主人との間にどんな話が取り交されたか、母夫人は先刻より大分なだらかな目顏になつてゐた。二人の目は、這入つて來た若い人たちの上に、意味ありげな微笑でそゝがれた。

『ピアノが聞えたが、きかせていたゞいたの？』と、母親がいつた。

『いゝえ、私がきかせていたゞいたのです――いつも令嬢のピアノは素晴らしい』と、貞雄がすかさず口をはさんだ。

德惠子は母親をながめた――

『もつとゆつくりさせていたゞくといゝのだけど、お友達と約束がありますから、私は失禮させて戴きますわ』

母親は德惠子の表情からもつと深い意味を讀み取らうとする眼付をしたが、娘の顏に或るいかつげなものが漂つてゐるのを見てとると、ちよいと眉をひそめて、それでもそのまゝうなづいた。

『さう――では、もうお暇しませう』

『まあ、よろしいではないかな――わしども年寄りは若い人達の仲よさゝうなのを見るのがもうこの世に殘された樂しみなのぢや』と、老人は霞んだ目を皺めるやうにしていつた。

『貞雄さま、お暇がありましたら、いつでもおたづね下さいましな――あなたさまなら、どんな時でもよろこんでお迎へ致しますわ。――どうぞこれから他人ではないと思召して』と、――母親は青年貴族の方へ、出來るだけの親しみを見せていつた。

貞雄は微笑を見せて、うなづいた。

『有難う、光榮です。必ずお伺ひします』

――母子はまた自動車の人となつた。德惠子には、母親と老子爵との間にどんな會話が開展されたのか大抵わかつてゐたが、母親の方には、若い二人がどの程度まで接近したか、例によつて冷たげな娘の顏から、讀み取ることが出來なかつた。彼女は德惠子の口からくはしく聞き出したかつたが、それが却つてこの勝氣な娘の氣持をまたこゞれさせさうなので、わざと默つてゐた。

彼女は昨夜の雪が高い屋根にだけ殘つて、それがあざやかな藍色の空の下に明るい日ざしを受けて美

しく輝いてゐるのを眺めながら、

『まあ、大そう晴れ〳〵しい日だこと』

なぞと、時々呟いて見るだけだつた。

娘もそのたびに、それに合槌を打つやうなことを答へた。彼女はすつかり決心がついてゐた。貞雄に對して手きびしい態度を取つたことを兩親が知つた場合、どんなに强烈な壓迫がふりかゝるか、罵倒が浴びせられるか、わかり切つたはなしであつた。しかし、彼女はもう何の危惧も躊躇もない。さうした場合が來たら、思ひ切つて撥ね返し、突き退けるだけだ。そして自分の思ひ通りな道をすぐに取るだけだ——長い間のうるさい厄物は、もうおきメスを加へられるであらう！

彼女は不思議な苦痛の快感を豫感して、ひとり殘酷な微笑を笑み續けるのだつた。

親子

自動車の中では少しも問題に觸れようとしなかつた母親は、家について、德惠子が、そのまゝ自分の居間の方へ去らうとするのを見ると、呼び止めた。

『ちよいと話したいことがあるのだよ——お父さまのお部屋の方へおいで』

德惠子は辭まなかつた。二人は鐵色の分厚い、大きな樫の扉を開けて、父親の書齋に這入つた。僅か殘つた髮の毛を大事さうに分けた、赫い角顏の、頸の短い長沼新兵衞は、仔牛のやうにふとつたからだ

を、細かい大島絣に包んで、肱椅子にどつかりと埋まり込んで、片手に大葉巻を、片手に何やらタイプライター刷りの書類を取り上げて目を通してゐるところだつた。そばに瘦ツぽちの會社員が、うや〳〵しげに突つ立つてゐた——關係の事業についての何かの用向きらしい。

『おゝ、もう歸つて來たのか』と、新兵衞氏は母子を細いキラリとする目で一瞥して呟くと、そのまゝ書類を若い會社員の方へ突きつけた——

『大北君にいふがいゝ——うちの會社では慈善事業をしてゐるんぢやあないんだ。いゝか。金をこんなドブに捨てるわけには行かん——と、さういつてくれ給へ』

そして、もうその男の方へ、見向きもせず、妻子の方へぐるりと椅子を向けてしまつた。會社員は書類を赤皮のポオトフオクオにをさめて、無言で腰をかゞめ

て出て行つた。

『さあ、お掛け――そして、中條ではどんなだつた？』

せか〳〵と大實業家はいつた。

夫人は有り合せた椅子に坐つた。娘は大きなテーブルによりかゝるやうにして立つたまゝ、まるで興味のない眼付で室隅をながめてゐる――

『子爵も大そうお喜びでございましたよ』と、夫人は乾いた聲で答へて、

『あの方も、私たちとは別な意味で、やつぱり今日の訪問を待つてゐらしつたやうでしたわ』

『では、わし達の意志をはつきり通じて遣つたのぢやな？　それは勿論よろこんだらう――お蔭であすこの家政も立ち直るといふものだから』と、男爵は赤黒いくちびるをまばら髯の間でねぢるやうにした。そしてちよいと德惠子の方を見て――

『で、そつちの方は？』

新兵衛氏は事業家だから、話をいそいだ。

『當人同志の方もうまく行つたかな？』

母夫人は德惠子に、いくらかいかめしげな聲きでいひかけた。

『德惠、貞雄さまはあんたに何かいつたでせう？　あんたは何と答へたの？』

德惠子ははつきりした目で微笑した。

『何か仰しやつたかつて？　ほ、ほ、ほ。さういへば、つまらないことばかり仰しやつて、私を笑はせて困りましたわ』

母親は眉をしかめた。

『德惠――あんたは今日の訪問の意味を十分知つて出かけた筈だね。だから、かうしてお父さまだつて結果を待つてゐらつしやるのだよ。あの方は求婚したでせう？　明日にも私のところへ許しを受けに來たいと仰しやつたでせう？　あんたは勿論承知して上げたと思ふけれど――』

德惠子はいつもの癖で、眉をあげる樣にして微笑を續けた。

『まあ、まだお母さまは本氣でそんなことをいつてゐらつしやるの！　貞雄さまは私に心から求婚なさる意思なんか、向うでも持つてはゐらつしやらないわ、この長沼家と緣組はしたいと思つておゐでかも知れなけど、私といふものを問題になすつてゐないのよ。それは、いろ〳〵な事情から、私ちやんと知つてゐるんですの――お父さまやお母さまは、どう考へてゐらつしやるか知れないけれど――』

『でも、お前たちは仲よくピアノまで彈いてゐたが――』

と、母夫人は險しげに娘を見て、それでも父親の前だけに、すぐいつものやうに癇は立てなかつた――

世間からは無情冷血の黃金魔といはれるこの老實業家は、常々德惠子にだけは目がないのだつた。

父親は細い目でじろりと娘を見た。

『で、結局、貞雄君の申し込みを受けてやつたどらうね？』

娘は相變らず明るく笑つたまゝ、さも平氣らしくハンケチを指に卷いたりほぐしたりしながら答へた。

『でも、あんまり馬鹿らしいんですもの。お父さまだつてお母さまだつて、私が答へたより外のことはいへなかつたらうと思ひますわ――』

『と、いふと？』

『私、あんまりお芝居じみてゐるつて笑つて上げましたの。あの方はつい先達てまで頼子さまとどんな仲だつたか知らないものはないわ――それから女優さんと――それでゐながら私の前で、さも切なさうに溜息なんかつくのだから、笑つて上げる外はないぢやありませんか――』

『そんなことはもうとうに問題ではなくなつてゐる譯ぢやありませんか？』と母親は冷たくいつた。

『昨夜も今朝もいふ通り、私たちの家ではたゞ中條家の名譽や門閥が必要なのです――まあ、いゝよ――お前がどんな失禮なことを申し上げたにしろ、明日にも貞雄さまがいらしつてくださるでせう、さうしたら私達がうまくお詫するから――』

しかし、德惠子はそれには答へずに、父親の方を向いて、

『お父さま、私、申し上げて置きたいの』

『何だ？』と、父親はキラリと娘を見返した。

『私、今度の――お父さまやお母さまが考へてゐらつしやる緣談には、どうしても應じられませんから――』

『何だつて！　どうしても應じられないつて――ふん』と、父親はあまり重くも見ないといふやうに、手輕くいつた。

『お前がどんなことを考へてゐるかどんなことに興味を持つて、わし達のいひつけにそむかうとするか、いくらかわしも氣がついてゐる――だが、そんなことは詰らんことだ。何時の時代だつて、お前のやうな年の行かない娘に、自分で婿えらみなんぞが出來るものではない。また、わしどもにしても、粒々辛苦したこの財產と事業を、年の行かないお前の氣まぐれから望む靑二才なんぞに、甘んじて讓ることは出來ないのだ――よいか？　まあ〳〵、わしどもに任せて置け。中條貞雄がさう世の中の若者に比べて劣つてゐるとも見えないぢやないか――』

『でも、何と仰しやつても、私にはお氣に入るやうなお返事は出來ません。それに、私は何もお父さまの財產や事業を讓り受けたいと考へてもゐませんから――』

『馬鹿な娘だ』と、父親は突然かんで吐き出すやうに呟いて、夫人の方を一瞥して、

『あつちへ連れて行け。德惠は何か詰らんことを考へて昂奮してゐるのだ――この財產と事業を、一人娘のこの子が讓り受けたくないつて――馬鹿な、ぢやあ、長沼家を一體だれが相續するのだ』

『それはお二人で適任者をおさがしになるがいゝわ。私は別なことを考へてゐますから――どの道、今

日度の緣談はお斷りしますわ』と、德惠子は相變らずさも手輕な調子で繰返した。

『この娘はまるで馬鹿げたことで頭が一ぱいなんです』と、母親は蔑すむやうに微笑んで脣を歪めて、

『さあ、お父さまの仰しやる通り、あつちへおいで。そしてようく考へて見るがいゝ。私たちがお前をどんなに案じてゐるかといふことを——』

『どう考へて見ても、あなた方は私のことなんぞを案じてはゐらつしやらないわ。あなた方は、いつも仰しやる名譽や門閥で一ぱいなんだわ——何度も申し上げるやうですけど、どうしてもいやなことはいやですから、繰返して仰しやつて下さらずにね——お母さま』と、いひ捨てゝ、德惠子は立ち去らうとした。父親は激しく呼び止めた。

『德惠！　それではお前はどこまでもわれ〳〵にそむく氣なのか』

新兵衞氏が德惠子を呼び止めた聲には、只ならぬ激しさがまじつてゐた。彼は元の位置に戻つた娘を、きつく吸つて荒々しく吹いた葉卷の煙の間からにが〳〵しげに眺めた。

『德惠、實はこの頃お前が大分わがまゝな考へを持つてゐることは、お母さまから聞いてゐるのだ——だが、わしは、そこまでお前が馬鹿な女だとは思つてゐなかつた。外のわがまゝは何でも許してやる。しかしこの結婚の問題だけは、お前一人の氣持で實行されてはたまらんのだ。お前がこの長沼家の娘である以上——わしたちの娘である以上、わしたちの意見を重んじて貰はにやならん。なぜといつて、お

前の結婚は、お前一人の欲望の充實のみが主眼ではないのだからな。この一家の榮辱、盛衰に最も重きを置かれねばならぬ。で、一人娘の結婚にはわしたちが責任と權利とを持つ必要が出來るわけだ。よいか。この問題だけは、お前一人の意見で左右出來るのではないといふことを、はつきり知つてゐて貰ひたい』

德惠子が冷たい眼で父親を見返したまゝ、まだ口を開かぬ間に、母夫人はそばから喙を容れた——

『それにその候補者が、不具とか馬鹿とかいふのなら知らないこと、貞雄さまのどこがお前の氣に入らないのだらう。貴族の若さまたちの間でも、指に折られる美男子で、あの通り才氣のある方ではないか。昨夜のお客樣の中に、あの方に勝る青年が、一人だつてゐましたか？　どこから見ても三國一の婿君です——それなのに、自分の意地ばかり通して、いやの應のといふお前の氣が私たちにはちつとも分らない』

『兎に角——』と、父親はきつぱりと續けた——

『わしはこの長沼といふ一家を、自力で創つた人間だ。お前の結婚に關しても十分に干渉する權利を持つてゐると信じてゐる。この家の名譽を若い娘の妄想の犧牲には斷じて出來ないからその積りでゐるがいゝ——それから聞けば、お前は城木なんぞといふ、下級社會の人間に多少興味を持つてゐたらしいといふが、全くあきれた話だ。勿論、こんなことをいひ度くはない——信じたくはない。しかし若しさうした下らない人間の誘惑に乘るやうなお前なら、到底この家の相續者たる資格はないからな——馬鹿げ

た世評でも立たんやうに用心するがいゝ。』

『あなた方の御希望はよく分りますわ』と、徳惠子は別に怒つた容子もなく、落着いた調子で口を開いた。

『それは勿論この家はお父さまとお母さまのものですもの、この家のことについては私には何も申す資格はありませんわ。ですけれど私の結婚については別だと思ひます。私の心とからだとの問題ですから——兎に角何と仰しやつても貞雄さまとのことは、私は厭でございますから、それだけはお斷り申して置きます』

『ふん、お前のさうした切口上も、世間並の家庭でなら通用するだらう。が、この家では駄目だ。わしはこの家を親から讓られたのでも、世の中からたゞ頂戴したのでもない。わしは自分で働いて、自分で作つたのだ。そしてこの上にも——十倍も百倍も立派な長沼家に、どうにかして生きてゐる中に仕上げなければならんのだ。中條家は今下火だ。しかし、あの通りの家柄で、素晴しい潜勢力が貴族の間に眠つてゐる。わしの金力でそれを醒ませば、貴族社會は貞雄君を宰相にも戴いて甘んぜざるを得ないのだ。わしの希望をこの世で實現するには、あの青年は缺くことの出來ない人物なのだ——そこに氣のつかぬ程馬鹿なお前でもあるまい』

徳惠子は日頃は、一人娘の自分にあんなに甘い父親が、なぜ今度の問題にだけ夢中になつて、事によれば自分を暴力で壓迫しても彼自身の意志を遂げようとしてゐるのか、その理由はもうとうに知り拔いてゐた。野心の遂行のためには、どんな非難をも不德をもお構ひなしの性質の父親——その性質によつて素寒貧から今日の暴富を積んだ父親——彼女は自分が魂と肉體との蹂躙に甘んじない限りは、當然その父親と喧嘩分れをする外はないのだと諦めてゐた。彼女は相手の言葉が續けられるのを待つやうに默つて立ちつくしてゐた。

『私たちがどんなにお前ばかりを中心にしてゐるかよく分つてゐる筈ぢやないか……婿えらみをするにしても、どれ程骨を折つたか知れやしない。いろ〳〵な人が持つて來る候補者の中から百人から十人、十人から一人をえらみ出したのが貞雄さまなのだよ。どうしたつてもう二度とあれ程の人は見つかりつこはない。徳惠、お前は、その片意地が傷だ。お前だつて昨夜もあんなに仲よくあの人と話してゐた——私は溫室で花を投げてあげたことまで見てゐるのだよ——さあ、お父さまの前で、はつきり宜しいやうにと仰しやい。羞かしがることも、意地を張ることもありはしない』

母夫人はさすがに女で、口を酸くするやうにして說くのだつた。

——しかし、徳惠子は身につけるものはハンケチ一枚でも、自分の好みでなくては生きられぬ女だつた。まして男の問題だ——若し、彼女自身の選擇の結果とすれば、貞雄より百倍劣つた人間にも、甘んじて身を任せてもいゝのである。だが、それを絕對に他人に選ませるわけには行かぬ——生れた家、生んだ兩親の野心の犧牲傀儡として、生きつゞけることは到底出來ぬ。それは彼女には理論でも道德でも

なかつた。生れついた氣性から來た宿命的なものだつた。

『どうしてもお前はわし達のいふ通りにはなれんといふのか？　貞雄君との約婚を拒むといふのか？』

と、父親は險しい目をしていつて、吸ひ差しの葉卷を灰皿にたゝき込むやうにした。

『まあ、よく考へてごらん――』と、母親は執成さゞるを得なかつた。

『貞雄さまはきつと明日私のところへ求婚にいらつしやるだらう。晩寢る時までに返事をなさい。それまでお父さまにも待つて戴くから――ほんたうに世話の燒ける子だよ』

だが、德惠子は母親のさうした言葉を感謝して部屋を去らうとはしなかつた。彼女は同じやうな靜かさを保ち續けながらいふのであつた――

『いつまで考へさしていたゞいても同じことですわ。私、あの方とは結婚しません――あの方ばかりでなく、お父さまやお母さまがさがして下すつた方とは、とても結婚出來ないと思ひますわ。あなた方と私とは、平常の生活だつてまるで違つてゐるのですもの――すべてが違つてゐるのですもの――』

『何といふことだ！』

新兵衞氏はいつぞや土地部長が見込み違ひをして、五十萬圓ばかり見す〳〵損をした時よりも、もつと激しい憤怒に蒼ざめながら叫んだ。

『それが親にいふ娘の言葉か！　あゝ何といふことだ！　そんなことを親の前で公言する娘がどこの國にある――』

德惠子はキラ〳〵と輝く細い目を避けようともせず、また言つた。

『普通の親子の間では、私の言葉はいけないかも知れませんわ。でも、私といふものを全然無視して家のことや御自分たちのことばかりお考へのあなた方には、さう申し上げる外はございませんもの』

『これが教育だ！　これが現代の娘だ！　わし達の娘だ！　畜生！』

新兵衞氏は机の端にしがみつくやうにして、德惠子を睨みつめたまゝ、赤黑い脣を引きねぢつて呻いた。

『だが、絶對にわしは命令するぞ――貴樣はどうあつても貞雄君と結婚しなければならんのだ。それを拒めば、わしは貴樣を廢嫡する――わしはこの家から貴樣を放逐する。斷然たゝき出してしまふ――貴樣のやうな馬鹿娘なら、手鹽にかけて育てずとも、どこの裏長屋からでも拾つてこられるわい』

『そんなにお父さまをおこらせてしまつて、お前どうする積りだ？』と、母親は、眞逆こんな傍若無人なことを父親の前でいひ出しはすまいと考へてゐたらしく、これも顏色を變へてうろたへて口をはさんだ。

『さあ、あつちで氣をお鎭め』

『お母さま、私、ちつとも氣を昂ぶらせてなんぞゐはしませんわ』と、德惠子は幾らか悲しげではあつたが微笑んですら見せた――

『お二人と私とは全く違つた氣持で生きてゐるのだから仕方がありませんわ』

『わしは親權によつて、貴様を監禁するぞ――悔いればよし、さもなくば廢嫡だ！　おい、これを部屋に入れて鍵をかけてしまへ』

新兵衛氏は生れてこれほど威嚴を傷つけられたことがなかつたに相違なかつた――彼の考によれば、自分が生んだ娘なぞはどうにでもなる人形のやうにしか思はれなかつたのだ。そして理論的にも當然、娘たるものは親たるものと意思の方向を同じくして、同じ欲望の充實に生きねばならない筈だつた。彼は自分が實際生活においてたどつて來た、あの自己一點張りな精神が、美しい愛娘の白い胸の中に、かうまで根強く遺傳されてゐようとは思ひもかけなかつた。

『さあ〳〵、おいで』と、母夫人はいつもの皮肉ささへなくしてしまふ位ハラ〳〵していつた。

『お前どうかしてゐるのだよ――きつと頭が惡いのだ。こちらへおいで――さあ』

――德惠子は靜かな足どりで、母親が導くまゝに、父の書齋を出た。そして淡紅色の寢間に續いた優雅な居間に來た。

『ほんたうに、お前はどうかしてゐるのだよ』と娘の部屋にたゝずんだまゝ、母親は繰返した。

『あんな思ひ切つた事をいつて、誰だつておこらずにはゐられますか――私だつて腹が立つてなりはしない。でも、やつぱし娘だと思ふからいふのだよ――考へ直すがいゝ、お父さまはあゝいふ氣性の方だ。役にも立たない娘に、どうしてこの家を讓らうとなぞなさるものですか――廢嫡するといふのは嚇かし

ではないよ。お父さまはきつとお前を逐ひ出して、立派な夫婦養子でもなさるだらう――實際、もしお前が本氣であんな事を考へてゐるなら、この私にしたつてたよる氣にはなれない――これだけの家にするのに、私たちはどんなに苦しんだか――お前なんかに分るものか！　まあ、この部屋で、ゆつくりお考へ。もう少ししたら私が返事を聞きに來る』

母親の聲は再びいかつくなり、眼付はこはゞつた――あんまり落着いてゐる娘の姿を見ると、不思議な憤りがかき立てられて來るに相違なかつた。

しかし、德惠子は默つてゐた。彼女は母親と、もう爭ひの堂々めぐりをする氣持はなかつた。言ふだけのことは兩親を並べて言つてしまつた。

『もつとお落着き――呆れたことだ。ほんたうに呆れたことだ』

母親は部屋を出て扉を閉めた。

徳惠子は紅皮の二人椅子にもたれた。彼女は重荷が下りたやうな氣がした。貞雄にも存分言つてやれば、兩親にも思ふだけのことを告げ知らせた――これで昨夜、城木に母親が加へた侮辱に、かなり手ひどく復讐が出來た。これでいゝ。

――だが、城木さんはどうしてゐるだらう、あの内氣な、弱々しい人が、お母さまからそんな辱しめを受けて、二度とこの家の閾を跨ぐ勇氣がある筈がない。どこへ行つてしつまたのだらう――

徳惠子はさう考へると急に不安になつたが、恐らく大學時代の友人の家にでも行つてゐるのだらうと思つて見た。城木は友人が多い方ではなかつたが、それでも徳惠子が見知つてゐる人物も二三人はあつた。おきみに電話なりで照會させて見よう。きつと、一番親しさうな木村さんのところへでも行つてゐるに違ひない。

と、そんなことを考へてゐるうちに、そのおきみが、紅茶と菓子を捧げて這入つて來た。

『お着かへあそばしますか』

『あゝ、もう少ししたら――』徳惠子は紅茶を飲んだ。乾いた咽喉にはうまかつた。

『咽喉が乾いちやつたわ――お父さまと喧嘩をしたら』と、彼女は親しい小間使に微笑んで見せた。

おきみもうす〳〵いざこざに氣がついてゐた風で、

『ほんたうに、どうして口應へなぞ遊ばしますの、きみは心配してをりましたわ』

脱　出

『そんな事は兎に角――』と、徳惠子は今考へてゐたことの方へ話を持つて行つた。

『きみ、御苦勞だけど、お父さまやお母さまに氣づかれないやうに、電話をかけておくれな』

彼女は膝近く投げ出してあつた黑い提袋を引き寄せて、中から金縁の小さなメモを取り出すとほそいエヴアシヤープで何か認めて、そのページを引きさいて小間使に渡した。

『本郷の木村さま、白金臺町の本田さま――どちらも時々城木さんを尋ねていらしつた學士の方よ。そこへ電話をかけて、城木さんが行つてゐらつしやるかどうか伺つて頂戴』

『畏まりました』と、おきみはその紙片を丁寧に二つに折つて、緋色勝ちな帶の間にはさんで、

『事務所の方のお電話を使へば、どなたにもわかりませんから御安心あそばせ。それにしても城木さんはお屋敷から解職になつたとかみんなが申してゐますが、ほんたうでございませうか？』と、いひ憎さうに、その癖不安と同情とをまじへていつた。

『お父さまやお母さまは、鬼か獸のやうな人でなくつては役に立たないとお思ひなんだわ。でもきつとあの方達は後悔なさるわ。後悔させずには私が置かないわ』

徳惠子は眞直に前を見て呟いたが、ふと、おきみを見て、何か思ひ出したやうに、

『でも、お前はいゝわねえ。お前はいつだつて幸福さうだわねえ。いつ青木と結婚するつもり？　その

時には、私、どこにゐても祝つてあげるわ』

おきみは、だしぬけにそんなことをいはれて、可愛らしい、ふつくりした頬を耳まで赤くした。彼女は運轉手の青木にいつの間にか戀してゐた――でなければ誘惑されてゐた。夕方、前庭の木蔭を歩いてゐた德惠子は、自動車庫のうしろの暗がりで、この小さな娘が青木の胸の中にさも幸福さうに顏を伏せてゐるのを見てしまつたのだつた。それから隔意のない主從の間にこの問題は祕密ではなくなつてゐたのである。

『何だつてそんなにあかくなるの？　お前はいつまでもやさしいいゝ子だわねえ。ほんたうに、その時には、私祝つてあげてよ』と、德惠子はくり返したが氣がついたやうに、右手の指をさぐつて、眞珠の指環を拔き取つた。

『でも、その頃、私、どこにゐるか知れないから、今の中から祝つて置く方がいゝわね――これをお取り』

おきみはどぎまぎした。

『それでも、お嬢さま――』

『いゝからお取りよ。ことによると私、急に遠い旅行でもするか知れないの――記念よ』

おきみは、ある暗示を感じたやうに、大きな目で德惠子を仰いだ――

『その時にはどこまでゝもお供いたしますわ』と、彼女は贈られたものを、かたじけなさゝうに白い掌

に受けたまゝ言つた。

『詰らないことを――青木が泣くわよ。きつと――それよか、今の電話を早くかけて頂戴、ね』

おきみは、一度立ち去らうとしてもぢ〳〵して、

『あの――お嬢さま。私、たのまれてゐるのでございますけど――また御本が拜借したいつて――』

『あゝ、青木がさういふの？　ぢやあ、いつでも來て、自分で書棚から持つておいでつていつておくれ』

運轉手は神田方面のある私立大學も出てゐるのだつた。暇があれば運轉臺に坐つてゐても書物を離さぬ方で、おきみを通じて令孃の書庫から借讀することを許されてゐた。下人が奥に立ち入ることは禁ぜられてゐても、大そう從順らしく見えるところから、母夫人のお氣に入りとなつてゐる彼だけは、書物を選擇する時だけ令孃の書齋に出入することを大目に見てもらふことが出來てゐた。

『あの人はきつと出世するかも知れないわ。勉强家だから』

おきみは、德惠子から戀人をほめられていそ〳〵と立ち去つた。

おきみが立ち去ると、間もなく運轉手の青木が這入つて來た。少し長目な髮、青白い額、やゝとがつた顴骨、神經的に輝く目をもつた青年で、碁盤縞の背廣に黑い襟飾りをして、痩せた身體を前かゞみに、いつもの伏目で近づいた。

『とんだ御迷惑をお願ひいたして相濟みません――先日拜借のストリンドベルヒを讀んでしまひました

から、何か外のを讀まして戴かうと存じまして――』

青木は幾らかかすれた聲で言つて、手にした黄布表紙の和譯本を、片手で撫でるやうにした。

『何でもお持ち――だが、あんたは文學者にでもなる積りなの。大分熱心に本を讀むのね――』と、德惠子はたづねた。

『いゝえ、どういたましして。われ〳〵風情がそんな野心はないのですが――』と、彼は蒼ざめた頰にかすかな冷たい微笑をよぎらせた。

『私は本を讀んで、人間といふものがどんなことでも空想したり實行したりすることが出來るといふことを知るのが好きなのでございます。それだけが私の讀書の主眼なので、別に何の目的もありません』

德惠子はいぶかしげな目で相手を眺めた。

『まあ、あんたは哲學者なのね』

『いゝえ、私はつまらない人間です――たゞの運轉手以外のものぢやございません』と、青木はまた蒼ざめた笑ひをうかべて、

『つまらない人間だから、せめて書物の中で立派な生活の姿を見たいのです――いろ〳〵な英雄や天才が、あの書棚の御本の中にゐますから――どんな德行でも、罪惡でも――』

德惠子は青木とまとまつた口を利いたことはなかつた。ふと、今、話しかけて、思ひがけない彼の言葉に接して、不思議な好奇心をそゝられずにはゐなかつた。

『ほんたうだわ――本の中にはどんなことでもあるわ。でも――』と、彼女は隔意なく笑つた――

『戀愛だけは、本の中に求めないでも、あんたは大丈夫だわね。きみはあんなに喜んでゐるのだから――』

運轉手は蒼白い額に片手を當てるやうにした。

『お孃さまは鋭くつてゐらつしやる』と、さゝやいたが、急に、底光りのするひとみで眞直に德惠子を見つめた。

『――お部屋に長くお邪魔をするわけにはまゐりません。で、突然ですが申し上げますが、實は、少々祕密なお話があるのでございます。それで書物のことにかこつけて伺ひました――』

德惠子はぢつと相手を見た。『祕密な話つて？』

運轉手は黄色い書物を持つたまゝ、答へはあとにして壁際の大きな黑塗の書架に近づいて、その本をもとにをさめてあつた位置に戻した。そして、靴音も立てずに、德惠子の前に近づいて立つた。

彼はまた伏目になつて、前半身を突き出すやうに囁やいた――。

『城木さんに、つい先程――中條さまのお屋敷から戻つてからお目にかゝりました』

德惠子は驚愕と歡喜とをかくすことが出來なかつた。

『まあ！』

『たつた今お目にかゝりました』

『で！』と、德惠子は、二人椅子から少し腰を浮かすやうにしたまゝ、大きな、輝かしい目で、相手をもどかしさうに見つめつゞけた。

『見馴れない車夫が私を呼び出しますので、御門の外に出て見ますと、そこにあの方が立つてゐらしつたのでございます。大そう疲れたやうな御樣子で、お顏いろも惡うございましたが——』

青木は、じろりと、見ないやうに德惠子を見た。德惠子はハンケチを片手の指にぎり〳〵卷くやうにしながら、先をせかした。

『で？』

青木は運轉手商賣の人間のそれとは思ひもつかぬ程蒼白い兩手を、胸のあたりに組み合せるやうにしながら、低い、かすれ聲で話した——

『で、あの方が仰しやるには、今度決心したことがあつて、もう二度とお屋敷の閾はまたがぬつもりだが、お孃さまには是非もう一度お目にかゝつて、とつくりとお話ししたいことがある——』

德惠子の熱く燃える目が、先を促した。

『どうしてももう一度お目にかゝらずには生きてゐられない——たしかにあの方は生きてゐられないと仰しやいました』と、運轉手は白光りのする目で伏目に德惠子を眺めて、

『だが、只今も申しあげましたやうに、あの方はどうしてもお屋敷の門をくゞるわけにいかないので、

ひどく惱んでゐらつしやるのです——さう申しては何ですが、昨晩、奧さまが御前からひどく御詰責をお受けになりましたらしうございます。そんなお話でした』

『そんなことより、屋敷へ來られないから、どうだとあの人はいふの？』と、德惠子は唾が乾き切つたやうな、乾いた調子で、せか〳〵しく口をはさんだ。

『それで、あの方は大變御躊躇のやうでしたが、たうとうかう仰しやるのです——お孃さまに、たつた半時間でもよろしいから、そつとお屋敷をお拔け出しになつて、芝公園のパークホテルまでいらしつてはいたゞけますまいか。それをお願ひして見てくれと——』

德惠子のひとみは生き〳〵しく燃えた。

『まあ！　とう〳〵決心したと見えるわね』と、彼女がさう呟くのを、青木はきゝ流して、相變らず低い靜かな調子でつゞけた——

『で、私はお孃さまに一應伺つてからお返事をすべきだとは存じましたが——大變失禮な言葉ですがこんな場合ですから許して戴きますが、多少、お孃さまとあの方のお供をして外出して、御容子も存じてをりますので、僭越ではございますが、こんなお約束をあの方としてしまひました。若し、幸ひ、お孃さまと祕密にお目にかゝれたら、とつくりとあなたのお言葉を傳へませう。そしてお孃さまに、お母さまの方を何とか口實を設けていたゞいて、夕方の六時半から、ホテルにお供します。若し、お孃さまにお目にかゝれなかつたら、明日の同時刻までに、何とでもしてお連れ申し上げると、かう申します

と、あの方は大そうおよろこびで、私に感謝すると何度も仰しやつてゞございました』

『まあ！　とう〳〵決心がついたと見えるわ！』と德惠子は勝ち誇つて微笑した。

『ありがたうよ。靑木。ほんたうに、私もあんたに感謝するわ』

『恐れ入ります』と、運轉手は腰をかゞめた。

『それについて、私からも頼みがあるのだがね』と、德惠子はさゝやいた。

『私、お母さまにお願ひして見たところで、今日は到底外出は許されないの。きみも知つてゐるけどお父さまと喧嘩をしたので當分禁足なのだから――だから、屋敷を出るには誰にも內密で、そつと抜け出す外はないのよ。その點を含んで貰ひたいの。あんた迷惑だらうから、芝までなら、私一人でも行けるから、あんたに知らん顏をしてゐて貰へばよろしいの。分つて？　今夜私がゐなくなつたといつて大騒ぎがはじまつても、知らん顏をし通してくれなければ困るのよ――そのかはり、私あんたにお禮するわ』

彼女は衣囊をさぐつて、例のプラチナ色の提袋を引き出して見せた。七千圓あまり押し込まれた袋は丸くふくれてゐた。彼女はその中から大きな札を何枚か拔いて靑木の方へ差し出した。

『二三百圓あるわ。取つて頂戴』

『いゝえ、いけません』と、靑木は激しく押し戻した。

『そんなことは斷じていけません』

運轉手は殆どけはしいまでな調子で、押しつけられた紙幣を拒んで、

『そんなことをして下さると、私が今度はお屋敷の方へ申しわけないことになります。私はたゞ、城木さんに御同情申して、お屋敷へは濟まないと知りながら、かうした事件に關係したまでゝすから――それに致しましても、お孃さまお一人を夜お歩かせ申すわけにはまゐりませんから、やはり私がホテルまでお送りいたします。私の方は、もう六時からは今日は自由な身體ですし、誰に氣づかれることもございません――六時半に、どうにかして裏の通用門をお出になつて、裏手の坂下の四つ辻までいらつしやれば、お屋敷の自動車を使ふわけにまゐりませんから、タキシイを頼んでお待ちしてをります。お送りしてすぐに、私は引返します。さういたせば、全然だれかの目にふれて、あとで私に責のかゝることはございますまい――』

『なる程、名案だわ。それにしても、どうしてあんたはさう悪堅いの。取つて置いてくれゝばいゝのに――いゝわ。あとで何とかしませう』

德惠子は紙幣を元のプラチナ色の提袋にしまつて、

『ぢやあ、迷惑でも、あんたに送つてもらふわ。そのはうが私にも安心だから――でも、何だか濟まない氣もするけど』

『何の、御心配下さいますな』と、靑木は落着いた調子で、

『私はいつもあの方を崇拜してゐたのですから――では、どうぞたゞ今私が申しあげたやうに遊ばして下さいまし。手筈が狂ふと、あの方を失望おさせするやうになるかも知れませんから』

『大丈夫よ』――と、そこへ、おきみが這入つて來た。彼女は居合せたのが戀人の青木だけなので、ためらはず復命した。

『お嬢さま、城木さまは木村さまへも本田さまへもお見えになりませんさうでございます。どう遊ばしたのでございませう』

彼女はまだ青木から何もきいてゐないと見えて、同情と悲哀とに充たされた口調でいつて、德惠子の前にうなだれた。

『いゝのよ――もう、その事は』と、德惠子は明るく答へた。

おきみは、令嬢の容子が前とはまるで變つてゐるのに驚かされたやうに見えた。

『では、お嬢さま――』と、青木は意味ありげに德惠子を眺めて、さて、うや〳〵しく頭を下げて出て行つた。

德惠子は長い間十分に目をかけてゐるおきみには、すつかり隱さずともよかつた。

『ねえ、きみ、私は今日、もう少ししたらこつそり家を拔け出さうと思ふのだよ』

おきみは激しい驚きに打たれた。彼女の若々しい、圓い黑い瞳が、ハツと驚きを浮べて、やがて不安げに翳つた。紅い唇がポカリと開かれたまゝ殘つた。

『私は城木さんに逢ひに行かうと思ふの』と、德惠子はつゞけた。

『ことによると少し留守になります。あとで騷ぎが始まつても驚いてはいけないよ。いゝこと？　默つて、何も知らなかつたといつてゐればいゝわ。お母さまがいろ〳〵おたづねになるだらうけど――』

『でも、お嬢さま――』

氣の弱い娘はかう呟いたゞけで、ワナ〳〵と身をふるはした。彼女はもう少しで泣かうとしてゐた。

『大丈夫よ、安心しておゐで、その中にきつとお前にも逢へるから――』

『でも――』おきみはとう〳〵泣いた。むつちりした娘らしい指であわてゝ彼女は目をおさへた。

『氣の弱い子』德惠子も誘はれたやうにかなしげに微笑した。

『それで、その前にお母さまに逢ふと都合が惡いから、私、寢室に閉ぢ籠つてしまふわ。着換へずにこのまゝで……で、お母さまがお尋ねになつたら氣分が惡いといつて臥つてしまつたと申し上げて置いておくれ。さあ、泣いたりなんかせずと、安心してあつちへおいで――きつと、その中お前とは逢へるよ。お互に幸福になつて――』

德惠子はもう一度わらつて見せて、そのまゝ次の寢室に這入つてしまつた。

暮足の早い冬の午後も、德惠子に取つてはたそがれの來るのがもどかしかつた。彼女は綠の訪問着のまゝ、黑狐の外套を肩に羽織るやうにして、寢室のやはらかいベッドに腰をおろしてゐた。もう二度とこの家に歸るまいと思ふ彼女だつたが、何ひとつ大事なものを選んで身につけようとはしなかつた。母

の手文庫から盗み出した七千圓だけは例のプラチナの提袋に入れたまゝ内衣嚢に入れてある。城木と二人だけなら、當分これで生きられるだらう――そしてこれだけの金なら、母の手元から持ち出したところが、別に相手に損害をかけることにはなるまい。母親が印鑑もろとも預かつてゐる彼女の預金帳には數倍の額が記入されてゐる筈なのである。

――二三度、寢室の扉がたゝかれた。一度は、流石に母親が懸念して自分で容子を見に來たらしかつた。彼女はわざと、さも眠たげな聲で返事をして置いた。頭痛を訴へて置いた――彼女の冒險を知つてゐるのは青木だけだ。おきみが彼を通じて聞いてゐるかも知れぬ。しかし、あの少女が決して兩親に密告するやうなことはないであらう――

徳惠子は窓の外に迫つて來る夕闇がだん〳〵深くなるのを樂しんだ。六時半がこの家の晩餐の時刻だつた。その時が來て彼女の不在が發見されたら、一家にどのやうな騒擾がはじまるだらう――徳惠子は、しかし、その場合の兩親の氣持を考へて見てやる氣にもならなかつた。そんなことは問題外だつた。彼女はたゞ城木と逢ひたかつた。城木を抱きしめ接吻しゆさぶつてやりたかつた。さうすれば、彼はきつと全心的に強い男になる。そして、彼と彼女とは素晴しい、生活の計畫を立てゝ、力強く世界に歩み入ることが出來るのだ――自分を單にこの一家の裝飾に、道具に、種取りに考へてゐる兩親なぞについて、何の考慮を加へる必要があるだらう――

部屋はもう陰暗たる夕べの色で充たされた。徳惠子はプラチナ時計を卷いた手首を顔に近づけた。暮

明の窓あかりに透かして見ると、まるで昆蟲のやうに小さな秒針が白い冷たい面の上をはつてゐる。五時五十八分――さゝやくやうに、そゝのかすやうに、キ、チ、キ、チ、キ、チと、それは歩みつゞける。四十九分――五十分――

青木はもうとうに屋敷を出たゞらう。辻待の自動車を坂下まで持つて來てゐるだらう。誰にも見つからないやうに屋敷を忍び出して、誰か待つてゐるところまで行けばいゝのだ。

徳惠子はベツドをはね下りた。脱いで投げ出してあつた黑の手袋をきつくはめ、外套のボタンをすつかり掛けた。彼女は耳を澄ました。驚くばかり平靜に、前後を聽きすまして、寢室の扉を開け、見返りもせず、裏廊下を歩いて行つた。

夕方の屋敷中の注意は、靜かな、寂しい裏庭の方には注がれてゐなかつた。彼女は安全に黑い櫻の並木の下まで駈けぬけることが出來た。暗い下蔭を、高い石塀に沿うて通用門の方へ急ぐ――重たい冷たい潜戸は、かすかな鈴の音を立てゝ開いた。

そしてもう彼女は、凡のない、しかし、身を切るやうなしいんとした夕寒の裏路に立つてゐた。

徳惠子はやはらかい毛で蔽はれた外套の襟を立てゝ、白い頸もほゝもかくしてしまつた。そして心が急ぐのを強ひて押し靜めるやうにしながら、踵の高い靴の足下に氣をつけて、青木から指示されたやうに坂下の方へと下りた。あたりは屋敷つゞきである。一二度使小僧の自轉車が通りすぎたゞけで、人にも逢はなかつた。

だら〳〵坂を下りると、その四つ辻に、黒い四角なものがうづくまつてゐた。自動車だつた。

『待つて？』と、徳惠子は冷たい暮闇の中で、たゝずんでゐた男にいつた。

青木は帽子を取つて、扉を開けた。

『さあ、どうぞ』

青木は彼女のあとから車に乗つた。

辻自動車はヘツドライトを突然煌かした。爆音がひゞき、薄ぎたない外套に包まれた運轉手は、默々としてハンドルを廻した。車は動き出した。

魔手に落つ

……徳惠子と青木を乗せた自動車は、ヘツドライトの眞白な光に濠端の闇を照らし、寒氣に人も疎らな巷を走つて、間もなく芝の山内にかゝつた。そこに着くまで二人は殆ど口を利かなかつた。

大きな杉杜の間の坦々たる道を自動車は縫ふやうに進んだ。

『城木さんがさぞ待ち兼ねてゐらつしやいませう――もう直ぐです』

と、青木が例の皺枯れたやうな聲でさゝやいた。

徳惠子は答へずにうなづいた。彼女の心は不思議な情熱で一ぱいだつた――人戀しさといふ生やさしい感情ばかりではなかつた。激しい、燃え上がる狂想で、瞳はふすぼり、齒の根はがち〳〵と觸れ合ふ

程であつた。

――あの人の顏を見たら、なぜそんなに氣が弱いかと、睨み据ゑ、怒鳴りつけ、拳さへふり擧げて見せよう――それから突然笑つて、許してやらう――うんと抱きしめて冷たい額を思ひ切り吸つてやらう――耳朶を嚙んでやらう――激烈に抱きしめて、全身を振りまはしてやらう――

『もう無駄よ、もがいたつて？　私と一緒に、こつちへついていらつしやい！』と、さういへばいゝのだ。屹度々々あの人に力を吹き込んでやる。あの人に生活の目を開かしてやる。――生きるといふことが、どんなに激しいものであるかを知らせてやる。

あの人は木偶の棒だわ！　私が生命を吹き込んで上げると私の通り元氣になるわ――それにはあの人が木偶の棒だつたのが却つて仕合せなのよ――私の通りな人になるでせう――

……自動車が公園の果ての暗い杜に包まれた小高い丘を、うそぶくやうに唸りながら上つて行つた。そして白い門の前で止つた。

『さあ、着きました』青木は扉の把手を中から廻して、まづ自分で下りて、それから徳惠子をたすけ下した。

小ホテルの玄關の電氣は赤茶けてさびしかつた。青木は寒い入口に徳惠子を待たして、帳場臺の方へ近づいた。何か、二言三言、頭をテカ〳〵に分けて、荒い縞の背廣を着た番頭とさゝやくと、引返して來て――

『まだ城木さんはお見えにならんさうです――少しお待ちなすつて下さいまし』

徳惠子は眉を寄せた。彼女は城木が彼女を待ち兼ねて、居たり立つたりしてゐなかつたことが不滿だつた。

『城木さんは神田の鈴木さんといふ方のところへ立寄つて、それからこのホテルに來ると仰しやつてゐでゝございました――しかし、もうおつゝけお見えになりませう。さあどうぞ』

薄よごれたエプロンをかけた、蒼白い女ボーイが案内のために近づいて來た。

徳惠子は、青木ともゞ〳〵、薄暗い冷たい廊下を奥の方に導かれて行つた。兩側の壁には、まだ震災當時のヒビが殘り、並んでゐる青灰色の扉はところ〳〵ペンキがはげてゐた。ホテル中は、陰慘として人氣にとぼしいやうだつた。

このホテルでは特別室と思はれる、一ばん奥まつた、眞暗な庭が窓から見える一間に通された。名ばかりの控へ間の次に、眞四角な、何の裝飾もない部屋で、大きな茶布ばかりの衝立のかなたには寢臺が置いてあるらしかつた。

『さあ、どうぞ』青木は、女給仕の手を待たずに、黑皮張りの小さい椅子を徳惠子にすゝめた。

煖爐には火も這入つてゐなかつた。

徳惠子は外套の中で身をすくめた。いふに言はれぬ冷たさが全身を走り流れて、何かしら、不吉な不安なものが感じられた。

『まだ六時二十五分でございますから――もうぢきお見えになりませうが――』

ヨレ〳〵の白い上つ張りを着た男が、石炭の熾つたのを十能で持つて來て、煖爐をたきつけた。しかし暖かさはなか〳〵そこから漂つては來なかつた。

青木は紅茶をもたらした女給の手から、碗を徳惠子に取りついだ。

紅茶はとても彼女には口にしかねるやうな生ぬるさだつた。

青木は窓際の椅子まで行つて、遠慮深く腰を下した。そして殆ど徳惠子の方は見ないやうにしてぢつと坐つたまゝ、一二度、ニツケルの腕時計を眺めた。

『もう六時半でございます。あの方ですから、餘程のことがない以上、御遲刻なぞはなさいますまい』

徳惠子は下唇を嚙むやうにしたまゝ黙頭いた。

――煖爐ではブス〳〵といぶりながら石炭が焰と惡臭とを立てはじめた。だが、徳惠子はその惡臭にも、部屋の汚なさにも憎惡の念を抱きはしなかつた。彼女はたゞ、城木を待ちつゞけた――かうしてゐるうちにも、あの人はだん〳〵近づいて來るのだ。私とたつた二人の生活をはじめるために、近づいて來るのだ。私はもうあの人の雇主の娘ではない。浮浪の女だ。對等の――單純な戀し合ふ男女として、今夜はじめて二人は相抱くことが出來るだらう――早くいらつしやい！　今夜、あなたはほんたうの女としての、裸の女としての私を見るでせう！

煖爐はブス〳〵いぶり、窓の外の暗い庭で凧がふき立ちはじめた。

――外はさぞ寒さが增したゞらう。城木さんは寒いでせう……

――二十分か、今少しの時が經つた。默つて、身じろぎもせずつゝしんでゐた青木が、掠れた聲でいひ出した。

『少しおそすぎます。何だか氣になつてまゐりましたが――』

そして、德惠子と目が合ふと、例の伏目になつて、

『あまり遲くなつては、お孃さまのお歸りの時刻も遲れますし、乘ものをいそがせれば直ぐでございますから、私が、ひとつお迎へに行つて見ませうか？』

『私はどんなに遲くなつてもかまはないけど――』と、德惠子は呟いてしかし心が動いた。一刻も早く逢ひたいのはいふまでもなかつた。

『ぢやあ、お氣の毒でも行つて貰ひませうか――』

青木は椅子を立つた。彼は背廣の衣囊をさぐつて、一束の夕刊を取り出した。

『では、御退屈でもこれでも御覽になつてゐて下さいまし――なアに、自動車なら往復二十分位でございます――入違ひに或はいらつしやるかも知れませんが――』

德惠子は夕刊を受け取つた。

青木は丁寧に腰をかゞめて、部屋を出て行つた。

一人になつて、德惠子はあたりを眺めまはした。彼女の居部屋にくらべては、あまりに變りすぎた一間だつた。壁紙はいやしく褪め、天井は低かつた。床には冷たさうなリノリウムが敷いてあるだけで、テーブルにも、棚にも、電氣の笠にも茶白いほこりがかゝつてゐる。それが彼女には却つて快かつた。

彼女はいまごろ麴町の屋敷で自分の不在を發見して、どんなに騷いでゐるだらうかと、はじめて思ひ出して見て、いたづらさうに口を歪めて笑つた。

――ほ、ほ、ほ、お騷ぎなさい。いくらでも――でも、もう德惠はあなた方からは失はれてしまひましたの――生れかはつて、こんな居心のいゝ部屋に坐つてゐますわ。

彼女は外套に包まれたまゝ、微笑しつゞけた。そして手袋をしたまゝの手で、夕刊をひろげて見た。きつと、新聞が、あすの晩あたりは私たちのことを書くかも知れない。私は世にも怖ろしいいたづら娘だといはれるかも知れない。まあ、どうでもいゝ、私はとてもお人形娘では生きられないのだもの――

夕刊から目をそらして、彼女は黑い窓を眺めた。闇は窓の外に一めんに澱んでゐた。ふと、彼女は自分に取つて、これからはじまらうとする生活が、あの無智の闇のやうなものであるやうに思はれた。そして、それが一種冒險的な快感を覺えさせるのだつた。

――何もかもが、すつかり別ものだわ！

彼女は新らしい刺戟を樂しんだ。

青木が去つて二十分ほど經つた。

女ボーイが這入つて來て、電話が掛つて來たことを知らせた。

『私に？』と、德惠子はちよいといぶかしんだ。

『外に女のお客さまはございませんから』

德惠子は、兎も角も、女ボーイにみちびかれて電話室の方へ行つた。

——電話が掛つて來たとすれば、城木からか靑木からに相違ない。その外、彼女が此處にゐることを知つてゐるものはないのだ……

德惠子は手袋をしたまゝの手で、黑い冷たい受話器を耳に當てた。

心がをどつた。

『もし〳〵——どなた？』

『あの、番町のお孃さまでゐらつしやいますか？』と、はつきりした、若い女の聲だ。

『えゝ——で、あなたはどなた？』と、德惠子の眉はかすかにひそむ。

相手は流暢に、何のよどみもなく答へた。

『私、たゞ今、お使の方からおたのまれしたのでございます、城木さんが——とか仰しやいました——鈴木さんをお尋ねになつてゐらしつた方が、急に重大な御用が出來たので、大森の方へいらつしつたのでございますが、今晩、多少暇どれるかも知れませんので——お泊りにならなければならないかも知れ

ませんので、あちらで、大森でお目にかゝりたい。御面會の場所はお使ひの方に申し上げましたが——そんなわけで、城木さんからも御傳言でございましたので、お電話をお掛けしました。くはしいことはお使ひの方が申し上げます。時間を急ぐので、すぐ御出發の用意をなすつて置いて下さるやうに申し上げてくれと、お使ひの方からのお話でしたから、どうぞそのお積りで——はい、私は、鈴木さんの下宿の者でございます——』

——突然、德惠子がきゝかへすひまもなく電話は切れた。

德惠子は受話器を茫然とした氣持で掛けた。城木は何のために大森くんだりまで自分を殘して出かけたのだらう——一目、逢つてからでもよからうに——だが、彼女はそれを責める氣にはなれなかつた。彼も突然惹起した一身上の變動のために、さぞ困迷してゐるのだらう——相談相手を探して歩いてゐるのかも知れない——金の準備もある筈がなし、明日からの生活にさぞ苦しんでゐるであらう——

德惠子は心が寒くなつた。彼女は踵の細い靴で、敷物もない、荒れた木地がむき出しになつてゐる廊下を踏んで部屋に歸つた。

今更、此處を去るに何の準備もない。勘定さへすませて置けばいゝのだ。

彼女は鈴を押して、女給仕にいつた。『急に他處へ行かなければならなくなりましたから、お勘定書を頂戴——』

女給仕は來たばかりで立たうとする客を怪訝な顏で眺めたが、それでも丁寧にお辭儀をして去つた。

——まだ勘定書が來ないうちに、青木が歸つて來た。

『出違ひでございました——城木さんがお出かけになつた後へ入れ違ひにまゐつたわけで、殘念でした』と、彼は、蒼白い頰の顴骨のあたりだけ、夜寒に吹かれたといふやうに、ぽつと血の氣を見せて、早口に復命した。

『何だつて大森なんかへ？』と、德惠子は呟いた。

『鈴木さんの仰しやるには、職業についてある先輩に急に會見をなさる必要が出來たといふことでございます。何でも、その方のことを城木さんもひどくお急ぎの御樣子で、その先輩の方へ電話をお掛けになると、心當りの口があるから、いろ／＼打ち合せしたいから、すぐに來いといふことだつたさうで——御無理のないことでございます』と、青木はこの終りの一句を、同情を以ていつた——城木のためにいひわけしてゐる樣でもあつた。

德惠子は點頭いた。

『それは、無理もないわ』

——女給仕が勘定書をもたらした。

『それは私が——お孃さまがお手づからそんなことをなすつてはいけません』と、青木が手を出した。

德惠子は意味ありげに獨り微笑した。

『いゝえ、こんなことにも馴れないといけないの——これからいろ／＼自分でしたいのよ』

德惠子は支拂つた。

——彼女は青木が待たせて置いた、ガタ／＼自動車に再び乘つた。

『あんたには氣の毒ね。遠い處までお供をさせて——』と、彼女は前に陪乘といふ工合に腰を下した青木にいつた。

『いゝえ、私はどうでも、お孃さまこそこんな晩にお氣の毒でございます』と青木は差し向ひにつゝしんで坐つたまゝ頭を垂れた。

自動車は人通りのうとい冬の夜の街を激しく動搖しながら走りつゞけた。都會の中心を遠ざかるにつれて兩側の灯は光度を減じた。寒さは粗末な幌の間からつきさして來た。

『大森までどの位かゝるの？』と、德惠子は品川のはづれ邊りで尋ねた。黑い海が左手にさびしい灯を映して淀んでゐた——

『もうぢきでございます。もう二十分ばかり』と、青木は、相變らず嗄れた、うや／＼しげな調子で答へた。

『ぢやあ、もうすぐね——』

德惠子は、鸚鵡返しに呟いて、腕時計を鈍い光にすかした。彼女の心の眼には、悲しく、遣瀨なげな城木の姿が、あり／＼と映つたり、消えたりした。彼は自分に會ひさへすれば、しかし、もうその憂鬱を忘れるだらう——就職口などについて、何にも苦勞はなくなるのだ！——彼は自分のこの廣い熱い胸から、新しい生々した生の焰を吸ひとつて、美しい力を感ずるだらう——激しい、目ざめた、曙に立

つだらう——

『城木さんはさぞ惱んでゐらつしやるでございませう、だがお目にかゝればもう——』

——その惱みをお忘れになるだらう——といふやうに、まるでその時の德惠子の胸の底を讀みとつたやうに、青木は白い伏目でチラリと相手を仰ぐやうにしながらいつた。

『きつとあの方もあんたに感謝するわ』と、德惠子は低く答へた。

車はもう鈴ケ森にかゝつてゐた。凩が激しく吹きつのつて、近い夜の海がさわいでゐた。

『山手の林海閣に待ち合せる約束になつてをります』と、青木は說明して、運轉手に把手を右に轉じさせた。乘物は、やゝ明るい通を少し走つて、踏切を越えて緩やかな暗い坂を登り、林間の旅館の前庭に乘り入れられた。

まるで下宿屋にでも見るやうな薄暗い玄關に立つと、ほこりつぽい板の間に膝をついた年增女中は、男女の客を見くらべるやうにして、

『ようこそ——サアどうぞ——』とのみこんだやうにいつて、冷たい細い廊下を幾曲りも連れて行つた。

結局、最後に二人が導かれたのは、どん詰りの離れ家の六疊と四疊半がついた、赤茶けた疊の部屋だつた——十六燭の電氣がボンヤリと光つてゐた。

薄汚れた障子の一重を透して、激しい寒さが部屋中をこほらすやうに流れてゐた。小さい火鉢の埋み火に、女中は炭をつぎ足した。

『お寒うございますね——お風呂は如何で？』

青木は斷つた。德惠子は、床の間に乾皮つてかゝつてをる、つくねいも山水の掛軸や、今戸燒とも見える布袋の置物やらを、物珍しげに眺めてゐた。

『靜かな部屋だね』と、青木がいつた。

『えゝ、もうお離れはすつかり木立でかこまれてをりますから——あんまりお淋しけりやどこかお變へいたしませうか？』と女中は答へた。

『いや、いゝでせう——かへつて淋しい方が』

女中は、見せない微笑で立去つた。

德惠子は、洋服のまゝで坐つて、窮屈さうだつた。

青木は、衣襲から煙草を出り出して、遠慮深くまた藏つた。

『いゝわ——お吸ひなさいな』と、德惠子がいつた。青木は、お辭儀をして紙卷に火をつけた。

女中は、間もなく突き出しの雀燒きなどゝ一緒に、銚子をはこんで來た。

『それはあとで——』と、青木が眉をしかめて制した。

『よくつてよ——寒かつたでせうから、あんたおあがりなさい』と、德惠子は、どこまでも青木の骨折りを感謝してゐるのだつた。この氣位の高い令嬢がこれまでに運轉手にいふのだつた。

青木は流石に食卓の上のものには手をつけなかつた。彼は止め度なく紙卷をふかしつゞけるだけだつた。

『あんた、家の方はいゝかしら？　あんたまで卷きぞひを食つて、お母さまからひどいことでもいはれると氣の毒だわ』と、德惠子は思ひ出したやうにいふ。

青木は事もなげに――

『いゝえ、その方は御心配なく――今晩中、少々私用を足させていたゞけるやうにとお許しを願つてをりますから』

『あんたがゐなかつたら、ほんたうに、私、どんなにたよりがなかつたか知れやしないわ』と德惠子はじみ〴〵いつた――

『そのかはり、あんた方の幸福を私一生懸命いのつてあげてよ――きみはいゝ子だわ』

運轉手は答へずに冷たく微笑して頭を下げた。

德惠子は默つてゐるのがさびしかつた。

『ねえ、青木、あんたは隨分苦勞して育つた人だつてね？　きみもよくいつてたわ。でも、私、くはしいことは何も知らないの、話して頂戴』

『私にはお話いたすやうな閲歴も何もございませんが――』と、青木は興味もなげに答へた。

『でも、苦勞だけは隨分いたしたといつても差支ないかも知れません――城木さんもかなり不幸でゐらしつたやうですが、私はもつと、苦しく、且孤獨でした。私は學校にかよひながら、年若い繼母にさいなまれながら、足腰の立たなくなつた父親を介抱しなければなりませんでしたから――』

『でも、その中でよく神田の大學まで卒業出來たわねえ』

『子供の頃は人生に慾張りでございますから――學校さへやつてしまへば、一人前の男になれると、いつの間にか思ひ込んでしまつてをりましたのですね――詰らないことを信じ込んだものです。學校を出て見て、學問より手先きの器用さなぞの方が、はるかに役に立つて、かうしてお屋敷につとめるやうなことになつたわけでございます』と、青木はまた苦笑した。

德惠子は慰めた――

『だつて、あんたはまだ若いわ。すべての生活はこれから始まるんだわ』

『それはさうでございます。人間に生れて來て、運轉手で終つては仕方がありません』

德惠子は青木の口調から、軒昂たる意氣を聞いたわけではなかつたが、しかし、何となく、鋭い、激しい決心のやうなものを讀み取ることは出來た。そして、この男に城木なぞが持つてゐない、或る深刻な欲望が育まれてゐることを感じるのだつた。

『その意氣組みがあれば、きつと望んでゐる生活が來るわよ』

『どうぞ、さうなりたいものでございます。ほんたうに、もう難儀な世の中は見つくしました。暗いものや冷たいものも知りすぎました――』

『で、最後の希望は何なの？』

『最後の希望でございますつて？』と、青木は、冷やかに答へた——

『さういふ言葉で現すに足りるやうな遠大なものは、私にはもう消えてしまひました。私は、たゞ、機會をつかんで、少しでも自分の欲望に近い世界によぢ上らうとする外には仕方がないのでございます』

『あんたは立派な哲學者だわ』と、德惠子がいつた。

『哲學はすべて苦痛から生れるものだとすれば、私も一個の哲學者でございませう』と、青木は微笑した。

『あんたはたしかに哲學者のやうに話すわよ』と、德惠子は物珍しさうに繰返した。

彼女には興味的な話だつた。青木のやうな冷たさで物語る男をまだ見たことがなかつた。

『それに、勇氣があるわ。機會が來ればつかむ——ほんたうにそれでいゝと私も思ふわ——男らしい生き方だと思ふわ』

青木は讃められても顏色を動かすでもなかつた。

——夜は深まつた。

風は烈しさを增して丘の杜にぶつ突かつて來た。ぐわう〳〵と、黑い寒い渦が、木立と建物とをこめて荒れさわいだ。

『ひどい風だこと——』と、呟いて、德惠子は、そのすさまじさが、今夜の自分の心にふさはしい氣がするのだつた。彼女は外套をまとつたまゝ坐つた膝を緊め合せるやうにした。

『お窮屈でゐらつしやいませう——何かそこに來てゐるやうですから、お召し更へになつたら——』と、青木は部屋の隅の方をかへり見た。そこには見すぼらしい煤竹の亂ればこに、すき切れがしてゐるらしい銘仙縞の褞袍なぞが這入つてゐた。

『とてもお召しになれないやうなものか知れませんが、それでもいくらかお樂かも——』

『いゝわ——大丈夫よ』と、德惠子は答へた。彼女はその薄よごれた着物を別に厭はしいものには思はなかつた。城木が來てさへくれゝばいつでもよろこんで着換へるであらう——

『それにしても、もうお見えになりさうなものだ』

青木はニツケルの腕時計を見た。

すでに九時をすぎた。

『いろ〳〵、あの方も御難儀でせう——あの方は、御苦勞をなすつたといつても、今までお屋敷の中にばかりゐた方ですから——』

彼はさも思ひやり深げにいつた。

德惠子はこの土地の先輩といふ人の前に、キチンと畏まつて坐つてゐるに違ひない城木の姿を思ひ描いた。そして、いぢらしいやうな氣持に打たれると同時に、何となく齒がゆく感じられた。

『私なんぞのやうに手ひどい世界ばかり見てまゐつたものとは違ひますから――』と、青木は附け加へた。

そして彼は、ほんの時をまぎらせるための浮世ばなしのやうに、輕い調子でどんなに艱難の月日をすごして來たかを、印象的な言葉で斷片的に話すのだつた。彼は足腰の立たぬ老父に食べさせるために、神田の書店の店頭で、うまく萬引をしたことも折々あつた。また學校の制服をさへ質入れして、それを肉體勞働から得た金で受け出すまでは通學することもかなはなかつた――

いろ〳〵ないやしい醜い世界の話が出ても、それが德惠子には少しも氣にならなかつた――すべて同情すべき、悲しむべき物語りとしか思はれなかつた。青木はたしかにうまい話し手だつた。

『いつの間にか、そんなわけで私は魂が朽ちてしまつたやうな氣がします。でももう一度世の中に歩き出して見る氣ではゐますが――』と、青木が話をしめくゝつた時、德惠子はまた讃めた――

『いゝえ、魂は却つて苦痛で輝くんだわ。あんたはきつとこれから素晴らしい生活を始めることが出來るわ――私たちは、これからその苦痛の經驗をしようと思ふのよ――。私はこれから自分を鍛へるのよ――』

德惠子は激烈な闘ひの世界に、今一ばんあこがれてゐるのだつた。それゆゑ、一ばん青木の言葉に魅惑を感じ、青木の過去に興味を覺えるのだつた。

『私なんか、あんたに比べれば、これまで生きてゐたか死んでゐたか分らない位だわ。何も自分でしたことがないんですもの。たゞ、何も知らずに育つて來たゞけで、氣高いことや、悲しいことや、烈しいことや、苦しいことは、みんな本で讀んだゝけなんだものね――』と、彼女は、だれの前よりも正直に、この不思議な性格の持主である運轉手には、素直な心で打ちあけたことが言へるのだつた。

『私は運命の大波に身をまかせて、心底から惱みたいの――だつて、生きてゐる以上――それが一ばん正しい生き方に相違ないんだもの――』

『人間はめい〳〵自分の生活に甘んじられない氣持を持つてゐるものでございます』と、青木はまた哲學者らしい物いひをするのだつた。

『ですが、城木さんはどうなさいましたか？　もう大分遲くなりましたが――』

ふと、青木が外の凧に耳を傾けるやうにして呟いた。

『あの人は話が手ッ取りばやく行かない方だから――屹度、つい時間が延び〳〵になつてしまふだらうけど、それにしても私達がこゝに來てゐることは分つてゐるのだから、もう切り上げて來さうなものだにねえ』

德惠子は城木の遲いのを、むしろ青木に對していひわけなげにさへ見えるのだつた。

相手は慰めるやうに――

『しかし、どの道、どんなに遲くなつてもこの旅館にお見えになるには違ひないのですから、御辛抱下

さいまし。たゞ、私として不念だつたのは、その先輩と仰しやるのがどなたゞか、お名前を伺はなかつた事です。お嬢さまにお心當りがございますれば、早速電話をおかけするなり、お迎へに上がるなりするのですが――』

『まあ、待つて見ませうよ――それにしても、あんたが一緒でほんたうに大助かりだわ。私、ひとりだつたら、さぞ心細かつたと思ひます』

――情人同士とは勿論見えず、ちよつと勝手のわからぬ客人たちの容子に見當のつかぬ女中は、火鉢の火の工合を見がてら這入つて來て、遠慮深く聞くのだつた。

『あの、お床は？』

『それがね、今お連れをお待ちしてゐるのだが、おいでがないのでね』と、青木はさりげなく答へて、

『お連れさまがお見えになれば、私はたとひ遲くともおいとまするが、兎に角、次にお二人のだけ敷いて置いてもらひませうか』

『畏まりました』

女中は次の小間へ夜の物を敷きはじめた。その氣勢は德惠子に取つて、青木の手前きまりよいものではないに違ひなかつた。

『あんたも泊つて行くがいゝわ――實家の方さへ、かまはなければ――』と、彼女はいつた。

『はい――それもその時の容子にいたしませう』

そして青木は、なるだけ女あるじに、さびしい思ひをさせまいとする、忠實な僕らしく、しんみりと話し出すのだつた――

『まあ、私なぞが、偶然の行きがかりで、お二人のかうした問題の中に身を置くことになりましたが、遠慮なく申し上げますと、もうかうなつてしまつた上は、何にいたせ御勇氣が肝心でございますよ。今後とも私なぞでも出來ますことなら、どんな事でもいたしますから、御遠慮なく御命令をいたゞきたいものでございます』

『ほんたうに、あんたのやうな經驗者にさういつてもらへるのは、うれしいわ――でも、私どんな苦しみでも、もう覺悟してゐるのよ。あの人が二の足を踏むやうな場合でも、私だけはつまらない躊躇はせずに、自分たちの行くべき道へどし〳〵踏み込んで見るつもりなの――』と、德惠子が答へるのを、青木は點頭いて、

『さう申しては何ですが、それ程の御決心のあなた樣へ、中條の御次男のやうな方と結婚をお強ひなす

つたのは、これは御兩親さまも少しお目ちがひでございました』と、幾分あせるやうにいふ。

『みんなめい〳〵の立場があるのだから仕方がないわ。私は私で行く道を行く外はないのよ』

德惠子は、いつもならば、目下の、かうした差し出口のやうな言葉を、こゝろよく聞く筈はないのだつたが、今の場合、何となくこれ等の話口にさへ、慰めを感じないわけにはゆかないのだつた。

――かうした間にも時は經つて行つた。德惠子には長い〳〵時刻の進みだつたが、いつか、腕時計はもう十一時にさへ近づいてゐるのだつた。さすがに彼女も、

『どうしたんだらう――氣の長いにも程があるわ』と、呟かずにはゐられないのだつた。

『あんまりお待ち遠のやうなら、神田の鈴木さんへお電話を掛けて、城木さんのいらしつた先をはつきりお聞きいたしませうか？　さうすれば私がお迎へして來ることが出來ます』と、思ひついたやうに青木はいつた。

『さうね。それもいゝかも知れないわね』と、德惠子は、こゝまで來てしまへば、この親切な同伴者まかせにする外はないといふやうに肯いた。

しかし、一度立つて行つた青木は、すぐにさもがつかりしたやうに引返して來た。

『どうして？』と、目と唇で令孃はたづねる。

『東京線がみんな故障になつて、二時間ばかり不通だと申します――困りましたね』

『いゝわ――仕方がないわ。いつまでも、私、大人しく待ちませう。あすの朝までゝも――』

德惠子は投げ出したやうに笑つて見せた。

『何だか、私が間に立つてあんまり氣が利かないやうで、申しわけありません』

運轉手は面目なげにいつて、ちらりとまた上目を投げて、

『しかし必ずいらつしやることは間違ひがないのですから――何なら、いろ〳〵お疲れでせうから、少しあのお部屋で横におなり遊ばしたら――私がお次に坐つてをりますから御心配はありません』

『私は構はないことよ――。あんたこそ、一日働いたあとなのだから、先に寢てもちつとも構やしないことよ』

『どういたしまして――勿體ない』

――だが、德惠子はさすがに今日一日の激しい心の緊張がもたらした神經の疲勞に、だん〳〵押されて來た。後頭部にかたいものが詰つて、肩が双方ともしめつけられて來た。胸に冷たい、痛いたまがつかへ、兩腕が釣つて來るやうな氣さへした。

彼女は言葉少くなり、ガク〳〵身うちが戰慄した。

そして髪がたれかゝつた頰の色は、屹度さぞ眞蒼に見えて來たことであらう――

『御氣分がお惡うはございませんか？』と、運轉手は、心配さうに、白い目でみつめた。

『ほんたうに少し横におなり遊がすがようございます――なんなら、宿の女中を呼んで、お附き添ひい

たさせませうかしら』

『いゝわよ〳〵』と、德惠子は、懶さゝうに頭を振つた。

『あんな人達と顏を見合せるのは厭だわ』

『でも、無理をなすつてはいけません、ぢやあ、かういたしませう——私はあちらの帳場の方で、番頭どもと話でもしながら、城木さんのおいでをお待ちすることにいたしますから、少しお横におなり遊ばす方がよろしうございます——大事なお身體ですもの——今後は一層大事なお身體ですもの——』

靑木の聲はやさしく、しみ〴〵としてゐた。

『ぢやあ、少し横になりませうかしら——あんた、こゝにゐたつていゝことよ。そんなことは構はないことよ』と、德惠子は一度、張りつめた心がゆるんだあとの、ぐつたりした調子でいつた。

『いや——しかし——私もその方が勝手でございますから——おさびしくさへなければ、ちよつとあちらで夜食を戴いてまゐります』

『ほんに、それもさうね。ぢやあ、横になつて待つことにするわ』

『御用があれば鈴をお押し下さいまし、あんまりお氣先が聞きませんやうなら、お藥か醫者をなにいたしますから——』

靑木は丁寧にお辭儀をして、細長い廊下を去つた。

德惠子はぐつたりとして、しばし食卓にもたれてゐた。靑木の慰めの言葉に暗示されたやうに、ぐん

ぐん押し寄せて來た疲勞は、頭をも身體をもしびれさせ、暗まさせた。城木のことを思ひ詰める氣力すら弱まつて來るのだつた。

——ほんたうに、少し横になつて休まう。

彼女は立ち上つて、フツクやボタンをはづした。綠色の外出着は、光の蛻のやうに足許に崩れ落ちた。

彼女は懶い手で、重たい寢卷を肌着の上に羽織つて、次の間の寢床の方へ行つた。

メリンス友禪の夜具の中には、女中の心づかひで湯たんぽこそ入れてあつたが、冷たくかたい蒲團は、德惠子にはまるで板のやうに感じられた。彼女はその中に縮こまつて、急に襲つて來た頭痛と惡寒とにいつまでも物を思ふ力もなくガク〳〵とわなゝき續けてゐた。

その頃、靑木は帳場わきの、疊へおかに椅子テーブルを置いて、喫煙室とも應接室ともつかぬ一間に來てゐた。彼は女中にウヰスキイと白湯のコツプとをいひつけた。

——舞臺監督と役者を一人で兼ねるのは骨が折れるさ。だが、古いせりふだが、細工はりう〳〵——

彼は鈍い電氣をみつめながら、さう獨言て、冷たい微笑で蒼白い片頰をくぼませた。

女中は命じられたものをテーブルに置くと、いひ憎さうに——

『あのお連さまはいらつしやいませんでせうか？　今晩はこんな風でございますから、もう外にお客さまもございますまいから、若しお連さまがお見えあそばさないやうなら、戸を閉させて戴きたいと申し

ますが――』

『いゝよ、しめ給へ』と、青木は白湯の中にウイスキイを空けて、事もなく答へた。

『この風ぢやあ來ないかも知れん』と、いつたが、背廣のかくしをさぐつて、小さな藥瓶を取り出すと、

『連れの女がね、頭痛がするなんて寢てしまつたから、まだ床の中で目をさましてゐるやうなら、この瓶に殘つてゐるだけ――ソラ、五粒殘つてゐるね――これだけ水でぐつと飲むやうにといつてくれ給へ。少しは身體も暖まらうから――』

藥瓶は女中の手に渡された。彼女は去つた――

――飲んでぐつすりおやすみ、可愛らしいお孃さん――飲みやあ、いゝんだ――いゝ夢が見られるんだ。ふ、ふ、ふ。――

青木は囁いた。そして湯に割つたウヰスキイを、さもうまさうにちびり〳〵傾けはじめた。

凩は、ぐわう〳〵と、丘の家をゆさぶつてわめいた。青木がみつめてゐる電氣は、かすかに不氣味にゆれてゐた。

彼はいくらか目の下を赤くした。氣輕な調子でまた獨言た。

――薔薇はとげツぽい程美しい。網の中の魚はピン〳〵はねる方が面白い。だゝつ子孃さん――その時にはいくらあばれてもいゝよ。

だが、彼はふと、耳を澄ました。凩の騷々しさの底で、何物か堅い音がきこえるか聞えぬかにひゞい

て、人の呟きがまじつて來る。青木は微笑した。

――自家の奴等、ひまなものだから勝負事をしてゐやがる――

彼は立ち上つた。そして足音も立てず家人の住居になつてゐるらしい奥の小間の方へ行つた。そして默つて襖を引き開けた。

中には煌々と明るい光が漲つて、宿の女將らしい三十女を中心に、近所の若者らしいのや、番頭やらが、四五人カルタをいぢつてゐた。

『ふん、驚かんでもいゝよ』と、びつくり振り返つた一同を見下し青木は笑つた。

『いやに早寢をしたがると思つたら始めてゐますね。私も寢られさうもないんだ――ひとつ仲間に入れて貰はうか――』

『さあ、どうぞ』と、女將はほつとすると同時に愛想笑ひをして、背後の座蒲團を引寄せて、自分の側に客人を招じたが、

『でも、お連れさまがゐらつしやるのに――』

『あれかい？　あれは預りものなんだ。は、は、靜かに眠らせてやればいゝのさ』

安心の客らしいと見たので、誰も青木の仲間入りを憚らなかつた――一たい、勝負事の場所ほど、人人の氣持を無差別にするものはない――王も乞食も、そこでは勝つか負けるかだけなのだ――

青木は花札をいぢらせても巧者だつた。彼は勝ちも負けもせず遊びつゞけた。彼だけは今夜は勝負は

どうでもいゝのだつた。ある時が來るまで、退屈せずに濟めばいゝのだつた。

勝を貪ぼらない彼はたちまち人氣者になつた――三時間ばかりが樂しくすぎて、もう二時に近かつた。

青木は欠伸をした。

『やつと眠くなつた。おやあ僕は中座しますよ。少し勝目だが、番頭君、取り前は君に進上しよう』

彼は思ひがけない利得を得た番頭の空世辭をきゝ流してその部屋を出た。

青木は部屋に戻ると、次の間の氣勢に耳をかたむけたが、德惠子は寢息も立てずぐつすりと熟睡してゐるらしく靜まり返つてゐるので、にたりと唇だけで微笑して、今まで窮屈に咽喉を締めつけてゐたネクタイやカラをはづして、背廣を脱ぎ、褞袍になつて、思ふさま伸をした。そして音を立てぬやうに襖を開けて、寢間に這入つた。

德惠子はメリンス友禪の搔卷を、顎までかけて、右まくらに、壁の方を向いて昏々と眠つてゐる――頬はさはつたら冷たさうに白ざめ、耳たぼだけが眞赤に火照つてゐた。

その寢姿を、青木はふところ手をしたまゝ枕元に突つ立つて、わが物顔に賞翫してゐた。

彼は心にさゝやいたに相違ないのである――

『あなたは何の夢を見てゐるんですな？　城木君と二人の快樂的な世界をかね？　まあ、目を開けて見給へ、現實にはもつと深刻な生活があなたの目ざめを待つてゐるんですよ――は、は』

が、彼は彼女の熟睡を喚び起さうともしなかつた。自分は、並べて敷かれた寢床にもぐり込んで樂々

と手足を伸ばした。彼はもう彼女の方を見向きすらせなんだ。仰向けに目を瞑つて、身じろぎもしないのだつた。

――夜が深み切つて、そしてその闇の果てから凍つた曉が目ざめはじめた。寒氣は極點に達して寢室の空氣はシインと底冷えた。その寒さに、德惠子は眠りの底からよみがへりかけた樣に見えた。

彼女は目を開く前に、眉のあたりをしかめた。兩手を冷たさうに夜着から出して、顏をなで、さて、ものうく瞼をあけた。

最初は何が何か分らないらしかつた。つい鼻のさきにはなまこ色の壁が見え、鈍い光に照らされた赤茶けた疊があつた。それから低い、雨じみのある天井にまだはつきりせぬ視線が移る――彼女はくるりと寢返つて、そしてたうとう自分と床を並べてゐる男があるのを見出した。

初めて、彼女は思ひ出した。では、そこに寢てゐるのは城木に相違ない……

はつと、搔卷をはねて、起き上つて、銘仙の寢卷の膝をかき合せながら、生れて感じたことのないやうな羞らひで――勝氣でわがまゝな彼女がこれまで知らなかつたやさしさで、彼女はおづ〳〵と男の方をのぞき込んだ。

そして、その瞬間――憤るよりも、むしろ呆然とした。

初めて彼女はそこにゐるのが青木なのを知つた――運轉手の青木なのを知つた。

――何といふことだらう――何といふ無禮なことをする男だらう――身の程を知らぬ男だらう――

昨日以來、この男にどんなにか世話になつてゐたことを思ひ出すゆとりもなく、彼女は腹立たしさに唇をかんだ。彼女は自尊心を打ち碎かれて、相手を睨めつゞけた。

と、突然、青木がポカリと目をあけて、德惠子を見返して、あわてた容子もなく、これも床の上に起き直つた。

彼は眠つてはゐなかつたに相違なかつた。冴えた目で、微笑さへ漏らしていひかけた。

『どうでした？　藥はよく利いたでせう。大分お苦しさうだつたが、熟眠がお出來になつて結構です』

德惠子はすぐにはいへなかつた。相手が自分と床を並べて寢たことに、何の濟まなさも感じないらしいのを見ると、淺猿しさに口も利けなかつた。そしてはじめて、こんな人間に祕密を明かしたり、助力を乞うたりしたことの愚さに氣がついた。

『城木さんはとう〳〵來ませんでしたね。そのかはり、私が、かうして宿直をして差し上げました』と青木は微笑しつゞけて、ぢつと彼女を見たが、

『はあ、あなたはお氣に觸へられたらしいですね――こゝにゐるのが、城木さんでなく私だつたのでお憤りになつてゐらつしやるのですね？』

その語韻には、德惠子の心を突き刺すやうなあざけりさへ含められてゐた。彼女は睨め返したまゝ、唇をふるはせた。

『お怒りになるのも御尤もです――だが、もう遲いですよ――』

奸惡な狼は遂に本性を露はした。青木は冷笑するやうに唇を曲げて、細めた目角から彼女を眺めた。

德惠子は、ぢつと青木を見据ゑた瞳に、どす紅い怒りの炎を燃やした。

土氣色になつた唇で、彼女は途切れ〳〵に呟いた。

『ぢやあ、お前は――ぢやあ、お前は――』

青木はなだめるやうに、かすかに笑ひつゞけてゐた。

『まあ、激昂ならずに下さい――私は何も無禮なことはしてはゐません。あなたの指先へも、お許しがないから觸れはしません。安心して下さい。ね、でないと、また御氣分が惡くなります――その通り、紙のやうな顏色をなすつてゐる――』

德惠子は、ついと立ち上つて次の間に出ようとしたらしかつたが、青木は押へた。

『いけません――それこそ恥辱ですよ――ね。お孃さん――德惠子さん、もう僕の前でじたばた爭はうとなさるのは愚だ。今もいふ通り、もう遲いのです。あなたは僕といふ一個の青年と郊外の宿屋で――密會旅館として知られてゐるこの家で、寢室を共にしてしまはれたのだ――あなたは何の關係もないといひ張るだらうが、世間はそれを承知しません。あなたの戀人の城木君だつて承知はせん――それよりももつと穩便に解決なさるがお悧巧だ――』

青木はもう徒らな空尊敬で相手を呼びかけはしなかつた。私なぞといふ謙辭で自分を現はす必要も認めなかつた。假面を取つたものゝ氣安さが、彼の表情を、むしろ生々しく若々しいものにさへして見せた。

徳惠子は、今は怒りさへ通り越して、この場合にはふさはしくない好奇的な眼付で相手を眺めた。

『まあ、それなら最初つから私をお瞞しだつたのだね？　城木さんに逢つて頼まれたといつたのも、みんな嘘だつたのね？』と、彼女は呟いた。

『勿論、計略だつたのです――實はあなたが中條家に出かける間際に、玄關先へ押し揉んでお捨てになつた、あの人に宛てた手紙を拾つたので、急場に古風な狂言を書いて見たのですが、大てい大丈夫とは信じてゐたものゝ、こゝまで易々運ばうとも思つてはゐませんでした。それといふのも、あなたがあんまり世間知らずだつたからです――そりや知識もおあんなさるだらう、思慮もおあんなさるだらうが、肝腎の經驗――浮世の智惠といふものが、あなたには足りないんだ。たとへば、いかに城木さんが戀人だからつて、呼び出しをかけるのには、證據の手紙も書かないはずはないぢやないですか？　それから、いざ、うちを出てから、あれだけ散々引きまはされてゐるうちには、世なれたものなら何かかうハツと思ひ當るに違ひないんだ。もつとも、その世なれないあなたゞからこそ、僕が見込んだわけなのだが――』と、青木はふところ手になつて、雄辯に語るのだつた。

徳惠子は奥歯をかんだ。

『まあ、何て惡黨なんだらう！』

『何とでもおいひなさい。その惡黨と一晩一緒に暮したのも、例のそれ運命といふ奴なんだ――ねえ、さつきあなたは、今後は運命の大波に乗つて見たいといつてゐたが、もうその大波がやつて來たのですよ』

青木はあざけるやうにいつて、片手をふところから出して、紙卷の函を引き寄せると、枕元の煙草盆の火をさがして、落着き拂つて煙を吐きはじめた。そして、徳惠子のほつれ毛が亂れた眞蒼な頰のあたりを見やりながら、

『かういふと、さも一時の思ひつきで誘拐したやうにも思ふだらうが、これで中々計畫は長かつたのです――僕はあなたに焦れてゐた――嘘でもいつはりでもなく焦れてゐた。あんまり地位が違ふからと諦めようかとしてゐると、あなたは僕が運轉する自動車の中であの人といちやつついて見せたぢやないか？　なんの、城木なんぞに落ちる女なら、機會さへあればおれだつて――と、さう思ひ返したわけです。ねえ、知識だつて才能だつて、

僕が城木に自分を比べたつて、あなたも別に倫を失するとは思はんでせう？』

徳惠子は血走つた目を大きくあけて、ぼんやりと相手をみつめ續けてゐた。彼女は今は青木の不敵な放言に默つてきゝ入つてゐるのだつた。

――何といふ惡者だらう？　私はこんな男を初めて見た。

と、心に呟いて、そして彼女は感嘆に似た驚愕に自失する外はなかつた。

青木は別にせゝら笑ふといふやうな調子もなく、ごく家常茶飯のよそ事でも口にする時のやうな目で、眞直に徳惠子をみつめながらいつた。

『お驚きになりましたか？　しかし人間の世の中には案外なことが全く多いのです。あなたは深窓の貴女であるあなたを、運轉手の青二才が、下人部屋からねらつてゐたのをびつくりなさらうが、われ〳〵萬人に、めい〳〵いかなる事を望んでも、望むだけはいゝと神が許してゐる以上、下僕が姫ぎみを手に入れたいと願つたところで少しも不自然ではありますまい――金持は小僧どもを――堂島や蠣殼町、兜町で、手を振つたりわめいたりしてゐる十六七の小僧どもを、ちつとも問題にはしてゐないかも知れない。しかしかの小僧どもの中には、現在の日本の金持なんぞを齒牙にもかけず、もつと〳〵大きな金持にならうと望んでゐる奴があるかも知れぬ。また多くの現在の金持も、過去においては、かの小僧の一人であつたものもありませう。政界でも、學界でも、新聞を配りながら大臣教授を望むものを冷笑する

ことは出來ない。しかも彼等は順調な人達より、百倍も深刻な氣性を持つてゐるのですからね。全く、そこに人對同士のこはさも、面白さもある。少くとも、あなたにあんなに夢中になつてゐる中條子爵の次男なんぞに――貞雄さんといひましたか、あんな人間なんぞに、僕程の大膽と、機智とがある筈がない。大きな、度外れの望みを抱くものだけが持つ、勇氣、執念、冒險心――さうしたものを、たつた今、僕の場合、あなたは十分に御覽なさることが出來たでせう。あなたにも、ちつとは面白い見ものだらうとは思ひますがね？　それとも興味がないと仰しやいますか？』

徳惠子はぼんやりと耳を傾け、相手を眺めてゐるうちに、不思議なことだが、だん〳〵と心を牽かれて來るやうな氣がした。彼女の生れついた並外れの自己主義や、勝氣や、奇癖は、男の一言一句にいつとなくかき立てられ、煽り立てられるのだつた。

――まあ、何といふ憎々しい口の利き方をする男だらう！　だが私は生れてはじめてこんな奇怪な青年を見たわ！　この世に何の怖れも、何の恥もないやうに、どうしてこんなに自由に立ち振舞ふことが出來るのだらう。兎に角、はじめてこんな男を見たわ！　しかし、彼女は好奇心が昂まつて來るのを隱して、土氣色の唇を曲げるやうにして呟いた。

『興味が持てるとか、持てないとか、そんな場合ぢやありはしない――私はこゝが出たいのよ――すぐに立ち去りたいのよ。それを止める權利はあんたにはないわ』

そして、附け加へた。

『何といふ無禮な人でせう！』

『全く僕には何の權利もないし、またやり口が無禮だとも知つてゐます』と、青木は恬然として答へた。

『だが、あなたはもう、その無權利な、無禮な男の張つた網に、すつかり引掛かつてしまつた――失禮なたとへだが、小鳥です。お騷ぎになればなる程、狀態が悪くなる。さつきもいつたやうに、たつた一晩でも僕とこの家で、この密會屋でお泊りになつた以上は、世間では、僕とあなたは關係があると折紙をつける。あなたは僕の情人、僕はあなたの情人なのだ。世間といふものは常識の世界ですからね。そして常識とは殘酷なものなんだ。一度常規にはづれたことをした以上、どこまでも常識世界と戰つて行く外はないが、その常識世界はあなたの抗辯なぞに耳を傾ける慈悲は持ち合せませんよ。こゝをお一人で飛び出して、私は青木なんぞと何の關係もなかつたとあなたがさけんだら、氣違ひといふ汚名を受けるだけなんだ。それに、より不便なことには、この僕はあなたの宣告に反對しますからね。僕は、いや德惠子さんはヒステリーを起こしてゐるのです。――勿論あの人と僕とは半年も前から關係がありましたと、その場合には發言する外はありません。新聞雜誌は面白い事件として書き立てるでせう。そしてそれにあなたの戀人の城木さんだつて事實として信じるに相違ないのです』

德惠子はぼう〳〵と頬にかゝるほつれ毛を搔き上げようともせず、膝のあたりに目をやつて、身を固

くしてゐた。なる程、この蒼白い男がいふやうに、運命の波があまりに烈しい勢ひで自分を押し流しはじめたのが感ぜられた。ぐん〳〵と黑く冷たい渦の底に引き入れられたり、ぐうつと押し上げられたりかと思ふと、一瀉千里の勢ひで果しも知らない外洋にさらはれて行つたりするやうな氣がされた。家庭のことなぞはおろか、戀しい城木さへもが、もうひどく遠い〳〵背後になつてしまつたかのやうに思はれて來た。目も心もすつかり暗くなつて、肩さきや膝がしらが凍るやうに寒かつた。

――何て不思議な人間だらう――この男の前に坐つてゐると、身體中が痛いやうだわ！　と、彼女は心にいつたが、まけぬ氣ではね飛ばさうとした。

『あんたがどんなに中傷しても、文句をつけても駄目よ――城木さんは私をすつかり信じてゐるんだから――』

『あの人にはあんたを信じ切ることも疑ひ切ることも出來ませんよ』と、青木は手輕く敎へた――

『あの人はあらゆる點で半信半疑な人間なのです、彼自身をさへ信じることが出來ない――たゞ人の好い、見場のいゝ、敎育のある青年にすぎやしません。ですから、あなたの色戀の手習ひ双紙には、全くもつて適當してゐたのだが、激しい冒險の仲間には不向きですよ。あの人はさぞあなたの氣持が重荷だつたでせう。さぞあなたの熱情が重荷だつたでせう。あなたさへ誘惑しなければ、あの人はお屋敷の重だつた使用人として、一生安樂に送れた筈なのですからね』

――城木はそんなつまらない人間だつたのだらうか？　善にも悪にも行き切れない『人のいゝ、見場

のいゝ』男にすぎなかつたのだらうか？

德惠子は屈辱を感じて反證を擧げようとしたが、駄目だつた――全く、青木の城木觀は適中してゐるやうに思はれた。

『あなたは馬鹿な親達が、つまらない低能兒に大きな希望をかけるやうに、あの人が最初の戀人だつたのでやたらに箔をつけて考へてゐるのです――無理もありません。何といつても、まだ人生に經驗の淺いあなただから――』

德惠子は子供あつかひにされて、憎らしく、腹立たしかつた。だが、彼の言葉はすでにほんたうだとしか思はれなかつた。强くいひ返すことが出來なかつた。

――私はどうなることだらう？　と、考へて初めて娘らしい氣弱さが胸を引きしめた。

その氣持を見て取つたやうに、青木は續けた――

『しかし、あなたの冒險心には、僕は實に傾倒しますよ。僕だつて男です。あなたが富豪の令孃だから、强ひて誘拐して金まうけをしようとか、ゆすらうとか、そんな淺猿しいことは考へてゐません。たゞ、僕は、僕なら多少あなたの空想と夢を充して行くためのお仲間になれるかと思ふのです』

德惠子は青木を充血した大きな目で見上げた。

青木は微笑した。

『僕を、なんの運轉手風情がといふやうな目でごらんになりますね。は、は、は、は。さういふ偏見がず

ゐぶん詰らないものだといふことを、そのうちすつかり理解なさるでせう』

『ぢやあ、私はどうすればいゝといふの』と、突然、激しい自棄心に襲はれて、德惠子は奥齒をかみしめるやうにいつた。

『僕について來て下さればいゝのです。今夜なすつたやうに、素直について來ればいゝのです』と、青木は事もなげに答へた。

何といふをかしな、笑ふべき提議だらうと彼女は思つた。そしてヒステリカルな笑ひが咽喉を痙攣させた。

『面白いわ』と、彼女は下瞼を押上げるやうにして奇怪な微笑を笑つた。

『行けるなら行つてもいゝけど、その代り、私はあんたのどこまでも主人よ。失禮な要求なんか一生應じやしないことよ』

『いかにも、いつまでも僕はあなたの下男で甘んじませう。僕はたゞあなたの側にゐたいのです』

――粗末な立てつけの雨戸の隙からうす白い冷たい光がさしてゐた。その薄い光が却て彼女の心に昏濛をもたらした。彼女は額に手をあてたが、そのまゝ硬い床の上に突伏してしまつた。

青木は親切に夜着をかけてやるのだつた。

放浪

——あの慘憺たる吹雪の夜更け小カフエで飲み馴れぬ强烈な酒の醉ひに前後を失つた城木は、居合せた見も知らぬ中年男の親切で、その男の安下宿の一間に伴はれてから、まる一日ひと晩、生れ落ちてはじめての宿醉に、殆ど枕も上らぬほどの苦しみをなめた。

目の下の肉のたるんだ、大分もう額の拔け上つた中年男は、全く不思議な程人情深かつた。彼は半病人のやうになつてしまつてゐる城木のために、根こそぎ彼の安息所を提供してしまつた——翌朝、身體中は骨もひしげさうな痛みを感じながら、寢床の中で目をさました城木が、ぼんやりと見まはして、おぼろげな記憶を喚び起して、ハツと飛び起きようとした時、頭から毛布をかぶつて、小さい瀨戸の火鉢を抱へ込むやうにしながら一閑張の机に向つてゐたその男は、徹夜をしたあとのはれぼつたい目で、やさしく眺めて押へるのだつた——

『まあ、もつと寢てゐたまへ。僕あ、眠くも寒くもないんだよ。こんな事はなれてゐるんだ——起きちやあいかんよ。まだ八時だ。もつと、ゆつくり寢ないと氣分が恢復しない。その夜具ぢやあ寒いだらうが我慢したまへ。僕のありたけの着物がそれでもかゝつてゐるのだ。は、は、は』

城木を寒さから防いでゐる臥床は、全く珍妙なものだつた。敷いてゐるのはたつた一枚の木綿更紗の煎餅蒲團で、それに同じ搔卷——その上には主客二人の外套やら、縞目もわからぬ古褞袍やら、かび臭い袷羽織やら、行李の底からでも引き出したらしい褪め切つた浴衣までが、やたらに掛けてあつた。

城木は、親切者から制されずとも、その時、起き上ることは出來なかつたに相違ない。彼はちよいと

頭を上げただけで、後頭部に激しい痛みを感じ、ムカ〳〵と胸が衝きあげて來た、あたりが、ブル〳〵と廻り出すやうな氣がした——で、彼はまた目を閉ぢて、搔卷を頭から被つてしまつたのだつた。

——その翌日の午後、城木は昏々たるねむりから醒めて、初めて床の上に起き直ることが出來た。彼はその間、殆どそばを離れずに看護つてゐてくれた部屋のあるじの前で、丁寧に頭を下げた。

『——全く醜態です。とんだ御心配をかけてしまつて——何とお禮を申してよいか——』

『よし給へ。君をこの部屋につれて來たのは僕の醉興なんだ。餘計なことをすると、あべこべにとがめられても仕方がないんだよ。こんな薄汚ないところでも、雪の中や留置場よかましだらうと思つてね。は、は、は。僕自身は雪の中に飲み倒れてゐたこともあれば、留置場で翌日の夕方目をさましたこともあるが、いやはや、あんまり感心したものぢやあないよ』

中年男は綿が薄黑くハミ出した薄いメリンスの座蒲團の上にあぐらを搔いて、その時も一閑張の机に向つてゐた。一閑張の上にはインキびん、ペン、原稿紙、卷煙草の袋なぞが散らばつてゐたが、その外に正宗の四合瓶や、猪口もあつた。四合瓶はもう半分ばかり減つてゐた。

『どうだね、ひとつ——』

部屋のあるじはその猪口を城木に突き出した。

城木は酒のにほひを思ひ出すのもいやだつたが、よんどころなしに受けるだけ受けて、膝の上でもちあつかつてゐた。

『二日醉ひ、三日醉ひのあとでは最初はにほひをかいでも突き返して來るやうな氣がするもんだ。それを突破したまへ。あとは馬鹿にいゝ氣持になる。何だつて同じことさ。この人生の苦痛だつてね』

男はたつた一つの猪口を城木にやつてしまつたので、自分は茶呑み茶碗でやりはじめた。

『酒なんか誰だつて最初つからうまいものぢやあないのさ。でも人間にはいつかこれが必要になるからをかしいね。ほんものゝ人間にはきつと必要になるんだ——人の皮を着た黄金、虚榮、法律、道德なぞの化物はとりのけて、ほんものゝ人間は一度はきつとこいつが戀しくなるものなんだからね。だが、君の一昨日の晩はすこし手ひどいよ。ウヰスキイの止め度のないがぶ飲みなんか感心せん。あは、あは』

城木はあるじの言葉に耳を傾けながら、この得體の知れぬ人物をいぶかしんだ。障子の裂け目から風が這入つて來る乏しげな六疊の部屋には書棚ひとつ置いてはなかつたが、どうやら一種の知識人には相違ないのだつた——彼は白いまゝで机の上にひろげてある原稿紙などを眺めた。

あるじは城木の視線を追つて、そして毒のない微笑をもらした。

『ふん、君は僕をどの種の人間だらうと怪しんでゐるらしいね。なアに、つまらん飲んだくれに過ぎないんだよ。飲んだくれの獨り者に——』

中年男はもう一ぱい茶碗酒をきゆつとひと口あふりつけて、どこか子供つぽい目で城木をみつめた——

『かうして机の上に原稿紙とペンなぞ置いてあると、あつぱれ大學者か大文士だと思ふか知らんが、そ

んな大したものではないんだから安心し給へ。僕あ戸田つて浪人だ。今では何の職業もなくなつて、酒だけ飲んで日を送つてゐるやうなヤクザ者なんだ。安心したまへ』

城木は思ひ當つたといふやうな眼付をした。

彼は杯を置いた手を膝にキチンと揃へて、

『戸田さんと仰しやると、もしや戸田次郎さんではございませんか？』

戸田次郎といへば、かつて少年期から青年時代にかけて、一代の才華をうたはれた詩人だつたが、恐らく生來の變異な性質から、だん／＼世の中からかけ離れてしまつて、今は殆ど表に立つて仕事をしてはゐなかつたが、かの虚無思想と、それとは反對な積極的な改革情熱とがゝいゝやんぼんに入りまじつた譏刺諷世に充ちた文章は、ある一部で現在でも珍重されてゐるのだつた。

中年男はのびやかに苦笑した。

『は、は、まあそんなものかも知れんが——まあ、そんなことはどうでもいゝや。たゞ、君は僕の前で

は萬事安心してゐてもいゝんだよ。いはゆる世間といふものが、僕の世界にはないんだから――ところで、もうひとつ飲り給へ。君程の若さで、元氣を失くしてしまつちや駄目だ』

電氣が――十燭の薄暗い電氣ではあつたが、薄暗い部屋に突然點いたので、ひどくパツと明るく感じられた。

『これからが酒の時刻さ。酒はやつぱし夕方の灯が見えてからがいゝやうだ』と、戸田は續けた。

『こいつ、こんな水つぽい液體にすぎないが、妙な奴で、人間の苦しさや衰へを一時でもちよいと乘り越さしてくれる。君なんかもこいつともう少しおなじみになるといゝんだがなあ』

城木はすゝめられて、吐劑を飲むやうな氣持で杯を重ねた。彼はもうこの部屋を、禮をいつて辭して出るのが當然だと思つた。相手が世離れた人なので、醜態を見せたことを屈辱に感じる必要はない氣がしたが、それにしても、男性が男性の前で、はじめてあつた同性の前で、弱點を露出した場合は、一種の氣まづさに心をおさへられずにはゐない――

――だが、辭して出るといつても、どこをさして歸るべきだらう。何時いかなる時でも相談相手になつてくれる筈の友達を、今までは持つてゐた。しかし、今はその友達と顏を合せる氣力もなかつた――一切の過去の關係者の前に姿をあらはすことはたまらない氣がした。

『君はなぜ考へ込んでゐるんだね？』と、戸田はいつた。

城木は項垂れた。

『君、まあ、何も考へないことにし給へ。昨日一日、君は大變熱にうかされてゐたんだ。そして、そんな場合のうは言を持ち出すのも變だが、ある事情が君をちよいと不快な狀態にかり入れてゐるらしいとは想像した。で、若し、二三日熟考した方が便利なら、こんなきたない部屋で濟まないが、このまゝこゝで靜養した方がよくはないかね？　なあに、何の遠慮もありはせん――僕はこのごろ一種の緣を信じるのだよ。十年の交友も場合によつては一夜の交はりに若かないんだ。友情の押し賣りは滑稽だが、最初あのカフエで君の醉態を見てから、何となく僕は君が好きになつた――勿論、君の方で僕が嫌ひならよんどころないがね。また、嫌つたつて驚きはせん。大抵の人間は僕が嫌ひなんだから――は、は、は』

戸田は、もう底になりかゝつた四合壜の酒を、たらり〳〵と茶碗に注いで、チビ〳〵とやりながら何の感情もまじへぬ、寧ろ明るすぎる調子で話すのだつた。

城木は、不思議に感情に唆られて、何だか熱いものが目がしらに湧いて來るやうな氣がした。彼はかうした人の前でこそ、一切を打明けて告白すべきだと思つた。

戸田はつゞけた――

『いろ〳〵事情もあるらしい。いつか話も聽きたいが――苦しい時は、喋ると樂になるからね――だが今日は止さう。今日はこれから君の全快祝ひに、ついそこらで飲まうぢやないか。かしはの甘い家があるんだ。君はかしはを食ふがいゝさ、僕は飲むよ』

いつ明けるかわからない心の闇に彷徨する城木に取つて、この不思議な中年男ほどふさはしい手引きはないやうに思はれた。彼は差し向ひになつて盃を含む場合でも、立ち入つて相手の傷手に觸れようなぞとはしなかつた。たゞ、この人生といふものが、何人に取つても決して都合のいゝ、すみよい世界ではないこと、そこには信じて期待すべきものはひとつもないこと、例の奇妙な論理で説明しようと試みるだけだつた。

『人生なんて化物を相手に、本氣で組みうちする馬鹿者が今時あるかい？　形態もなければ良心もない、海鼠の幽靈のやうな奴を、どんな學者や聖人が、かつてどんなに濟度し得たかい？　耶蘇だつて、釋迦だつて、結局は、そんな化物を相手にするひまで、死を樂しむ準備をしろと敎へただけぢやあないかー—そして、そんな敎へが、現世に生きるわれ〳〵のために何の役に立つたんだ。知識や宗敎がわれ〳〵を救ひ得るものとしたら、もうこの世に不幸や悲哀は種切れになつてゐる筈なんだ。ところがその反對に萬人に取つて人生は益々複雜な妖怪味を感じさせられるやうになつて來てゐる——僕なんか、もう眞面目に化物との組み打ちは眞平だね。端的に化物にけつを向けて、相手にせずにゐるのが一ばんだよ。君なんか正直すぎるんだ——といふよりはむしろ馬鹿なんだ。まだ人生といふものゝ正體を直感で見きはめる力も出來てゐないんだ。たとへば外觀ではどんな美人にしたつて、ゲーテがフアウストの中の化物の夜祭りで書き現してゐるやうな、鼻持のならない反吐の出るやうな根性を、小綺麗な着物と假面で包んでゐるだけさ。君なんかには君が好きな女の臟腑のどんづまりに、いつも排泄物がつまつてゐるこ

とさへ透視出來ないだらう——平凡な觀察のやうだが、この觀察をよそにしては、人生はます〳〵苦になるばかりだよ。しかし、さればといつて相手ばかりを責めるわけにもゆくまいぢやあないか——われわれ自身だつて、要するにその大きな化物の一細胞にすぎないんだから——また、化物退治に業が煑えたら、ぐるりとけつを向けて、一ばいやるんだ。ところで、さあ、一盃——』

小さな、鳥料理の鈍い灯に照らされた入れごみの、二階の食卓の前に胡座をかいた戸田は、肉の弛んだ頰を眞赤に染めながら、城木に杯を突きつけた。この浪人ものゝ出鱈目な言葉の底にはどこか彼自身の過去の複雜な徑路を思はせるものがあつた。

『全く、あんな化物に本氣で取組んぢやあ、誰だつてやり切れないさ。でも、大抵の人間は一度は血の汗をダラ〳〵に流すんだからな——こいつだけは人の說法ぢやあのみ込めないんだ。一度經驗して血みどろになつて懲りない以上は——どうだね。もう君なんかも下らない無駄骨折はやめて、のらくら修業をはじめては——僕の門徒になると、そりや生活は暢氣だぜ。廻れ〳〵水車といふ奴で流れにつれてただグル〳〵廻つてゐる暢氣さといふものはないぜ。化物を相手に呪つたつて憎んだつてどうなるものか——それとも、まだ、糞づまりの化物美人があきらめられんのかい？』

戸田は眼で笑つて、こんな手ひどい言葉を浴せかけるのだつた。

城木は赤くなつた。そしてうつ向いた。

『まあ、元氣を出せよ。君は何だか熱で夢中になつてゐる間も、穢らはしい奴等のおなさけで受けた敎

育や知識まで、全身からコスリ落してしまひたいなんていつてゐたが、なぜ自分の知識なんかにこだはるんだい？　結局、そんなものは人間の本質に何の關係もありはしないんだ。そんな狹い苦しい量見ぢやあとても生きてはゐられないぜ。それとも死ぬるかい？　死ねない間は文句を並べるなよ。どこを風が吹くといふ振だけもして見せろよ。それが男の心意氣つてものなんだ』

そして、やゝ眞顏で、戸田は不幸な若者を眺めた——

『とにかく悧巧に、暢氣にやつてのけるさ——日本がいやになつたら外國へでもふつ飛ぶさ。それまでの決心も出來なかつたら、せめてまるで境涯だけでもかへて見るさ。東京から上方へ移つたばかりでも氣は變るものだよ。どうだい、少し土地でもかへて修業をして見ちやあ——』

城木も目を上げて見返した。この世で一ばん戀しい女性の側にゐることは、彼女を自分と同じに不幸の淵に捲き込むことだとしか思はれぬ以上は、なるべくその人から遠ざかる外はなかつた——戸田の言葉からある暗示が感じられた。

戸田は自分の言葉に心が動いたらしい城木の顏を眞直に見ながら續けた——

『勿論、どこへ行つたところが同じ世の中さ。こつちの氣持がこだはつてゐれば煩はしさは同じことだ。夏目さんのいひ草ぢやあないが、他人の尻の穴の恰好まで探索したがるやうな奴はどこにもあるが、しかし生活に動きをつけると大てい氣分は展開するよ。で、若し君が東京を思ひ切つて離れて見る氣があ

るなら、京大阪にも、ことによれば外國にもいくらか知り人もあるから紹介狀位書いてもいゝと思つてゐるのだが——』

城木はこの人の前にはすべて正直になることが出來た。

『さう願へれば有難いと思ひます。實はもうこれまでの知り合には、たとひどんなに親しかつた友達にも逢ひたくないやうな氣がしますので、まるで知らない世界に這入つて行く外は仕方がないと考へてゐるのです。ことによつたらこれまでの生活を全然やめて肉體勞働者にでもならうかと思つてゐたためですが——』

『馬鹿な、君のその身體で土方の二日もやつて見給へ。どんなことになるか——』と、戸田は笑つて、『そんな自棄になるにはまだ早いよ。それよりせめて大阪あたりへでも行つて見るさ。またまるで違つた周圍で、却つて自由に生きられるかも知れん。土方になる氣なら、どんな仕事でも辛抱出來るといふものだ。幸なことに、僕がよく知つてゐる男が大阪でブローカー業を始めてゐるんだが、いつぞや逢つた時、信用の出來る祕書が欲しいつていつてゐた。何なら、厭になつたこの都は明日にも見切りをつけて、そつちへでも行つて見給へ。動きの激しい世間に飛び込むと、氣が晴れていゝかも知れん』

相手が大阪でブローカー業をしてゐる人間ときくだけでは、どんなにあくどい、どんなに物質的な男かと思はれるのだつたが、しかし戸田が親しくしてゐる一人だとすれば、多少、いはゆる實業家型の人物とは違つたところもあるのだらうと思はれて、城木にはたのもしい氣がされた。

『私のやうなものにも勤まりさうだと思つて下さるなら、早速お心にあまえさせていたどきませう』と彼は答へた。

『太田は面白い奴だよ。ありふれたブローカー屋とは少し違つたところのある人間なんだ』と、戸田は説明した。

『三十代まではひどい妄想家で、故郷のおやぢが死ぬと、たつた五十萬あるかなしの財産を軍費に、ある小新聞を買收して理想的な新聞事業を始めようとしたが、半年經つか經たぬにすぐ、ぽしやつてね、それからアメリカ三界を四五年放浪してゐた末、何かのきつかけで小金をためて、歸朝するとその金を持參金に、つぶれかけてゐる古ぼけた石炭專門のブローカーを整理したんだ。その整理振りが變つてゐるといふので、債權者の頭だつた、ソラ、强慾非道で聞えた高井といふ老人が大へん太田を見込んでね、高井が後援者になつてくれたために、あいつ、めき〳〵男を上げてしまつたのさ。浮世の苦勞はよく知つたやつだから、君のやうな仕方のない人間でも、どうにか始末が出來るだらうて』

城木は苦笑した。

『で、その太田さんとあなたとはどんな御關係で？』

『僕はね、こんな無賴漢だから、どんな社會の人間とだつて知つてゐるさ。僕はえり好みをしないからね――僕にはどんな官僚家だつて、民主家だつて、同じ人間なんだ。それだから、誰とでも緣があればこそはるのさ。勿論、君が好む土方の親分にも、二人や三人知り合ひがあるよ。だから君が土方向きの

人間なら、喜んでそつちへ振り向けたわけさ。ところで困つたことには、僕自身は、大臣にも向かず、銀行員にも向かず、土方にも、切符切りにも向かないんだ。君よりか、もつと意氣地なしさ。第一、若い時分から御婦人諸君の御機嫌さへ取りむすべたことがないんだからね。うぬぼれ澤山の御婦人諸君ほど、御機嫌の取り易いものはない筈なのに――でも君なんかその點ではえらいよ。兎に角、ブルジョア浪の寵兒であり得たんだからなあ、は、は、は。そこで、もう少しどうだ』と、戸田はすぐまた酒だ。

城木は泥醉後、前後不覺の間に、あけすけに自分から德惠子や長沼家との一切を喋つてゐたに相違なかつた。彼は恥ぢた。そしてよんどころなしに杯を重ねるのだつた。

戸田のどこかまごころの籠つたすゝめに元氣づけられて、城木はいよ〳〵大阪行きの決心を、小さな鳥料理屋の鈍い火の下でかためた。

その翌日戸田はまだ屈託から解放されずに考へ込んでゐる城木にいつた。

『ところで、東京を去るのに、君も素手ではどうにも仕方があるまい。これまでの住居の方の整理もあらうし、旅費だつていくらか用意がいらうが――』

『これまで住んでゐた家の方は、月々の費用は留守居婆さんに月初に渡してありますから何ですが、家へ戻れば多少旅費位なものは蓄へてあるのですけれど、何となく元の住居に戻るのがいやなので實は思案してゐるところなのです』と、城木は素直に答へる。

戸田はうなづいて――

『二度と元の住ひに――その金持の家の近くへ立ち廻りたくないといふ君の氣持はよく呑み込めるよ。といつて、古い友人にさへ顏を見せたくないとすれば、どうだね、僕の金を少しばかり使つて見てはくれまいか？』

城木は相手の顏を眺めた。

『は、は、は――君は、素寒貧の僕が何かいひ出したのだといふやうな顏をしてゐるね。だが、僕だつて、さう蔑視したものではないよ――』と、戸田は人の好い笑ひを笑つて、

『これで僕だつてかせぎの道は持つてゐるのだ。一部からはなか〳〵御贔屓にされてゐるんだからね。現に、この机の上にひろげてある原稿紙に、面倒臭がらずに、字を書いてどこかの雜誌屋に持つてゆけば百と二百の金はすぐに出來るのだ。なあに、たゞ、字を書きさへすればいゝのさ。天才でない限り、しかつめらしい顏をして、いはゆる彫心鏤骨ぶりを見せたところが、寢ころんで出鱈目になぐりつけて見たところが、その小說なり論文なりが、詰まらないもの以上ではあり得ないことは分つてゐるのだからね。どうせ下らない文章を書くなら、苦しんで書くより樂にかまへた方がいゝんだ。僕はいつも後者の道をえらんでゐるのさ。それでは今夜は酒をすこし愼んで、君のために原稿紙にいろはでも書くことにしよう。するとわれ〳〵は明日は金持になるんだ。原稿かせぎも考へやうによると結構な商賣さ。少くとも贋札を作つて、懲役にゆくより氣が利いてゐるね。どうだ、さうは思はんかね？』

中年の著述家は自らあざけるやうにさう笑つた。そして日がたそがれて來ると、

『ぢやあ、これから僕は贋札造りにかゝるから、君は少しそこらを散歩でもして來ないか？　君はそこに屈託らしい顏をして腕組みをしてゐるのを見てゐると、僕まで陰氣になつて、御贔屓さまに喜んで戴けるやうな文章が書けなくなるから――』

そして、いよ〳〵城木が、そこらをぶらついて來ようと部屋を出ようとすると、背後から聲をかけた。

『この部屋を出て見て、たとひ氣が變つて大阪落ちはいやになつても、一度は歸つて來たまへよ。でないと、今晩の僕のかせぎが無意義になる。僕あ、必要以外に金儲けをせんことにしてゐるのだから――いやになつたらなつたで、明日二人で大いに飲むことにしよう』

――城木は戸田の下宿を出た。神田の裏通は、凩が身を切るやうに吹きすさんでゐるにもかゝはらず、明るく賑はしかつた。彼は明るい夜の巷を小走りに行き交ふ男女のすがたを眺めながら、そのすべてが希望に滿ちてゐるやうに生々した顏をしてゐるのが不思議な氣がした。自分一人が、いかなる運命のまはり合せで、こんな陰欝な心の世界を持たねばならなかつたのだらうと思ひ沈んだ。

――あゝ、いつそ、あの時、德惠子のいふまゝに一緒に墮落ちをしてしまへばよかつたのだ。あの女はさぞ無氣力な意氣地なしと僕をさげすんでゐるだらう――しかし僕にはどうしてもあの女の無謀な考へに贊成は出來なかつたのだ――それはあの女を浮世の不幸の波に捲き込ませるに過ぎないのだもの、そして、どんな非道な人達にしろ、あの女の親達は僕に取つて怨人であるには違ひなかつたのだもの、

あの晩までは。

城木の頭には絶えず堂々めぐりをして、この考へが物憂く、渦を巻いてゐるのだつた。

――いつそ、これからあの女を連れ出してやらうか！

彼はまばゆい夜の街の雑沓した歩道の眞中で、こんな風に獨語ちて見た。だが、それは遲すぎる事だつた。そんな冒險はあの娘が昂奮の絶頂にある時決行すれば兎に角、今はもう遲すぎる。

だが、彼の歩みはいつとなく九段中坂を上つてゐた。德惠子の屋敷はこゝからさう遠くはなかつた。

城木は暗い坂路をのぼり詰めたところで、初めてわれに返つたやうに立ち止つた。靖國神社の境内は煌かしい星の光の下に黑く眠りかけてゐた。

――僕はどこへ行かうとしてゐるのだ？　と、彼は惱ましく獨語ちた。

一度思ひ捨てた世界へ、いつの間にかふたゝび足を向けてゐた自分に、彼は驚きとあざけりを感じないではゐられなかつた。

――馬鹿！　どこまで女々しい奴だ！

とはいへ、城木は踵をかへす氣にもなれなかつた。暗澹たる星あかりの夜の道を、彼は長沼家のある番町の方へと歩いた。

いよ〳〵東京を去らうとする今、彼は何とはなしに、このまゝ戀人の家をも見ずに過ごすことは出來

ない氣がした。しかし、その氣持は自分自身に對して恥かしく思はれたので、婆やをたつた一人殘して出て來たわが家の模樣を見に行くといふことに口實を見出すのだつた。

靖國神社の裏手に近く、もう德惠子の家の長い石塀ははじまつてゐた。夜の空の下に、それはまるで牢獄の外圍を見るやうな思ひをさせた。

――牢屋だ。

今まで毎日見馴れた屋敷だつたが、今夜のやうに淺猿しく醜いものに見えたことはなかつた。そしてその牢獄の内こかの戀人はゐるのだつた。

――ほんたうにあの時、あの人のいふまゝにすればよかつたのだ。牢屋の外には、あの人が考へた通り、自由で激しい世界がやつばしあつたのに！

城木に取つては、たとへば戸田次郎のやうな人間の住む世の中は、これまで思ひも付かないものだつた。彼は生れ落ちてから窮屈な保護者を持つて育つたので、いはゆる世間知らずのお坊ちやんより、より以上外界に對して理解がなかつた。たゞ、彼は世間を恐れた。それで德惠子があんな事をいひ出した時、彼にはあまりに凄まじい、自暴的な、捨鉢なものに思はれたのだつた。それでもどこまでも退嬰的に考へる外はなかつたのだが・・・しかし、今はもう遲い、もう遲すぎる。

内氣な城木には、黑い高い石塀は到底越え難いものに思はれた。

――僕は行方も知らぬ漂浪の旅に上るのです、お嬢さん、あなたはいつまでも幸福でゐらつしやい。

冷たい、乾つぽいものが、蒼褪めた青年の頰に流れて、唇をぬらした。

城木は塀沿ひに歩いた。間もなく、同じやうな建方の小住宅が並んだあたりに來た。それは長沼家の持地に建てられた、その家の家扶家從、その外の事務員に無料で貸されてゐる一種の長屋だつた。

城木の今までの棲家はかの長屋じみた住宅のとつばなにあつた。彼は人目を忍びながらわが家の前に近づいた。やつぱり氣がかりだつた——あの雇婆が、自分が見捨てた家をどうあと始末をつけたであらう——

歩み近づいて見ると、軒燈は消え、玄關先の雨戸はぴつたりと閉め切つてあつた。

一枚の貼紙——それが夜目にも、眞白に、その雨戸に貼られてあつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

前住者城木正吉當家解職後、全く關係なきものとす。行方一切不明。御用の方に申し上ぐ。

長沼家

——さすがに城木は土氣色になつた。汚辱されたものゝ戰慄が全身を走つた。何といふ侮辱だらう。

德惠子に對する熱情さへどこかへ行つてしまつた程、彼は憤りに魂を冷やさせた。

——どこまでも侮辱だ！

城木はよろめき勝ちに過去の住居の前を立ち去つた。

力ない足どりで引返さうとすると、フト前に二つの黑い影があつた。どうやら見覺えのある姿だと足音を忍ばせて聞き澄ますと、案の定、それは夜番の男連だつた——一日の勤めをすまして、近所の飲み屋で輕い醉ひを買はうとして出てゆくところらしかつた。

『一體、どつちが先に手を出したんだい。お孃さんの方かい？　それとも』

『城公はあんなに意氣地なしだもの——はねつかへりの方から口說いたに違ひないさ』

——城木は耳を蔽うた。彼ばもうその先をきゝ取らうとする氣にはなれなかつた。

急いで、横道に外れて、彼は明るい灯の海のやうに見える神田を指して戻つて行つた。

『まだ十三分もあるよ——まあ急ぐな。もう一ばい——おい。給仕さん、ホツトウキスキイ！』と今夕、いよ〳〵西下しようとする城木を東京ステーションに送つて來た戸田は、發車時刻が來るまでの僅な間を、驛内の西洋料理店に、心の忙しい漂浪者を連れ込んで、送別の盃を重ねてゐた。

『なあ、君、兎に角君に缺乏してゐるのは元氣なんだ。活力なんだ。そんな蒼褪めた顏をしてゐるのが第一惡い。もつと生々した血色になるためにうんと飲むんだ——そして頭を高く上げろ！　うつむいてゐちやあ駄目なんだ。頭を高く上げろ』

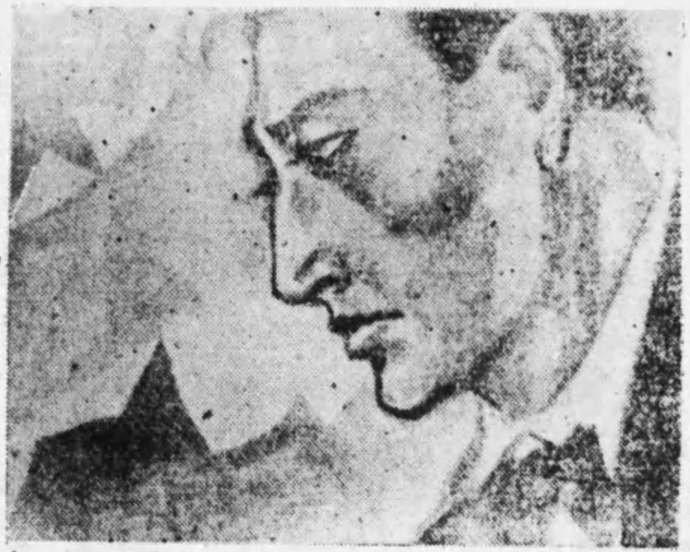
城木は默然として聞いてゐた。彼は新らしい親切な知り人の、例の目の下のゆるんだ顏が、感情をこ

めた目でみつめてゐた。そしていはれるまゝに熱いウヰスキイのグラスを空にした。

『いゝか――頭を上げろよ。眞直に歩くんだ。僕の命令通りになると約束し給へ』と、戸田は勵ますやうな含笑ひの目で相手の慕はしげな眼付を見返した。

『約束します』

城木の聲にはどことなく涙含ましい響きがあつた。構内を忙はしげに往き來する旅客達の乾いた下駄の音、やかましい話ごゑ、その騒音の奥で、線路の方へ響く汽車や電車の轍の音、笛のさけび――それ等は耳を聾するやうに騒がしかつたが、しかし同時に寂寞な旅人の胸に限りない悲哀を感じさせるオーケストラのやうに思はれた。城木はさうした雜音に心をおされながら、一倍この新知己に感謝せずにはゐられなかつた。若しこの人が自分の目の前に現れてくれなかつたら、最近の心がどんなに苦しみにひしやがれたことだらう――或は生きつゞける氣力さへ出なかつたかも知れない――



自分自身にも他人にも等しくみなに憎惡と侮蔑とを投げつけずにはゐられない彼の暗黑冷殘な魂の底に、人間らしい一脈の光を注いでくれたのは、この奇妙な市井の隱者だつた。生きてゐる限り、彼はこ

の男を忘れないだらう――絶望が極點に達して、もう生き存へることの出來ない日が來ても、この同情深い心に對してだけは、遠くから手を擧げて告別の挨拶を送らずにはゐないだらう――

『約束します。出來るだけやつて見ます』と、彼は無理に微笑を返さうとしながら繰り返した。

『結構だ。その決心さへ出來れば――』

――食堂の時計はもう出發時刻が數分の後に迫つたことを知らせてゐた。あたりのテーブルにゐた旅人達は、席を離れた。

『ぢやあ、そろ〳〵プラットホームへ行くか――』と、戸田はグラスに殘つたウヰスキイを殘り惜しさうに呑み干すと、袂をさぐつて、がま口にも入れず投げ込んであつた幾枚かの銀貨を白い食卓の上にかたい音を立てゝ置いた。

二人は群衆に揉まれながら改札を出た。

割合に空いてゐる急行車だつた。城木はうまく窓際に席を見つけることが出來た。

戸田は開けられた車窓の外に、ふところ手をして突つ立つてゐた――帽子を外套もつけてゐなかつたが、不思議にこの男にはこの風を吹き拔くプラットホームの薄い屋根の下でも、うそ寒げなところがなかつた。

城木はなつかしさに充たされて、戸田をみつめた――

『では、お別れしますいろ〳〵有難う』と、やつと彼はいつた。

戸田はふところ手の肩をそびやかすやうにした。

『僕は君を掣肘はせんよ。太田に無理に逢ふ必要はないのだ――しかし會つて見る氣が出たら訪ね給へ。あの男は屹度君に便利をはかつてくれるだらう』

車掌の號笛がひゞいた。

『失敬』と、戸田はいつた。

城木は低く頭をたれた。

告別者たちに最後の挨拶のひまを與へるためのやうに、緩々と動き出した列車が、やがて速力を加へた。戸田の姿はもう城木の目から失はれた。

城木はぐつたりとクッションにもたれて前の窓から眺められる都會の姿を見まいとするやうに瞼を閉ざした。

城木は目を閉ぢ續けてゐた。

ふと、かたはらに遠慮深く小さくなつてゐた二人のうら若い男女の囁きが、かすかに耳に觸れた。

『ごらんよ――あれが東京日日の塔だよ。ねえ――もう當分東京も見納めだ』

『えゝ――でも一度思ひ切つた土地だけど、何だか悲しいわねえ』

『あの日日の塔のむかうに、お前の小さなカフェがあつたんだ――僕あ、あの塔とお前とを結びつけて

考へずにはゐられなかつたのだけど――もう――』

二人の囁きは途切れた。

城木は目を閉ぢたまゝで心に呟いた。

――この人達は僕より少くとも勇氣があるんだ。とりわけ男の方は――

彼は目を開けて、流し目に二人の方を眺めた。男は二十一二の紺絣の着流の學生風な青年だつた。外套も着てゐず、細い、意志のあまり強くなさゝうな顎に、まばらに薄い顎鬚が伸びてゐた。女は、頭ばかり大きな束髪で飾り、まだらに白い衿あしに下襦袢の赤い襟をのぞかせ、まがひ大島の荒いのを着、膝の上で赤つぽい襟卷をいぢつてゐたが、丸顔の手足ほつそりとした可愛らしい娘だつた。十六七かそれとも八九か、はつきり分らなかつた。

――この若い人達は、僕より兎に角勇氣があつたんだ――

城木は陰鬱に心に繰返して、目を、今まで見まいとしてゐた窓外に送つた。

夕べの東京は美しく輝いてゐた。黒い月のない空の下で、赤く、青く、黄色く高い窓々とイルミネーションとはきらめいてゐた。

――何といふ夢のやうな美しさだらう。だが何といふ殘酷な――

城木は華麗な夜景に隠された、この都會生活の物凄まじさを呪つた。それにもかゝはらず、隣に小さく身を寄せ合つてゐる駈落者らしい男女の、娘の方が歓いた通り、彼も、またこの首都の何ものかに對

して激しい一種の哀惜を感ぜざるを得なかつた。しかも、それはいぢらしい娘のそれよりも、より以上根強い苦しさだつた。

彼は戀人を殘してゐた。

——貧しげな娘よ、でも、君は僕より幸福だ——君は勇ましい戀人と一緒にゐるのだ。

汽車はます〳〵速力を增して走り續けた。それはもう何の未練もなく東京を見捨てるものゝ活力を示すか、未練あるものに新らしい世界への猪突を激勵するものに相違なく思はれた。あらゆる過去を忘れなきやならない——頭を上げろ！　と、戸田次郎はいつてくれた。戸田次郎の、あのうそぶきが、汽車の轟音の中にまじつてゐるやうに思はれた。

城木はすべてを思ふまいとして、ふたゝび目を瞑つた。

瞼で閉がれた暗い頭腦と胸の奥に、いつまでもたつたひとつ、眞赤な炎の渦卷がめぐつてゐた——そしてその渦卷の底に眞白なものが輝いてゐた。怒りと歎きが漲つたひとつの顏——

——あの女は輕蔑してゐるだらう。

と、城木はいつもの言葉を繰返したが、しかも、その人を戀せば戀す程、近づいてはならぬ自分とし か考へられなかつた。戀することは離れることだ——それは矛盾した氣持だつたが、彼の場合には眞實だつた。

向ひ側の老人達は話してゐる。

『まあ、かうやつて來るたびに伴が男一匹になるのを見るのは結構と思はなけりやあ——』

『だからの、いつか出世するにきまつとるよ。今の中は我慢して仕送る外はの——』

『可愛い子のことだもの、我慢も何もないがの——でも、いゝ顏ばかり見せてゐるとためにならんさかい』

老人夫婦は毛糸の襟卷の中で笑つた。

——いろ〳〵な世界がある。

城木は眠りを裝ひながら涙が流れさうになつた。彼は老父の面影を時々はつきりと思ひ出すのだつた。あのいつも目脂で汚された老眼——讀者よ、目脂で汚された老人の目にまさる懷かしさが、さう多くあり得るか——皺でたゝまれた額や頰、艶氣を失つた、齒が拔けたので可愛らしくなつた唇、廣い巖丈さうな肩——晩年をあの成金の門衞で送りつくした父親には、子供の自分の知らなかつた苦勞がさぞ多かつたらう。

——何といふ幸福な、息子に夢をつなぎうる老夫婦だらう。

と、城木はいつまでも涙ぐましさから離れることが出來なかつた。

新らしき苦難へ

——すつかり夜になつて列車給仕は窓々の鎧戸を下して歩いた。濛々と立ち罩めた煙草のけむりを透

して、赤黒い灯影に照される旅客達の顔はおしなべて眠たげに物憂さうだつた。みんなは外套の襟を立て、くびまきを巻いたなりで、坐つたまゝ寝支度に這入りはじめた。

城木もいひ難い疲憊を全身に感じた。肩も背筋も、腰も、すべて痛かつた、彼はどうにかして一刻も早く眠りに這入つて、この數日間の心の疲れを癒やし、新らしい都の新らしい世界に生々した心で對したいと祈つた。

旅客達に取つて夜汽車の轍の音は、あの騒がしい轟音は、却つて寂しい催眠音樂だつた。

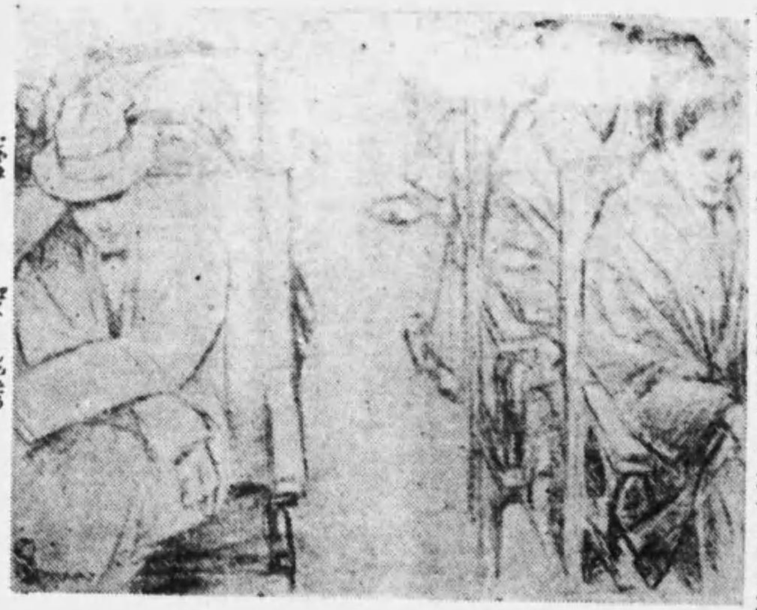
——いつとなく城木も亂され勝な眠りに落ちた。

折々肩さきに悪寒を感じて眼をさまして、昏濛した頭の中で、今頃通過しつゝある小都市の夜の姿を思ひ、黒い、果しも知らぬ湖の姿を思ふのだつた。そして、再び昏々たる假睡に落ちて行き〳〵した。

——ふと、白い朝の光に冷たく前額を照されたやうに感じて目を開くと、もう窓々の鎧戸は開け放され、車内の人々は重たげな瞼で窓外を眺めてゐた。夜の間に玻璃窓の外は、鈍銀色の氷雨になつて、多ざれの山と野とをぬらしてゐた。

——あ、雨だ！

と、城木は無意味に呟いたが、その冷たげな氷雨に何となくある憂鬱な、陰惨たる色で、まづ寝起きの心を押し塗られるやうな氣がされた。にがい煙草、それからとある驛で求めた生暖い牛乳とサンドウキツチ——顔も洗はずにそれをすまして、彼はまた身じろぎもしない人となつた。



暫くして、やつとの事で、關西唯一の大都市は、遠くおぼろに雨煙のかなたに姿を現しはじめた。灰色の空の果は濛々たる煤煙にまみれてゐたが、それはいかにも活動的な都を飾る嚴粛な天井としてふさはしく見えた。汽車は淀川の長い鐵橋にさしかゝつた。

——たうとう來た！

城木はこれからその中に彼自身も同化しようとする煤煙都市の方に、さすがに希望をこめた挨拶の目を投げて、それから車内に瞳を移した。多くの旅客達は大てい大阪で降りる人らしく、鞄や信玄袋の始末を始めてゐた。

隣席の若い男女は相變らず頼り無げに肩を寄せ合つてゐた。

かすかな〳〵囁きが、二人の間にかはされてゐて、聞くともなしに耳に這入る——

『ねえ、まさかあなたのお宅で大阪までもう手をまはしてはゐますまいねえ——』と、不安さうに娘は呟く。

『大丈夫だよ、別に家から持ち逃げをして來たわけではなし、また邪魔つけな僕が失踪したところがお母さんなんか却つて喜んでゐるだけだと思ふ』

繃帶でも持つらしい青年は、喫ひ差しの紙卷を床に落して蹠摩下駄で踏み付けながら投げるやうに答へる。

『それならいゝけど――もう何も外に氣がかりはしないけど――あたし、あなたにどこか小さな宿屋で待つてゐて戴いて、難波のカフエへ行つて來るわ。あそこでお京さんは大變勢力があるといふから、屹度あたし一人位店に住み込めるやうにしてくれるわ。さうすれば當分何の心配もないもの――あなただつてすぐに職業が見付かつてよ』

『あゝ、僕は一心になつて働き口をさがして見るつもりだ。大阪がはじめてゞも、あれだけの都だから、僕一人のための職業位空いてゐるだらう――』と、青年はそれでも元氣よく目を上げて、もう間近に迫つた新らしい世界の方を眺めるのだつた。

――あゝ、まだしも君達は幸福だ！

城木はその二人を眺めながら、口に出して前途を祝福してやりたいやうな感動に打たれた。

――だが、もうすでに梅田だつた。列車は激しい裂くやうな叫びを擧げながら、煤けた大停車場のプラットホームに走り入つた。

氷雨に濡れそぼつた驛前には、タキシイや車の客引が、雨帽の鍔を引き下し、雨衣の襟を立てゝやかましくむらがつてゐた。

構外は鈍銀色の氷雨にすつかり濕り凍つてゐた。城木は車寄せの雨落ちに佇んで、北風に時々横しぶきに散りゆらぐ灰色の雨幕に蔽はれた大大阪の玄關に見入つた。この雨幕をかゝげて這入つて行くひとりぽつちの旅客を、この都市はどんな風にあしらふだらうか？　新らしい都は新らしい喜びを與へてくれるか？　それとも更に新らしい苦難を？

厚い外套の襟を立てたゞけで、雨具の用意のない彼のそばには、運轉手や車夫がとり分け寄つて來た。めい〳〵に行先をたづね、安値で身體と荷物とを運んで行かうと申し出すのだつた。

城木は行先を持つてゐた。しかし彼はためらつた。まだ九時少し前のことで、どんな勤勉な大阪實業家も事務所に姿を現してはゐないだらう。兎に角、人を訪ねるには早やすぎる――彼は左右の人々に頭をふつて見せて、つい驛のそばの西洋料理店を目ざして、氷雨に帽子の鍔をたゝかせながら走り出した。

頰にかゝる冷たい雨を、西洋料理店の厚玻璃の扉の外でハンカチでふきながら、城木は苦笑した。

『ひどい歡迎だ！』

朝の食堂は空いてゐた。女給どもはストオヴに近い椅子に連れて行つてくれた。

『生憎な雨でございますわねえ』

いくらか中國のなまりを殘してゐる娘は、註文をきく前に愛想をいつた。

『ほんたうに――今もね、獨言をいつたんだよ――あんまりひどい歡迎だつて――折角訪ねて來た男へ

この都もあんまりさ』。

城木は、口寡なゝ男だつたが、人なつかしさでそんな口をきいた。ふるひ上る寒さの中から來たので、この頃飲みおぼえた酒がほしかつた。で、兎に角、熱い皿と一杯のウヰスキイ。

親切な女給で、カラアのかけ替への用意もない彼のために、近所の唐物屋から白い襯衣やカラアを取り寄せてくれた。下着を取り替へると、これでいつでも大事な場所に臨めると安心が出來た。こんなことまで、一々、相手の心づかひに感謝の念を持つ程、情に飢ゑた彼になつてゐた。

大阪にゐついたら、この店へ時々來よう。そんな風に獨語ちさへした。

向うのテーブルではこの次の汽車で東上しようとする商人達が、純粹の大阪辯で羅紗の相場について止め度もなく論じ合つてゐた。大阪人は生馬の目を抜く東京者より激しいといはれてゐるが、かうして彼等の議論を聞いてゐると、ぐつと商賣に正直で、ぐつと無邪氣なやうに思はれた。

城木が大阪の玄關の西洋料理店で受けた印象は、肉がやゝ固いのを除いて嬉しくないものはなかつた。早く思ひ切つて世の中へ出ればよかつた――とさへ、彼には思はれた。

――十時が來た。

城木は椅子を離れた。戸田から紹介狀をもらつて來た太田氏の事務所は淀屋橋の近くにある。電車の乘り方を女給から敎はつて、彼は再び氷雨の中の人となつた。

泥濘に濡れてゐる電車に坐つて、いくらも經たないうちに、彼は淀屋橋に來てゐた。

太田ブローカーの事務所は左まで大きな建物ではなかつた。が、灰黑く濡れよごれた六階建の窓々には、赤茶氣た電氣が輝いて、一種の騷々しさが扉の外からでも感じられた。

受附の黑い詰襟の中年男が、差出した紹介狀を一瞥すると、腰をかゞめて引つ込んだ。通された應接間は、天井の低い、何の裝飾もない小間だつたが、スチームは暖かく、長椅子や肱椅子には、先客が六七人もゐ合せた。でも、めい〳〵、主人の出現が遲いのをブツ〳〵かこつてゐるものはなかつた。

『大將もいそがしい人だからなあ』と、灰色の背廣を着た、一つべつゝひに禿げた一人が呟いた。

『ほんまだつせ。こゝの大將、身體が十あつても足りはしまへん』と、肥つた、縞物の老人が答へた。

して見ると、太田氏が、戸田が話してゐるに增した信用を、大阪の財界に持つてゐるのは間違ひなかつた。

四五分して、次の部屋に通じる重たさうな黑い扉が開いて、づんぐりした中年男が現れた。首が短いので苦しいのか、カラもネクタイもはづしてゐた。

『や、皆さん、お待たせしました』

主人公の出現に接して、來客達は一時に椅子から立ち上がつた。中でも縞物の老人なぞは、まるで商工大臣のお出ましをでも迎へるやうに、ピョコ〳〵頭を下げながらその前に近づいて、

『やれ〳〵、やつとまあお目にかゝれました。三日續けておたづねしましたが、いつも御意を得られま

せんで――御無理はありませんわい――そりゃ、もうお忙しいあんたの事で――』

太田氏は老人の言葉に耳を傾けるでもなく、萬遍なく室内を見渡して、氣輕にみんなの挨拶に笑ましげな會釋を答へながら、手にした一通の手紙を振り廻すやうにした。

『どうも何分せはしいにようて、皆さんにいつも失禮ばかり――時に、この手紙持參の方はどなたですな？　東京の戸田君の御友人は？』と、口ではいつたが、その時には微笑の中に烱々たる鋭さを見せてゐる實業家の目は、もう、室隅の小さな椅子に遠慮深く坐つてゐる、城木の姿をそれと見つけてしまつてゐた。

彼は城木が立ち上つて何か答へようとするのを待たず、忙しい用談を控へてわれ先にと近づいてくる商人達には見向きもせず、もぢ〳〵してゐる青年の方へづん〳〵ぐりした身體を小きざみな足どりで歩み寄せて、

『君ですな？　城木さんと仰しやるのは？』と、一瞥の中に頭の先から足元まで見下すやうにして、細かい齒並の前齒を現して、ニコリとして、

『どうです？　戸田君は丈夫ですか？　相變らず飲んでゐますかね？　飲んでるだらうね？　あれがあの人の癖でもあれば身上でもあるのだが――結局、病氣の元を作るかも知れんて――』

『戸田さんからよろしく申し上げろとの事でございました』と、城木はそれだけ答へた。

『さう、有難う。さあ、腰を下し給へ』と、實業家はセカ〳〵した、その癖人付きのいゝ調子で、兩手

を差し出して城木を强ひて椅子に坐らせ、自分は立つたまゝで、

『時に、戸田の手紙では漠然と君が下阪することになつたから、一切の身柄を僕に始末しろといふのだが、どうもあいつも相變らず藪から棒の物いひをする男だ――はゝゝゝ、しかし、あいつの言葉は何でも聽くことにしてゐるのだが――で、こつちで君はどんな仕事をやりたいのです？　僕の店に興味がありますか？』

城木は急には考へられなかつた。彼にはこの種の仕事に何の豫備知識もなかつた。

『どうにかしてこちらで身が立てたいと存じまして――』と、彼は、吃り勝ちに答へた。

太田氏は相手から目を放さずに、

『實は祕書に適任の人があればと戸田にたのんで置いたのだが、君がそれに向いてゐるとすれば、今月だけは見習ひといふことにして來月から正式に社員になつて戴いてもよろしい。大學は立派な成績だつたさうだけれど、まあ、學校の成績などはどうでもいゝのぢや、君が仕事に適してゐれば、双方の幸福――不適當なら、また何か考へて上げてもよろしい。たゞ、うちはいそがしいよ――この通りいそがしいよ。で、うんと働く人がほしいのぢや。正直に働いてくれゝば僕はその人を優遇する――戸田では駄目ぢや。は、は、は。あいつは現代で働く奴は惡黨の下職と心得てゐる――一種の見解だが、僕は左袒せん。僕は勞働主義だ。君はどうだね？　これまでうんと働いたことがあるかね？　は、は、は。まだ人並の慾も出ない年ごろぢやな――ねえ、さうぢやないか。では、氣が向いたら、明日午前十時きつか

りに、この事務所に來てもらひたい。祕書課の連中に今日話して置く――ぢやあ失敬』

お喋りな、その實、喋つてゐる間に觀察の目を一瞬も放さぬやうな實業家は、城木の感謝の言葉を待たずに、例の縞物の老商人の方へぐるりと向き直つた。

『扇さん、あんたの再々のお手紙のことは、あれはちと無理ですな。僕は勿論營利ばかり目的にはせん。しかし、損をするなら、何か社會的に貢獻出來るといふ風な條件でもないと・・・・』

城木は實業家の背中にお辭儀をして、不思議な歡びに胸を充たされながら小さな應接間を出た。

城木は望みに充たされて細い廊下を階段の方へ歩いた。廊下の兩側には事務室が續いて、電氣に照らされたテーブルにずらりと並んだ社員どもが、めい〳〵專心に働いてゐた。煙草を喫つてゐるものは愚か、囁き合つてゐるものもないやうに思はれた。

――あゝ、みんな働いてゐる。隨分働いてゐる。僕もあの中に交つたら、憂鬱を忘れて働けるかも知れない――勞働だけが僕を生かしてくれるだらう。誰もが僕の過去も知らない――何も知らない。僕もすべてを忘れて生きることが出來るだらう――

城木は狹い階段を下り、社員通用口から出ようとした。すると、石段の上の靴洗ひ場に一人の青年がゐたが、それがふと足音に振り向いたのを見ると、思ひもかけず、ついこなひだまで東京にゐた同期出身の安倍といふ男だつた。

『やあ――城木』

豫ねて富裕な大阪商人を父に持つてゐると聞いてゐた、この育ちのいゝ青年の笑顔を、しかし城木は、この場合一種の息苦しさで見返した。

『おゝ、君か』と、彼は呟いた。

安倍はなつかしげに眺めた。

『どうしたんだね？　君をこの大阪で見ようとは？　しかも、この太田事務所で――長沼さんの御用でも下阪したのかい？』

城木はいひ濁した。

『いや、さういふわけでもないんだが――僕の方でも、君と大阪で逢はうとは思はなかつたよ』

安倍は人のいゝ微笑を見せた。

『なにしろ、少し遊びすぎたので、東京にノラクラしてゐてはと、おやぢに呼び返されて、おやぢの緣引きで太田さんの御厄介さ。もう出勤の遲いので有名になつてしまつた。時に、君は用濟みかい？　何ならついそこの大都銀行の地下室に、香ばしいカフェを飲ませるうちがあるんだ――來給へ、久しぶりで話さう――』

城木には辭せなかつた。二人は幸ひ氷雨のやんだ往來の鋪石を踏んで、軒下づたひに四五軒先の大建築にたどりついた。そしてイリミネーションで輝かされた御影の石段を地下室に下りて行つた。

小ぢんまりした、美しい部屋は、まるで春のやうに暖かだつた。南洋蘭の鉢植や、花瓶の切花が甘つたるく香つて、人形のやうにお化粧をした可愛らしい女給どもが、方々のテーブルに散らばつてゐた。まだ午前なのに、この都會の高等遊民らしい青年どもが、輕口を娘達と投げ合ひながら、グラフや茶碗を控へて坐つてゐた。

安倍は城木を片隅のコムパアトメントに導いた。

二人は坐つた。

『お節ちやん、クラレツト』と、安倍は大そう荒い紫矢絣に紅の勝つた友禪の帶を可愛くしめた、エプロンの娘にいつて、そして友達をしみ〴〵眺めた。

『何だかめつきりやつれたなあ――病氣でもしたのかい？』

『いゝえ――多分、汽車の疲れだ』

城木は紙卷に火をつけて、眉を寄せるやうにして煙を吐いた。

『一たい、君に最後に遇つたのはいつだつたかなあ――』と、紅い酒の杯をかざすやうにして安倍はいひ出した。

『恐らく、大學の大講堂にマダムシモネツタの講演があつた時だつたねえ。あれは去年の秋だ――あ時からくらべると、君は十もふけたよ』

『さうかね、自分ぢやわからないが――』と、城木は苦笑した。

安倍は思ひ出したやうに、微笑の目を眞直に友達に注いだ。

『時に、お孃さんは御無事かね？　あの人はたしかに美しいよ。鈴木や本田も大變うらやましがつてゐたが――長沼家の財産に執着はないが、德惠子さんとなら死んでもいゝ位だ――城木は天下の艶福家だつて、みんなが寄り合ふといひはやしてゐるんだ。君も存外やり手さ』

城木は唇を嚙んで目を反らした。折も折、何といふ男に逢つたものだらう――城木に取つて親友の鈴木や本田が、この安倍と極親しかつたので彼の祕密は何から何まで知られてゐるのだつた。ことに、シモネツタ夫人の講演會に彼女と同伴したので、彼は彼女を安倍に正式に紹介さへもしてゐたのである。

――駄目だ。どこまでも過去が付きまとつてゐる。

城木は絶望して、さう心に呟いた。

――どこまで執こくつけ廻す過去の亡靈だらう！

城木は思ひ懸けず邂逅した舊友の安倍から、德惠子のことをいひ出されて、顏をそむけながら眞黑な苦惱におびえた。彼には偶然この舊友にあつてしまつたことが、運命的な打擊としか思はれなかつた。安倍その人についていへば、古い友人の中でも稀に見る好人物だし、不知な土地でさうした人間にめぐり逢つたといふことは、普通の感じからいふと、この上ない慰めであるに相違ない――喜んで握手し、喜んで承諾すべきである――それにも拘らず彼にはまたしても運命が安倍といふ友人の姿を借りて再び

彼を陰暗たる過去の屈辱世界に連れ戻しに來たものゝやうに思はれた。

どこまで逃げても駄目なのだ――どこまで逃げても、お前はやつぱし門番の子なのだ。藁の上からの寄食者なのだ。他人のお情で育つてお情で教育されたお情乞食なのだ。お餘りで生きて來た犬なのだ――と、さうその無邪氣な舊友の笑顏の奥から、何者かゞ白い齒をむき出してあざけつてゐるやうに、痛み傷ついた城木の神經には感じられるのだつた。

しかし、相手は城木のさうした氣持を知る筈がなかつた。

『おい、城木、運命の寵兒といふものは、兎角人の前では苦蟲をかみつぶした顏をしたがるものだが、おれの前ではよせよ。もつと正直に笑つて見せろ――ところでいつ結婚式を擧げるんだい？それにしても世の中は不思議なものさね。學生時代から、女、女、女で、女學生や女優や令孃や藝者や雜多な階級の浮氣つぽい尻を追ひまはしてゐたおれ達は、今になつても女房の候補者も出來ないのに、お高くとまつた模範學生の君には、招かずして當代に名だたる金持令孃がその才色を傾けてへばり着いて來るなんて――は、は、は。しかし何しろ祝福すべきだ。三分の好感と七分の嫉妬で、もう一ぱいのクラレットを君のために乾杯しよう』

安倍は立ち上つて、新らしいグラスを氣取つた手付で呑みほして腰をかゞめた。

城木はせめて微笑して見せる外はなかつた――苦さをかくして微笑つて見せる外はなかつた。この暢氣な、金持の伜さんの前で、自分の胸の底に毒蛇のやうに蟠まつて、絶えず魂をかみ破つてゐる屈辱と

苦惱とについて打ち明けて見たところがどうなるだらう。

久しぶりで友人を見た安倍は、そのあらゆる善良さを傾けて、浮々とはしやいでゐた。

『何しろ、われ〳〵の都會に來ながら、一言の豫告も報知もしなかつたのはあんまり友情がないよ――同期生でも、近藤や今宮や岡野なんて連中が、今なか〳〵大阪の不良社交界で鳴らしてゐるんだ。今夜早速彼等に通牒を廻して、君のために大々的な歡迎會を催さう――日取はいつがいゝね？　君の方さへ都合のいゝ日なら、僕の方はいつでもいゝんだ。在阪同期生を代表して、前以て伺ひたいが――』

城木は出來るだけのやさしさで斷つた。

『御好意は有難いが――今度はお斷りするよ』

『何故ね？　なぜ僕達の好意を斥けるんだね？　例によつて、變に遠慮深い男だなあ――』と、人の好い坊ちやん法學士は不平さうにたづねた。

城木は僞つた――僞る外はないのだつた。

『實は急用でこつちへ來たので、今晩は歸京しなければならないんだ。で、時間がない。その中にきつとゆつくり上方見物に來るよ。いづれその時は――』

『あゝ、さうか――その時は是非新夫人同道でね。それならそれで、今度はこのまゝ歸してやらう――』

と、安倍は少しの蟠まりもない男だつた。

城木はもうすべてが駄目になつてしまつたのを知つた。大阪に來た唯一の目的の太田氏の下に働かう

とする計畫もこれで畫餅になつたのだつた。

明るい灯があらゆる裝飾と器具と男女とを輝かしてゐるこの贅澤な室内が、突然、眞暗な曠野の墓地のやうに感じられた。

僕が惡かつた――過去と斷絶するには、過去とまるで緣の切れた世界に落ちるか上るかする外はないのだつた――

――城木はやつと暢氣ものゝ舊友と別れて、また氷雨がしと〳〵と落ち出した街路に立つた時、さう心に呟やいた。

氷雨は老女の涙のやうに音もなく降り續けてゐた。雨具のない城木は冷たく重いしづくに帽子を打たせながら、喪家の犬のやうな姿であてどもなくさまよひ出した。

行く先々に待ち設けてゐる不運――どこまでも追ひかけて來る呪ひ――それは彼の思慮をも意識をも暗ましつくして、みじめさへも通り越し、一種の麻痺のやうなもので、魂を包んだ。

彼は醉ひどれのやうに、殆どよろめき勝ちに軒下づたひに歩みながら呟いた。

『どこへ行くのだ？　どうしたらいゝのだ？』

――知らぬ他國にあるものゝさまよひの足は、いつも本能的にもと來た方へ向くのだ。城木は雨中を電車にも乘らず、今朝着いた梅田のステーションの方へたどつてゐた。が、彼はそこから乘つて來た線

路に沿うて、關東へ歸れる人間なのだらうか？

ぬれ凍つた鋪石を踏み、ぬかるみを越え、いくつかの橋を渡つて城木はステーション近くの、裏町に來てゐた。街路は割合に廣かつたが、左右の家並は殺風景な家造りが續いて、ほんのたまさか寒雨にすくんだ町人達が往き來してゐた。その淋しいがらんとした通を彼は物に憑かれたものゝやうな空虛な眼付で見渡して、そして二三の旅人宿の看板を見出した。

いつまでかうして歩き廻つてゐられなかつた――身内は不思議に熱してゐたが、手足はまるで霜げさうで、膝がしらはまるで力を失つてガリ〳〵してゐた。腦貧血の發作でも始まるやうな不安も感じられた。

――僕は倒れるかも知れない。このまゝでゐると――

二三軒軒を並べてゐる宿屋の中の、一ばんひまさうな、見つきからして荒れさびれた家のたてつけの惡い玻璃戸を彼は開けた。

店には一人もゐ合さなかつた。

『御免』と、皺枯れた聲で音なつて、しばし待つてゐると、初めて十四五の小娘が、洗物でもしてゐたらしい赤い手をよごれたエプロンで拭き〳〵出て來た。

『何か用だつか？』小娘は、この見すぼらしくぬれしよぼれて、雨具も持たぬ若者を、客人とは思はぬらしかつた。

『用なら、旦那はん留守やから駄目だつせ』

『用のある客ぢやないのだよ』と、城木は土氣色の唇で苦笑して、

『汽車から下りたばかりなのだ――少し休ませてくれないか？』

『あゝ、お客はん――わてはまた保險屋の集金さんかと思つたよつて――』

小娘も蒼ぶくれた顏でニヤリとしたが、突然、奥を向いて、

『番頭はん！　お客はんだつせ』

その聲で、帳場格子の奥の襖が開いて、四十がらみの、ひどく背高な、拔上がつた、金壺眼の男がよれよれの縞物に同じ羽織で、前かゞみに現れて來た。

『は、お客さま――』番頭は膝こそ突いたが、辭儀をするでもなく、づぶ濡れの客人を頭から爪さきまで檢査するやうに眺めた。

『汽車から濡れて來たのでね――』と、城木は辯解するやうにいつた。そして、何となく情なかつた。

番頭は相手の人品骨柄に、やつとどこか安心を見出したのであらう――

『そりや、御難儀なことで――さあ、どうぞ――丁度、今日、表の一番のお客さまがお立ちで上等のお部屋が空いてをりますよ。さあ』

渡りものらしい、關東辯でベラ〳〵といつて、やがて城木を、いはゆる上等の部屋に導き上げた。がらんとした八疊で、床には岸駒の虎の石版繪が睨んでゐた。

何を食べる氣にも飲む氣にもならなかつた。

城木は小さな瀨戸火鉢にかじりつくやうにして、無意味に少しばかりの火を積んだり崩したりしてゐた。彼はこの宿で、氷雨の音を、聞き澄ましながら、何とか上方での身のふり方を考へねばならないのだつた。

城木はどこまで轉落し續けてゆく自分だか分らなかつた。脚下には渦卷く深淵の底に惡運の獸が、黑毛と白牙とを逆立てゝ、落ちて行く犧牲を一呑みにしようと待ち構へてゐるのだとは知つてゐたが、それにも拘らず、死ねなかつた。人生に希望を失つても、彼にはまだ若さがあつた。それがこの世に彼を引き止めた。

彼は梅田の裏町の安旅籠の二階で、心を凍らせるやうな寒夜の雨を聞きながら、いつまでも眼醒めてゐた。

――僕はどうなるのだらう？

何よりも先決問題は、明日の日の糧をいかにして得べきかだつた。舊友の突然な出現のために、あの親切な、愉快な、豪放な實業家の下に新しい職業を求めることが出來なくなつたとすれば、早晩――一週間と絶たないうちに、彼は飢ゑねばならなかつた。

東京の戸田はあの時百圓の金を作つたのだつたが、戸田自身飲みたい男だから、まるで一晩、城木の

送別を名に飲み明したりなにかしたので、旅費として惠まれた時にはもう五十圓足らずになつてゐた。何や彼やで、彼は三十圓内外を懐にしてゐるだけだ。それだけが全財産だつた。

――だが、こんなことは覺悟の前ではないか？　僕だつて若い男だ、明日は明日の日が照らう――

城木のやうな弱い性格の青年にしても、非運のどん底に落ちて見ると、捨鉢な勇氣も出るのだつた。

さう投げやりに呟いて、久しぶりでたつた一人の部屋に、彼はぐつたりと眠りに入つた。

翌朝、朝飯が濟むと、昨日の番頭が、揉み手をしながら這入つて來た。

『えゝ、お客樣へ――えゝ、お寒いことでございますな――今日は止むかと存じましたら、相變らずじめじめした天氣で、えゝ、さぞ御退屈さまでございませう。これでは御用向にも御見物にも御不便で――えゝ、そこで、實は申し上げ兼ねるのでございますが、實は其何でございまして、えゝ、當地もめつきり不景氣でございましてな、どうもやり切れませんやうな次第で――申上げ兼ねますが、若し、長く御逗留でございますなら十日分でも二十日分でも、お見込みの日數だけの宿賃を、えゝ、御宿泊料を前以ておつかはしが願ひたいのでございまして――いえもう、お疑ひ申すの、不安に思ふのといふのではございませぬが、たゞ今も申上げます通り、何分火の消えたやうな始末で――』

城木はペラ〳〵と喋り續けてゐる番頭を遮つた。

『わかりました――』彼は床の間の亂れ函から背廣の上衣を引き出して、内かくしから財布を拔いた。

『こゝに二十五圓ありますが、これを取つて置いて下さい』

番頭は五枚の紙幣をひどく器用な手つきで數へて、戴いて、

『有難うございます――えゝ、ではお預かり致します。四圓五十錢といたしましてざつと六日分――たしかに頂きました。もう氣の利かない女中どもでございまして、どうぞ御遠慮なくお叱りを――おや、お火がこれではお寒うございませう』

番頭は火鉢の炭をつぎ足して、ペコ〳〵お辭儀をして出て行つた。火鉢に火が多くなつても、城木は倍も寒くなつた。もう財布には二圓ばかりしかなかつた。

それでも、翌日はカラリと晴れ上つてくれたので、旅烏の身には何より有難かつた。城木は出來る限り、これまでのやうな職業に就きたくはなかつたが、さりとて肉體的な勞働も不可能な氣がしたので、朝刊の廣告欄で見た二三の事務員の口にありつかうと訪ねて行つたけれど、この都にも人間はあまつてゐた――彼が行つた時にはもうとうにその口はみんなふさがつてゐた。

その翌日も心齋橋、堂島、天滿と、求人廣告の口を訪ねまはつて、すべてあぶれて、ぐつたりしてわが宿へ歸らうとする途中、とある裏町の電柱に、たつた今貼られたばかりらしい廣告が、たそがれの光の中に眞白に見えた。

新案消火彈販賣外交員募集

新案消火彈の五文字は赤インキで書かれてゐた――場所もつい近間だつた。

――十分の後、城木は青塗の理髮店の二階にある特許商會といふ不思議な名の事務所を訪ねた。蟹

のやうな眼付の主人は早速城木の申し込みを承知してくれた。城木は法學士を名乘らなかつた。保證金を入れねばならなかつたので、時計をその代りに渡した。

『立派な時計だ』と主人は渡された銀時計をひねつてゐた。

城木は苦笑する氣にもならなかつた。

毒牙

時と日は過ぎて行つた。

生あたゝかい雨が山の手の靜かな庭の梅の花を朽ちさせて、それがあがるとぽつかりと暖かい日和が續いた。

まだ春といふには早かつたが、空の色に、小鳥の聲に、沈丁花のにほひに、その先ぶれは感じられた。夕方には、夕映が高く淡く流れて、昨日まで人をふるひ上らせた凧のかはりに、肌寒くはあるが和らかい微風が濕りを含んで吹いて來た。

――そんな良いある夕方――

東京牛込の住宅町の横町を、一人の男が歩いてゐた。鳥打ちを破つて、外套を着ずに、小ざつぱりした銘仙絣を着て、細い黒いステッキを振りながら、ブラリ〳〵と歩を進める。少しならず醉つてゐるらしく、足元にまつはりついて來る仔犬を、邪慳に蹴りとばして、泣き叫んで逃げるのを冷笑をうかべ

て眺めるのだつた。

――それは青木だつた。酷薄なうすい唇は、冷笑ふと却つて凄さを添はせた。

青木はもう仔犬にはかまはずに、同じやうな小さな借家が、あせた黒板塀を並べてゐる新道を、更に小一町も進んだ。そしてとある形ばかりの門の潜戸を、ガタピシいはせて開けて這入つて行つた。その門の表札には青木滋と彼の名がしるされてあつた。

突き當りの玄關の格子戸の中は、もう黄昏といふのに灯もなかつた。

『チョッ！　しやうがないお姫さまだ。夕方になつても電氣をひねることも御存知がない――』

青木は舌打をして、蘿摩下駄を脱ぎすてゝ上にあがる。二疊の次が六疊――そこは居間でもあれば客間でもあるらしく、細目に開いてゐる襖の向うにもう一間、小間があるだけだつた。

青木は電氣をひねつた。

大形の飴色の瀬戸火鉢のそばには、メリンスの派手な座蒲團が二枚敷かれてゐたが、人氣はなかつた。

『お嬢さん――今、歸りましたよ』と、青木はちよいと眉を顰めるやうにして、やゝ聲高に、次の間の方へ行つた。

しかし、それに答へる聲は、勝手元の方から聞えた。

『駄目よ――來ては駄目よ。お風呂に這入つてゐるのよ――』

『行きはしません』青木は、女らしい答へをみだらな微笑できいて、そして手短に應じた。彼は鐵瓶の

湯を急須に移すと、さもうまさうに二度湯呑みを空けた。

彼は湯殿の湯を使ふ音が、手狭な家だから聞えて來るのを、きゝのがすまいとするやうに耳を澄ましたゝ。目のまはりの筋肉の淺猿しくゆるみ、唇は引きゆがんだ。彼は心に悪どく呟いてゐるやうに見えた——

——湯の音は美しい肉體を想像させる——そして、その肉體をいつまで遠くから、眺めてゐなければならないのだ——

——彼の共棲者は——詳しくいへば德惠子は、彼女の冒險心のおもむくまゝに、この奇怪な青年と世帶を持ちは持つたが、まだ主從の權式を捨てゝはゐなかつた。あの不思議な曉方の約束通り、どこまでも彼を近づけることはしなかつた。會話の相手になつて、笑ひもし、怒りもしても、夜は小女と床を並べて、自分の小間で寢るのだつた。外風呂に這入るのは厭だといつて、この小さな借家にわざ〳〵風呂場だけ造らせたが、浴室が男臭くなるのが厭だといつて、彼をば錢湯に通はせる位の高飛車な暮しだつた。

青木はそれを辛抱してゐた。これ程の男がいつまでもさうした境涯に甘んじる筈はなかつたが、兎に角、時機を待つてゐるやうに見えた。そして殆どいやらしい目顏は彼女の前に見せようとはせず、たゞ彼女から毎日小遣をもらつては蠣殼町の方へ出かけるのだつた——彼にいはせれば、現代は投機時代だつた。投機師が政治を左右し、日本を左右し、世界を左右してゐるのだつた。で、彼は彼の全才力を傾

けて、大投機師となる決心を有してゐると德惠子に告げた。

『面白いわ。うちのお父さまだつて山師で相場師で、それで男爵だわ』

彼女は賛成した。そして毎日彼にいはせれば『小手しらべ』のために、米屋町に通ふべく便宜をあたへてゐるのだつた。

湯の音が途絶えた。そして次の小間との境の襖の隙がぴつたりとしめられて、長襦袢の胴をしめつけるらしい博多の下じめの音が、キユツ〳〵と聞え始めた。

衣ずれの音がしなくなつた。

『とし、洋食が來たらいつものやうに運んで頂戴』と、さう小女にいひつけて、德惠子は青木のゐる部屋に這入つて來た。

彼女は、湯上りのせゐもあらうが、あの頃から見ると、また別な美しさを見せた女になつてゐた。不思議な、祕密生活に生きることが、彼女の日常氣分をそゝり立てゝゐるためか、目は一層黑み輝き、頰に生彩が添はり、唇は感受的紅さに燃え、胸は肉づき、腰に丸みと張りとが現れた。洗髮を豐かに散らして、荒い柄のお召に、羽織なしで綠へ朱の入つた帶をしめてゐたが、その立姿には、深窓令孃であつた彼女が見せなかつた、別種のあるものが匂つてゐた。

青木は魅されたやうな目で眺めた。

『おや、髮をお洗ひになつたのですか？』

『えゝ、久しぶりで洗つたの――一人で――よごれも何も落ちはしないわ』

徳惠子は坐つて、相手を見て、眉をひそめた。

『おや、あんた、お酒を飲んで來たのね？』

『……』

青木は答へるかはりに、目をそらさずに、たゞ微笑した――破廉恥な微笑だつた。

『どうして約束を破つたの？　どうしてお酒なんぞ飲まなけりやならなかつたの？』と、徳惠子は責めるやうにいつた。

青木は袂をさぐつて、紙卷を取り出すと、あさく喫つた煙をかたはらを向いて、輕く吹いた。

『つまり、どうしても飲まずにゐられなくなつたんですよ――必要が人間に實行を强ひるんですね』

憎々しい程澄まし返つた調子だつた。

徳惠子は突然ひどく冷たい眼付になつた。

『あんたも駄目な人ね。たつた一月も經つか經たないうちに――』

『お嬢さん』青木は今までの荒々しい容子を急に消して、ぢつと徳惠子の目に見入つた。そして惱ましげな表情になつて、唇をふるはせるやうにしながら、

『お嬢さん――あなたは無理です――あなたは僕の意志の弱さをお笑ひになるけれど――』

『なぜ私が無理でせう？』徳惠子は相手が俄に調子をかへたのを、一種の警戒の目で見ながら呟いた。

『なぜといつて――そのお言葉からが無理です』青木はギラ〳〵輝く目で見入り續けてゐた。

『今日も僕はぼんやり米屋町をうろつき廻つてゐるうちに、ハツと考へ込んでしまつたのです――何を僕は僞つた眞似をしてゐるのだ――價があなたを瞞してお屋敷を連出したのも何のためだ――職業を捨て主人を捨てたのも何のためだ――誘拐罪をさへ恐れなかつたのも何のためだ――こんなところに來るためか――と、さう突然思ひつくと、もうぢつとしてはゐられなくなつたのです――僕の頭は苦痛でしびれさうになりました。で、つい醉ひを買つたのです。あなたは僕を弱いとお笑ひになる――弱いに相違ありません。しかし、もうこんな僞つた生活には辛抱がならないのです』

『まあ！』徳惠子は兩袖を胸にかき合せるやうにして身をかくした。

『どうして今の生活を僞りなぞといふんでせう？』

『お嬢さん』と、青木は紙卷をぐいと灰に突つ込んで、兩手をこまねいた――

『僕は大投機師になりたいの、金儲けがしたいの――そんな事ばかり並べてゐましたが、それはみんな自分を欺き、あなたを欺く手段に過ぎなかつたのです。ねえ、考へても見て下さい。あなたと一緒にかうした生活をしてゐながら、何の特別の親しみもなく、小遣を貰つて米屋町に通ふだけで、僕が滿ち足ることゝお思ひですか？　そんな他愛のない遊びをするために、僕が男一疋を危險にさらしたとお思ひですか？　僕はたゞほんたうの註文を出したら、あなたが騷いだり怒つたりなさらうと考へたので、今までぢつと堪へてゐたのです――いくら、姫さま育ちでも、あんまり察しがなさすぎる』

徳惠子は奥歯を嚙み締めるやうにして嘲りの微笑をうかべた——

『どうせそんなことをいひ出すかも知れないと思つてゐたわ。若しかうした生活が、あんたに辛抱がならなくなつたら、いつでもこはしてしまふ方がいゝぢやないこと？』

青木は兩手をこまねいたまゝ、嵐のやうな吐息をした——

『あゝ、あなたは何といふ惨酷な方だらう——そのやうに美しい唇からどうすればそのやうにひどい言葉が出るのでせう？』

『お、ほ、ほ、ほ、ほ』と、徳惠子は笑つた——甲立つた、險しい笑ひだつた。

『あんたも男よ、男の中でも、隨分鋭い男でせう——もうそんなお芝居は止めなさいよ。あんたは嘗つた筈ですわ——もう詰らないことをいふのは止めて、實生活の方へどし〳〵突進すると誓つた筈ですわ。その方がよつぽど得よ——女なんか、力のある男には千人だつて集まつて來るのだから——私、あの場合、あんたの不思議な勵まして、いやな家を飛び出すことが出來たのを、本當に感謝してゐるの。だからこの感謝を永久なものにして置かせて頂戴』

『だから僕も悶えたのです——しかし、もう駄目です。僕の理性は崩れくだけました。あなたが悪いのです——あなたが美しすぎるのです。あゝ、あなたはそんなに美しい——』

青木の瞳は狂つた犬のそれのやうに獣じみた光りで燃えた。

『あんたは醉つてゐるんだわ』

と、徳惠子は、さすがに獣的な視線から顔を反向けた。彼女はたしかに今のやうな場合が來るのは豫期してゐたに相違なかつたが、でも、さう怖れてはゐなかつた。青木は奇怪な氣性の青年だつたが——彼女とても彼の心にひそんでゐる邪悪の一切は知つてゐたが、しかし、要するに元の下人だつた。自分の威壓で、あるところまでは制御しうると考へてゐた。ところが、今夜の彼は、埒をたしかに越えてゐた——

『僕は醉つてゐます。しかし、酒にではない、あなたの美しさにです——あなたの殘忍、あなたのたかぶりにです——僕はもう何もいらない——やつぱし最初望んだやうに、どうしたつてその唇に觸れなければ——』

『ほ、ほ、ほ。大抵になさいよ。野心家といふものは、そんな欲望にまけては駄目よ』と、徳惠子はもう一度笑ひ消さうとしたが、駄目だつた。

青木は、突然、手を伸べて徳惠子の袂をつかんだ。

『お嬢さん、徳惠子さん、どうしてそんなに邪慳なのです！』彼は物凄いまでに充血した目で、ぐつと相手の横顔を睨んだ——

『僕はもう野心も希望も捨てました。あなたばかりがほしいのです』

徳惠子は袂を振りはなした。

その袂を更に強くつかんで、青木は引き寄せた。

『ねえ、僕は、德惠子さん、あなたの昔の戀人の、城木君とは少し違ふのだ――一度思ひ込んだら、死んでもやり拔くのが僕の流儀だ、――殺されたつて死なゝい蛇だ――どこまでもからみ付く――ねえ、もういゝ加減に許して下さい。僕だつて、あなたに手荒な目は見せたくない――あなたさへやさしくしてくれゝば、二人の間にどんな華やかな生活だつて咲くのです――僕は城木のやうに臆病ぢやあない。僕はあなたを喜ばせることを知つてゐる。僕はどんな激しい生活でも生き拔く術を知つてゐる――ね、德惠子さん――』

『失禮な！　お前は何をいつてゐるの？』と、德惠子は久しぶりで「お前」と呼んで、荒々しく袂を振り拂つて立ち上るのを、青木は嘲笑つて引き据ゑた。

『まあ、何とでも蔑すみなさい。しかし、今夜といふ今夜は、僕はもう鬼ですよ、蛇ですよ』

彼自ら呪つた言葉のやうに、青木の力強い、青白い手が彼女の首に卷きつかうとした。が、德惠子は拒んだ。爭ひをいどまれゝば死んでも負けないのが彼女だつた。

德惠子は荒々しく男を突き除けた。そして亂れかゝる洗髮を振りさばくやうにして、ツト立ち上つてもう一度次の小間に這入らうとするのを、青木は腰に手をかけて、

『まあ、坐つて下さい。僕が手荒なことをしたのは惡かつた。まあ坐つて下さい』と、口ではなだめる

やうにいつたが、强ひて力まかせにひき据ゑて、

『ねえ、德惠子さん、あなたと僕は、なる程以前は主從だ。しかし同時に、あなたは女で僕は男なんだ。ね、そこを考へて下さい。僕のやうな性分の男が、あなたを戀してゐればこそ、長い間かうしてたつた二人で住んでゐても、氣ぶりに淫らなことは求めなかつた。だが、辛抱にも程度がある。あなたのこの美しさを見ては、もう堪へてはゐられない』

『青木――自分を考へてごらん』

と、德惠子は自分の肩に手をかけて、ギウ〳〵と赤濁つた輝きを燃やしてゐる目でのぞき込む男を蔑すむやうに見返して乾いたひゞきでいつた。

『僕に自分を考へろツて？』と、青木は冷たく笑つたが、

『ねえ、あなたのその傲ぶりが、誇りが、僕にはあなたの美と魅力とを二倍にするのです――呼びすてになさい――いつまでも下人扱ひになさい――侮辱なさい。御自由だ、だが、あなたのその態度が、却

つて僕の情熱を煽るのだ。踏みなさい。蹴りなさい。僕はます〳〵あなたから離れなくなる――』

『きつと、氣が違つたのだわ。まあ、落着いて考へるがいゝわ』と、德惠子は冷たくなるばかりだつた。

『あんたは欲望をさう分裂させては損をするばかりよ。私から獲ようとするものを、さう慾張つては駄目だわ。ね、私から取れるだけお金を取つて、あの可愛いきみとでも一緒になる方が仕合せよ――』

『もつと侮辱なさい。どこまでも――だが、今夜といふ今夜は、今までの僕ではないのだ。あなたがこれまで見て來た世界の、家柄や金持の伴どもの、力弱い惡とは違つた、激しい氣持をお知りになるがいい。德惠子さん――』と、青木は荒い息ざしで、德惠子にすり寄つた。

女は嘲笑した。

『私に尊敬されたければ、あんたは自分の長所を――惡心を、もつととがらせなければ駄目よ。私はあんたが私といふものを利用して長沼家からどれだけゆすり取らうと、そんなことに容喙はしないわ。却つてあんたの惡い才能を尊敬するわ。だけど、今夜のやうな淫な小さい欲望に征服されたみじめなあんたは見るもいやだわ。そんなことは平氣だわ。まるで草双紙の道中の籠かきなんぞのやうに見えることよ。もつとしつかりするがいゝわ』

『ふん』と、青木は憎々しげにいつた。

『あなたにも似合はない。欲望は複雜な程近代的なのだ。僕は勿論あなたが氣がついてゐる通り、長沼

家をあきらめはせん――その家の令嬢とかうして同棲してゐることによつて得た權利と力とを捨てはしない。だが、あなたを完全に所有しなければ、その權利も力も大抵なものなのだ。あなたを完全に所有した時、それは二倍にも三倍にもなる、――僕はあなたが考へるやうに單純な男ではないんですよ』

『でも、同時に、人間は望みを大きくしすぎても、あぶはち取らずになることよ』と、德惠子は下らなかつた。

『あんたは自分をあんまりえらいものに考へすぎてゐるらしいわ。今いつたやうな、二重の欲望は、あんたより二倍の力を持つた人間が望むべきことだわ。だから自分といふものをよく考へた方がいゝといつてゐるのよ』

『あなたの口がどんなに鋭からうとも、僕には最後の力があるのだ――僕は腕力でも、あなたを屈服させることが出來るのだ――どんなに聲を揚げようと、一つ家に共棲してゐる若い女と男とのいさかひに喙を容れるものはないからね。德惠子さん――もうそんな不愉快な、いかつい顏をし續けて、あとあとまで氣まづい種を殘さうより、笑つて見せて下さい。ね、後生だ』

青木の腕はふたゝび彼女の頸にかゝつた。

――そして兇惡な暴行が始まらうとした。

しかし、德惠子は屈しなかつた。彼女は獸そのまゝのやうな無恥な物狂ほしい目と、淺猿しい酒の香

に穢れた荒々しい呼吸とを避けながら、相手のだきしめからのがれようと跪いた。彼女は女だつたが、死力で防いだ。青木はどこまでも拒まれて、いつの間にか、憤怒を抑へることを忘れたやうに見えた。もう何の手加減もなく、とう〳〵女の背に亂れてゐる洗髪を手にからんで引きずりたふしたりした。

『どこまでも反抗し給へ――あばれ給へ。それだけ餘計苦しむだけだ――は、は、は。――』

青木は德惠子よりも息を切らしてゐた。ハア〳〵と炎のやうな熱い息を嵐のやうに吐きながら、纖枯れた咽喉で罵つた。長目な髪は汗にぬれた額に亂れ、胸は開張かり、黒髪をつかんだ手先はブル〳〵と顫へてゐた。

德惠子はわが身を守つて、俯伏に膝を合せて突つ伏したまゝ石のやうにしてゐた。生え際は血がにじむ程痛かつたが、彼女はこらへた。はじめて肉體的にかうした苛責を受けて、苦痛そのものをどこまで忍べるか、味はひ拔いて見たいやうな、不思議な餘裕さへまだ殘つてゐた。

――とう〳〵獸が本性を現したわ。もうこの男ともこれでおしまひだわ！

彼女は心に呟いてゐた。事實、もうこゝまで來れば、今夜のうちにも、明日になれば勿論、このまゝ此處にゐるわけには行かなくなつたのだ。

『ねえ、德惠子さん、僕は男子で、あなたは女なんだ――もう大がいにし給へ』青木は喘ぎ續けてゐた。だが、女性の不思議な自己防禦の力が、いつまでも德惠子を動かぬ石にしてゐるのを見ると、彼はすつかり業が煮えて來たらしかつた。

『ふん――』と、兇暴な、血走つた目で、相手の、白い、豐な項をぢつと見据ゑながら、彼はかみ緊めた齒の間からいつた。

『ぢやあ、あなたはかうしたまゝで死んでもいゝと覺悟をきめたのですな。は、は……だが、さうたやすく殺しはせんよ。あなたがその積りなら、こつちにも考へがあるんだ。恥を二倍にし、苦痛を二倍にした上でなけりやあ殺しても上げはしない――よし！　見て居給へ。』

青木は何事か決心したらしかつた。

彼は片手で女をねぢ伏せたまゝぐいと勝手元の方に顎を向けて、筒走つた聲で叫んだ。

『おい、おい！　ちよつと來い』註文の洋食は屆いたものゝ、奥の容子がたゞならぬので、出兼ねてゐた小女は、青木が呼ぶのをはつきりきいたが、すぐに返事が出なかつた。

青木の聲は一そう險しく甲高くなつた。

『おい！　聞えないか！』

小女はおづ〳〵と、背中を丸くするやうにして、襖を細目に閾際にかしこまつた。彼女の目は中を見なかつた。

『机から紙とペンを持つて來い』

青木は、小女がもたらした書簡箋へ、片手で二三行サラ〳〵としたゝめた。

『お前はこれをすぐに神樂坂まで持つて行くんだ――坂上の大西探偵事務所に行つて、今野といふ人へ

『屈けるんだ。いゝか』

小女は、小さくなつて、その手紙を受けると、出て行つた。

『もうじたばたしないでもいゝですよ』と、青木は嘲るやうにいつた。

『いろ〳〵な芝居がはじまるから、まあ落着いて見てゐたまへ』

彼は淫な脅迫が、結局、效を奏さないのに諦めたらしかつた。今までしつかりつかんでゐた黒髪から手をはなして、荒つぽく女を突き退けるやうにした。

徳惠子は起き直つた。髪を背後にさばいて、やゝ亂れた前をかき合せた。そして少し釣上つた、熱つぽい目で、壁の方を見た。涙も浮かんでゐなければ、怒りさへも見えなかつた。青木は憎々しげに女の背を見つめて、わなゝく手で紙巻を取つて火をつけた。

青木は壁の方へ目をやつたまゝでゐる徳惠子の後ろ姿に、赤濁つた瞳を据ゑながら、犠牲に毒矢を投げかける肉食人のやうな微笑を續けてゐた。

『話もこゝまで來てしまへば、僕も遠慮會釋もせずともよくなるから、却つて萬事好都合さ。芝居の筋書きが複雑になると、役者はあべこべに樂々と演つて行ける――ねえ、もうかうなれば一瀉千里だ。先刻あなたが教へてくれた通り、長沼家に對してだつて、すぐにメスをづぶりと入れる。あの慾張りの金持を相手に古風に宗俊をつとめながら、美しくつて勝氣なあなたを向うにまはして、ゆつくりロメオか

役割を樂めるといふのだ。早いはなしが、今夜これから、どんな芝居がはじまるか、まあ、ゆるりと御見物なさるがいゝ』

徳惠子は壁の方を見つめたまゝ、こんな悪罵をきゝながらも、肩さへも聳やかさず、ほんの少し唇を歪めたまでだつた。そして、切れきらぬ水のしづくが、洗髪のさきをまだぬらしてゐるのが氣に懸るやうに白い細い指でさはつてゐた。

『ふん、あなたは僕を嘲つてゐますね、蔑すんでゐますね――毒のある蛇にまきつかれては、どんな雌豹だつて勝てつこはないのだ』

徳惠子ははじめて冷たく微笑した。

『獣同士なら知らないこと、生憎私は人間だわ』彼女の調子に、戯れるやうなひゞきさへまじつてゐた。

青木は冷笑を返した。

『まあ〳〵、その人間さまが、ぐる〳〵と咽喉を巻きしめられて、とんだ悲鳴をお揚げにならぬがよい』

――青木はもういはなかつた。彼は紙巻を喫ひをはると、ツト立ち上がつて、押入から背廣を引き出して手早く着かへはじめた。そして、着がへがすむとまた火鉢の前にどかりと胡座を掻いて、新らしい煙草をつけ、時々柱時計に目をやつてゐた。

徳惠子は動かなかつた。彼女は今まであつた事、現に起つてゐる事、これから先に起らうとする事――その一切に少しも關心しないやうに、手近にあつた夕刊を引き寄せてページに目を通しはじめた。

青木の瞳には、怒りと蔑すみとが明らかに浮かんでゐた。

――今に見ろ！　と、さうはつきりと、彼の冷たい視線が言つてゐた……

と、間もなく、靜かな夜の巷路を、ゆるやかな速度で近づいて來る自動車の響きがきこえた。青木はき丶耳を欹てた。

自動車は、この小家の前で止つて、二三人の靴音が聞え、格子戸が荒々しく開け閉てされた。

『おい、青木君――』と、野太い皺枯れた聲がした。

『上り給へ』と、青木は坐つたまゝで答へた。

二人の男が、粗野な鬱ざはりを立てゝ部屋に這入つて來た。いが栗頭の、角顴の、小さい鋭い目をした八字髭の小男と、ひどく嚴丈な身體の、髪をクシヤ〳〵に伸ばした頬骨の張つた青年とは、彼等の闖入を振り向いても見ぬ美しい女と青木とを見並べるやうにして突ツ立つた。

『御苦勞だつた』と、青木は蒼白い頬に形ばかりの笑みを浮かべて迎へた。そして――

『今野君』と、小男に向つて、

『君は僕とちよいとそこまで行つてもらひたいんだ』

『うん、どこへか同行せよとのことだつたから、タクシイを持つて來たが――』と、小男は柄に似合はぬ太々しい聲で言つた。

『いろ〳〵面倒だつた――そして志田君、君にも役不足だらうが、留守居役を引きうけてもらひたいの

さ』と、青木は立ち上りながら言ふ。

頬骨の張つた男はいぶかしげに、

『留守居役？』

『うん、そこにゐなさる淑女を保護してゐてもらひたい。僕達が歸るまでこの家からお出しゝてはいかんぜ。堅く賴んだぜ』

『お安い御用だ』志田と呼ばれた青年は、今まで青木が坐つてゐた座蒲團の上にどかりと腰を下した。

『安心して行つて來給へ』

德惠子はさうした有樣を、どこを風が吹くかと、相變らず振り返つて見ようともしなかつた。

――青木と今一人の男どを乘せた自動車は、すぐに重苦しい響を立て始めて、やがていづくともなく遠のき去つた。

殘された顴骨の目立つた青年は六かしげな表情で、毛蟲のやうな眉根を寄せるやうにしながら、プカリプカリと安煙草の煙を吐いてゐたが、白目がちな眼は絶えず德惠子の方に注がれてゐた。

德惠子は、先程から同じ態度を執り續けてゐた。こちらに横顴を見せるやうにして、片手を疊に、夕刊に眼を落してゐたが、その化粧に白い頬のあたりは、濡羽衣の洗髪に半かくされてゐた。

青年はあでやかな姿に眩惑されたやうに、だん〳〵いかめしげた顴がゆるんで、とう〳〵、火鉢の中